翅田大介

カバーイラスト・キャラクターデザイン
津路参汰（ニトロプラス）

イラスト
Ryuki

神話大戦

ギルガメッシュナイト II

-Gilgamesh Knight-

HJ文庫

目次

序章　闇ノ吐息
一章　夜ト夜ノ合間
二章　巨狼　ト　獅子
三章　愉快　ナ　確信犯
四章　狂乱　ト　共演
終章　宣告　ト　宣言
あとがき

序章　　闇ノ吐息

涯はての知れぬ暗くら闇やみの奥おく底そこに、無数の画面が浮うき上あがって弱々しい明かりを放っていた。

並んだ画面を眺ながめるのは、屈くつ強きような体たい躯くを高価なスーツで包つつんだ男であった。髪かみに白いものが多く混じっているが、その表情には一いつ切さいの衰おとろえ、弱々しさは見受けられない。刻まれた深い皺しわは、むしろ男の強きよう靭じんさを引き立たせているようにも見える。

物ものの部べ昴こう造ぞう。

各国に影えい響きよう力りよくを持つ国連の魔ま導どう工こう学がく諮し問もん機き関かん『カルディア委員会』の代表。世界の表と裏とを問わず、あまりに有名な男であった。

物部の鋭するどい目が眺める画面では、幾いく多たの戦いが進行中だった。

虹にじ色いろの後光を背せ負おった者たちが、地を裂さく剣けんを振ふるい、空を貫つらぬく矢を放ち、巨きよ大だいな獣けものを使し役えきする。戦せん闘とうフィールドとなった何処いずこかの寺社仏閣は瞬またたく間まに壊かい滅めつしてゆき、まるで神話の戦いが顕けん現げんしたかのようだ。

魔導工学先進都市・新京都の再現史し跡せきで行われる『摩天の夜宴バビロン・ナイト』の光景であった。魔ま力りよくの絶対支配権たる神性を有する〈聖楔者ヒエロス〉同士の戦い。神々の代行者たちの戦いは、正しく神話の再現であり、数多あまたの神格の入り混じった神話の再編でもある。

カルディア委員会の目下最大の仕事は、この超ちよう常じようの戦いである『摩天の夜宴』の管理運営であった。無限の魔力を産出させる魔力湧ゆう出しゆつ炉ろ〈ＢＡＢＥＬ〉――その完成に必ひつ須すたる《天命の書版》を再生させるべく『摩天の夜宴』の進行に精力を

注いでいる。
　その管理進行の総そう括かつともいえる物部は、いまも新京都の各地で行われている戦闘を一心不乱に見つめているが、その視線は数百光年を旅してきた星光のごとく、温度の抜ぬけきった冷ややかな眼光であった。
「――今夜も盛せい況きようね」
　音質は幼いのに、響ひびきは穏おだやかな淑しゆく女じよめいた、不思議な声が投なげ掛かけられる。
　物部がチラリと目を向ければ、暗闇の中から小こ柄がらな人ひと影かげが光の領域へと姿を現した。
　背せ丈たけはせいぜい十代中ちゆう盤ばんの少女。しかしその身体からだは豪ごう奢しやで洗練されたドレスで飾かざられていた。さらに、時代がかったヴェール付きの帽ぼう子しを被かぶっている。
　一歩間ま違ちがえれば行き過ぎたコスプレであるが、帽子の端はしから溢あふれる鮮あざやかな銀ぎん髪ぱつのせいか、かろうじて垣かい間ま見みえる口元に浮かぶ優美な微笑ほほえみのせいか、まったくといっていいほど違い和わ感かんがない。
「暗い所で見入ると、目が悪くなってしまうわよ？　部屋を明るくして離はなれてみないと」
「……用はそれだけか、アスタ」
　わずかに見える顎あごの輪りん郭かくだけでも絶世の美少女だと万ばん人にんに確信させる少女――アスタに対し、物部は鋭くも温度の感じられない瞳ひとみで一いち瞥べつし、すぐに画面へと視線を戻もどしてしまう。
「あら、ねぎらいの言葉くらいは掛けてくれてもいいのではなくて？　せっかく上司の健康に気を遣つかったのに」
　揶や揄ゆするアスタに、物部はもう目を向けることもなく画面の中の戦いを注視する。
　肩かたを竦すくめて文句を言ったアスタであるが、この程度のやり取りはお馴な染じみなのか、すぐに何事もなかったように歩み寄り、

画面の中の戦いへと顔を向けた。
「あらかた、纏まとまるべき者たちは纏まったみたいね」
　画面の中の戦いの多くは、集団戦の様相を見せていた。
　カルディア委員会は最低限の戦闘ルールを『七しち聖せい条じよう約やく』として定めて〈聖楔者〉たちに伝えているが、そこには一対一でなくてはならないとは記していない。
『摩天の夜宴』の最終目的はただ一人の勝者――すべての神格を回収した〈聖楔者〉を生み出すことだ。最終的にただ一人が生き残れば良く、そこに至る道筋は限定しないし、〈聖楔者〉同士が束つかの間の協力関係を築くのはカルディア委員会にしても予想の範はん疇ちゆうであった。
　世界に散らばり、あらゆる神話体系の基き礎そとなった《天命の書版》の欠片かけらたち。そこに宿った神格が様々に翻ほん訳やくされようと、それぞれの神格の間には親和性がある。〈聖楔者〉が親和性の高い他ほかの〈聖楔者〉と協力しあうのは当然の成り行きだ。
　束の間の協力関係で勝ち残った後に雌し雄ゆうを決する。
　強力な〈聖楔者〉を王と仰あおいでお零こぼれを狙ねらう。
　純じゆん粋すいに力で屈くつ服ぷくさせて従わせる。
　カルディア委員会は、いずれの戦略も否定しない。大事なのは翻訳された神話を再編・再統合し、《天命の第二書版トウプシマテイ・セカンダリイ》を生み出すこと。これに尽つきるのだから。
「〈聖楔者〉たちは、大きく『天使』と『魔ま王おう』の勢力に分かれてきたようね。共きよう闘とう状態の小集団も多いけれど、『夜宴』も始まってもう二週間。ふるい分けも進んできたわね」
　アスタが歌うように言葉を紡つむぐが、物部はまったく反応しなかった。
　物部の無反応を気にした様子もなく、アスタは彼かれの横から首を伸のばして画面を眺めた。そのうち一つの画面に目を留め、ヴェールの端から覗のぞく柔やわらかな唇くちびるで流りゆう麗れいな弧こを描えがいた。

「どうやら、あの子たちは順調に勝ち進んでいるようね」
　アスタが目を留めた画面では、一人の男が地面に巨大な杖つえを突つき立たてていた。その杖を中心として地面が流動する液体金属へと変へん換かんされる。戦場となっている清水寺の再現史跡の広大な敷しき地ちが金属光こう沢たくで覆おおわれ、実体幻げん像ぞうである仏閣が即そく座ざに光ひかり輝かがやく魔力に還かん元げんされ、朽くちかけたボロボロの姿が露あらわになる。
　物体変性、錬れん金きんの権能。カルディア委員会のデータによれば、錬金術の始祖神『ヘルメス』を顕現神格とする〈聖楔者〉だ。
　清水の舞ぶ台たいがあった高台に鎮ちん座ざするヘルメスの〈聖楔者〉が、大量の液体金属を津つ波なみのようにけしかける。無数の鋭い武器となり降り注ぐ白銀の雨の中を、一人の少年と二人の少女が連れん携けいをとって駆かけ抜けていく。
《全き人間エンキドゥ》の神格を宿した宿すく儺な星せい一いち郎ろう。
《至高の聖王ギルガメッシュ》に選定されたディーナ・チャレンジャー。
《戦せん嵐らん神しんニヌルタ》に選定され『素盞嗚尊スサノオノミコト』を顕現神格とする忌いみ寸き刀と羽う華か。
　協力態勢をとる三人の〈聖楔者〉が、広域に錬金の権能を発揮するヘルメスの〈聖楔者〉へと迫せまってゆく。
　日本神話の戦神素盞嗚尊の神格を顕現させる忌寸刀羽華が、鳥を象かたどった随ずい騎きの上で大剣を掲かかげ、凄すさまじい風を招いている。局所的な台風といっていい強力無比な風圧が敵〈聖楔者〉の液体金属を押おし返かえし、味方の背に追い風としてその速力を底上げした。
「森の王討とう伐ばつの再来というところかしら？　神の森の守護者を打うち倒たおすのに、《聖王》は神の風の助力を得たものね」
　アスタの声が聞こえたわけではあるまいが、ヘルメスの〈聖楔者〉は押し返された液体金属――大量の水銀をむしろ一点へとかき集め、

巨大な竜りゆうへと形成した。
「そして、竜フンバババを押さえるのは――」
　大地にヒビを入れるほどの金属の巨きよ体たいが、すさまじい速度で爪つめを振るう。狙うのは黒い大おお槍やりを携たずさえた金きん髪ぱつの少女、《聖王》の神格に選ばれたディーナ・チャレンジャーだ。
　豪ごう風ふうを物ともしない銀色の一いち撃げきはだがしかし、少女の金髪に触ふれる寸前で横合いから受け止められた。
　肌はだに星光の如ごとき魔ま力りよく励れい起き光を――輝く楔くさび形がた文字を浮き上がらせた少年が、水銀竜の巨きよ腕わんをがっちりと掴つかみ止める。さほど筋肉質にも見えず、むしろ細身とすら見えるのに、少年はぞわりと黒くろ髪かみを逆立たせ、体格差と重量差を膂りよ力りよくのみで拮きつ抗こうしている。
《全き人間》の神格を宿した、宿儺星一郎である。
　神造人間――『完かん璧ぺきな人間』の神格を宿す故ゆえか、星一郎の身体能力は他の〈聖楔者〉と比べても隔かく絶ぜつしている。〈聖楔者〉は潜せん在ざい的てきな身体能力を『英えい雄ゆう』と呼ばれるに相応ふさわしいほどに引き出されているが、星一郎のそれはもはや『超ちよう人じん』と呼ぶべきだろう。
　ヘルメスの〈聖楔者〉も、身一つで己おのれが操あやつる水銀竜に対たい抗こうする星一郎に驚きよう愕がくしている。
　その驚愕の隙すきを、《聖王》の〈聖楔者〉は見み逃のがさなかった。
　手にした大槍、借り受けた『神しん槍そう』の神格を顕現させた権能武装ブリューナクが変形し、三さん叉さとなったその穂ほ先さきで眩まばゆい光が瞬まばたいた。
　紫し電でん一いつ閃せん。
　ここまで液体金属で攻こう撃げきを防いできたヘルメスの〈聖楔者〉だったが、とうとう神しん威いの具現とも言える雷らい撃げきがその身に襲おそい掛かった。

がくりと膝ひざを突くと、ヘルメスの〈聖楔者〉が手にしていた杖、錬金の力を振るうための権能武装が形を失い、金属装そう丁ていの一冊の本へと戻ってしまう。

同時に、星一郎が押さえていた水銀竜も光沢を失い、土ど塊かいとなって崩くずれ去さった。

「決着ね」

神格を宿した本型ストレージ魔導デバイス〈第二書版セカンダリイ〉がディーナ・チャレンジャーの大槍に貫かれ、宿った神格が無数の楔形文字の羅ら列れつとなって権能武装に吸収されてゆく。

他の画面でも、勝者が敗者の神格を吸収している。

刻一刻と、太古に分かたれた神格たちが再編され統合されているのだ。

「素す晴ばらしいわ。〈聖楔者〉たちの魂たましいが昂たかぶれば昂ぶるほど、永い時の中で錆さびついた神格は覚かく醒せいしてゆく。〝祭り〟には、直ひた向むきで純粋な感情の昂ぶりが何よりも必要ですものね」

戦いの後始末――といっても再現史跡の実体幻像を展開し直すだけだが――の報告を淡たん々たんと受け取っていた物部が、ようやくアスタへと目を向け、彼かの女じよの言こと祝ほぐような美声とは正反対の事務的な声で告げた。

「その戦いを十全に遂すい行こうさせるのが我々カルディア委員会の務めであり、障害を排はい除じよするのがお前の役目だ。こんなところで油を売っている時間はないはずだが？」

「人生には遊びもないと息苦しくなっちゃうわ」

「言っていろ、魔ま女じよめ」

ここまで何ら感情を浮かべなかった物部であったが、アスタの揶揄に対してつまらない冗じよう談だんでも聞いたかのように口くちの端はしを歪ゆがめた。

「人生などと宣のたまうのなら、短い生の中で懸けん命めいに働く真似まねくらいしたらどうだ」

「短い生だからこそ、遊び心が大事なのだと思うのだけれどね」
　アスタは肩をすくめると、軽い足取りで闇やみの中へと戻っていく。
　豪奢なドレス姿が闇の向こうに消えるのを見届け、物部は再び画面に向かい合った。

一章　　夜ト夜ノ合間

1

　宿すく儺な星せいーいち郎ろうは、自分はごく普ふ通つうの十六歳さいの少年だと思っている。
　……などというと、必ず話した相手から「嘘うそをつけ！」と怒おこられるのであまり口にしないが、星一郎はそう自じ認にんしている。
　確かに、普通の少年と言うにはいささか面めん妖ようで不可思議な環かん境きようで育ってきたのは間違いない。十年前に死にかけてからこちら、奇き妙みようで奇き矯きような人間たちに囲まれて過ごしてきた。
　だが、ちょっと考えてみて欲ほしい。
　特とく殊しゆな事態に巻き込まれた人間が、皆みなが皆特とく殊しゆな人間になるものだろうか？
　周りの人間が変わっているからといって、皆が皆変わり者になるものだろうか？
　だから星一郎は、自分の置かれた環境にかかわらず、内面は普通の少年のものだと思っている。
　……だが。
　没ぼつ個こ性せい的と思っている星一郎だが、自分が他人ひとより少しだけ我が慢まん強づよい性格だと、そう認めるに吝やぶさかではなかった。
「貴様は間違っている！」
「間違っているのはあなたよ！」
　星一郎の眼前では、二人の少女が端たん整せいな顔を突き合わせて睨にらみ合あっていた。
　一人は、金きん髪ぱつ碧へき眼がんの凛りんとした雰ふん囲い気き

の少女。
　もう一人は、艶あでやかな黒髪が美しい清せい楚そな雰囲気の少女。
　タイプは違ちがえど、美少女と呼んで何ら差さし支つかえのない二人である。怒った女性などは概がいして見苦しく見えるものだが、睨み合う姿も絵になるのは、美少女の役得であろう。
　しかし、見た目はともかく、耳に響く甲かん高だかい声を延々三十分近くも聞いていれば辟へき易えきしてくる。それでも内心を顔に出さず、じっと彼女らの罵ば詈り雑ぞう言ごんの応おう酬しゆうに逃にげ出さず同席するあたり、自分は本当に我慢強いと、星一郎は自分で自分を褒ほめてやりたい気分でいっぱいであった。
「星一郎！　お前もガツンとこのだらしない尻しりの女に言ってやれ！」
　金髪碧眼の美少女、ディーナ・チャレンジャーがこちらに顔を向けて同意を促うながす。己が騎き士しを見み詰つめる視線は、『正義は我にあり！』とばかりに揺ゆるぎなく、彼女の青い瞳は自負と自信で蒼あおく燃えていた。
「星くん！　この無計画な胸がご自じ慢まんの見苦しい女に引導を渡わたしてあげて！」
　黒髪黒瞳の美少女、忌いみ寸き刀と羽う華かもこっちを見詰めてくる。幼い頃ころからの幼おさな馴な染じみに向けられた顔には、『真実を教えてあげるのも優やさしさよ』と、優しく教え諭さとすような微び笑しようが浮かんでいた。
　ただし、どちらの額にも、かなりはっきりとした青筋が浮かんでいたが。
「星一郎！」
「星くん！」
「……分かった」
　星一郎は重々しく頷うなずいてコンロに点火した。
「……」

「……」
　二人の少女の視線の先で、フライパンがジリジリと熱せられてゆく。
　星一郎は卵を片手で次々に割ってフライパンに投入し、菜さい箸ばしでかき混ぜた。
『ああっ!?』
　いがみ合っていた少女二人が異口同音に落らく胆たんの声を上げた。
　星一郎はそんなディーナと刀羽華の反応など気にせず、三枚の皿に出来立てのスクランブルエッグを分配した。
「星一郎！　なぜしっかり焼いた両面焼きでないのだ!?」
「星くん！　朝の卵は半熟の目玉焼きでしょ!?」
　虐ぎやく殺さつの蛮ばん行こうを目まの当あたりにしたような非ひ難なんを浴びせかける二人の美少女は、お互たがいのセリフを耳にするや再び睨み合った。
「……朝は目玉焼き。日本人らしい発想だな。型にはまれば安心する、小さな性しよう根こんが丸見えだ」
「……卵を両面焼きだなんで考えられないわ。繊せん細さいさを理解できない、大おお雑ざつ把ぱな欧おう米べい人じんの悪い見本みたいな食べ方だわ」
「何を!?」
「何よ!?」
　二人はすぐにまたガルルグルルと唸うなり合う。
　毎朝毎朝、よくもまぁ些さ細さいな理由でいがみ合えるものである。
　けれどこんな彼女たちも、いざ戦闘になると思いの外に息が合うのだ。昨晩の『夜宴』も、最低限の言葉だけで最高の連携をしてみせた。
　それが一晩経たったら、この有様である。飽あきもせず相手をし合う二人の仲の良さに、星一郎はおざなりな拍はく手しゆを送ってやり

たくなる。
　ただし今回は、拍手する代わりに、平手を二人の脳天に落としてやった。
「ふぎゅっ!?」
「にゃわっ!?」
「……冷めるから、早く食べてね？」
　にっこりと笑え顔がおで星一郎は告げる。
　エプロン姿の星一郎の圧力に、二人は仲良くこくこくと頷いた。普ふ段だんは星一郎に無理難題をふっかける少女たちだが、こと家事に及およんでは発言力は皆かい無むである。
　卵の食べ方でいがみ合っていた二人であったが、いざ箸はしとスプーンを持つと文句なく星一郎の用意した朝食を平らげてゆく。これならいがみ合う必要はないじゃないかとは思うが、星一郎はそのことについては黙だまっていた。
　なぜなら、星一郎は我慢強い性格だからだ。
　女ばかりの家族構成で育ってきた星一郎にとって、我が慢まんと忍にん耐たいは必須のスキルであった。
「……なんというか、お腹なかいっぱいって感じだな……」
　朝食を摂とり終え、星一郎は肩をごりごり鳴らしながら食器を洗う。作ったのが星一郎なのだから片付けは女じょ性せい陣じんに任すべきかもしれないが、二人の家事能力は皆無というより極大のマイナスであった。それならばさっさと自分でやった方が余計な手間もかからないと、星一郎はこの手の能力を彼女たちに要求するのをすっぱり諦あきらめていた。
「星くん、今日は予定が空いてるわよね？」
　星一郎の淹いれた緑茶を啜すすりながら刀羽華が言った。さすがにお茶ぐらいは自分で淹れられるのだが、この幼馴染み（とその妹）は「星くんが淹れた方が美味おいしいから」と言って、昔から急きゆう須すには一切手を触れずに丸投げしている。
　紅茶を嗜たしなむディーナも同様である。もっとも彼女は英国人ら

しく紅茶には一家言あり、お湯の温度から葉の蒸むらし時間にまで事細かに注文してくる。知識がある分刀羽華より上等かもしれないが、それが自分の手作業に反映されないのが星一郎には不思議でならない。

「戦闘訓練は、今日はお休みにしてあったと思ったけど」

　ディーナに目を向けて確かく認にんすると、彼女は小さく頷いた。『摩天の夜宴バビロン・ナイト』が始まって以来、星一郎はディーナと人の寄り付かない工場跡あと地ちで戦闘訓練に明け暮れていた。刀羽華が合流してからは、より綿密な連携の訓練も行っている。その成果が昨晩の戦闘でも活いきたワケだ。

　そんな訓練も、今日はお休みの予定だった。

「なら、もう少ししたらデートに行きましょう」

「待て」

　ウキウキした声で告げる刀羽華に、ディーナが口を歪めて割り込んだ。

「……決して外せない大事な要件だというから今日はフリーにしたのだぞ？　それなのに、デート？　だらしないのは身体だけじゃなくて頭の中も同じらしいな」

「ああ、やだわ。頭の固かたい女って見苦しいわよね。固そうなのはその見苦しい胸だけにしなさいよ」

「よく言ったな、デカ尻女め」

「安産型と言いなさいよ、丸太ん胴どう」

　鼻先を突き合わせて、再び二人の美少女がいがみ合うが、星一郎は彼女たちを刺し激げきしないよう静かにお茶を飲んでさせるがままにした。朝食は終わって、とくに二人のいがみ合いを止める理由がなかったので、好きにしたらいいと思ったのだ。

　星一郎は麗うるわしい美少女同士の面めん倒どうくさいいがみ合いを、お茶を飲みながら見守った。

　そして星一郎のおかわりが出で涸がらしの色だけ付いたお湯みたいになった頃、ようやくディーナと刀羽華は息切れして自分の椅い子す

に座すわり直した。
「……いいだろう。それなら監かん視し役やくとしてわたしも付いて行くぞ……」
「……いいわ。星くんと私の仲の良さを存分に見物すればいいわ……」
　どうやら、そういう風に落ち着いたらしい。
　それだけのことを決めるのに時計の長針が半周するだけの時間をかけるのだから大したものだ。
　胸中でこっそり嘆たん息そくする星一郎だが、その真意を口にも表情にも出すことはなかった。
　宿儺星一郎は、我慢強い性格だからだ。

　息の上がった二人はすっかり冷えきった緑茶と紅茶を渇かわいた喉のどに流し込むと、外出の準備のためにそれぞれの部屋に戻った。
　ちなみに、客室に居い候そうろう状態のディーナであるが、刀羽華もまたこの宿儺家に居候していた。
　刀羽華は、星一郎の叔母おばである圭けい子この部屋に泊とまっていた。仕事場に泊まり込みの圭子に電話で確認をすると、少しでも静かな時間を過ごしたい星一郎の願いとは裏腹に、圭子はあっさりと自分の部屋の使用を許可してしまった。
『星くんたら、素す敵てきな修しゆ羅ら場ばね！　月のない夜は用心してね！　あ、最新の防ぼう刃じん防ぼう弾だん防ぼう御ぎよ術式があるんだけど、なんならテスターになってみる？』
　明らかに面白おもしろがっている叔母の声をボタンで断たち切きって、星一郎はげっそりと首を振ったものである。
　準備を整えた二人が戻ってくると、ディーナはいつもの動きやすい革かわジャン姿だったが、刀羽華は星一郎には見慣れた和服姿だった。
　星一郎は和服姿の刀羽華の姿に奇妙な驚おどろきを覚えてしまった。

「なんだか……ようやく刀羽華と再会出来た気がする」
「変な星くん。どんな格好だって、私は私よ？」
　心底不思議そうな顔をする刀羽華だが、彼女の妹に『勝負服』だと唆そそのかされた服装があまりにも無防備だった反動か、一八〇度逆ベクトルの和服姿が逆に新しん鮮せんに感じられてしまう。
　ポニーテールにしていた烏からすの濡ぬれ羽ば色いろの長ちよう髪はつもほどいて背中に流した現在の刀羽華は、大和やまと撫子なでしこを体現したような清楚な雰囲気を纏っていた。淡あわい桜色の和服も、柔らかな笑顔によく似合っている。
　そう、星一郎の知る本来の刀羽華は、こういう柔にゆう和わで穏やかな美少女なのだ。
「ふん。スタイルに自信のない女の余よ所そ行ゆきとしてぴったりの格好だな」
「あら、あなたの方こそ和服が似合うんじゃない？　その見苦しいお腹が隠かくせるわよ？」
「いやいや、潰つぶれる心配もない胸をした刀羽華には敵かなわないとも」
「あらあら、大きいだけの無計画な胸をしたディーナには酷こくな提案だったかしら？」
　柔和で穏やかだった刀羽華の笑顔だが、ディーナの揶揄を耳にするや蜃しん気き楼ろうのように吹ふき消えてしまう。
　幼い頃刀羽華の家に厄やつ介かいになっていた星一郎は、刀羽華に憧あこがれる男子や女子に目の敵にされていたが、彼らが今の刀羽華を見たらどう思うことか。
　とはいえ、ディーナと刀羽華の子犬が吠ほえ合うようないがみ合いは、幼馴染みの存外に幼く甘あまえたがりな内面を知る星一郎には、歳とし相応のやり取りであるといえなくもない。
　いや、人目のあるところでは穏やかだがなかなか心中を晒さらさなかった刀羽華が、こうして同年代の少女と鼻を突き合わせていがみ合えるのだから、星一郎としては親心めいた気分を幼馴染みの少女へ抱

いだいた。
　……無論、仲良くするならもう少し静かにして欲しいのではあるが。
「はいはい。行くならさっさと行くよ」
　また気が済むまで吠え合うのに付き合うのは時間の無む駄だだと、星一郎はぱんぱんと手を叩たたいて二人を促した。
　ディーナと刀羽華はまだ遊び足りない幼子みたいな仏ぶつ頂ちよう面づらになるが、不承不承頷いて玄げん関かんに向かった。

さて、星一郎の自宅であるマンションは新京都市内でも御ご所しよ（ここももれなく実体幻像による再現史跡である）からほど近く、地下鉄も路面電車もアクセスしやすいが、今回は路面電車を使うことになった。

新京都を網あみの目のように走る路面電車に乗って東へ向かった三人は、二条大橋の手前に降り立った。市役所もほど近く近代的なビルが目立つが、鴨かも川がわ沿いに四条大橋方面へ向かえば小さな店が軒のきを連ねる先ぽん斗と町ちようへもほど近い。

着物姿の刀羽華に先導され、星一郎たちは昔ながらの町並みが再現された小さな通りを歩いて行く。周囲には観光客もおり、時には堂に入った刀羽華の着物姿に写真を撮らせて欲しいと言う者もいた。

「またか……これですでに十人目だそ……」

「刀羽華は、着物の着付けは上手だからね」

大学生らしき観光客の頼たのみをやんわり断る刀羽華を眺め、星一郎はディーナに説明した。

「洋服は学生服くらいだったかな？　慣れてるからって、いつも着物ばかり着てたな」

「なるほど……見た目だけなら大和撫子というわけだな。見た目だけは」

「……聞こえてるわよ、ディーナ！」

手を振ってにこやかに観光客を送り出した刀羽華が、耳ざとくディーナの声を拾ってじとりと睨む。

「見た目だけじゃなくて、中身もちゃんと大和撫子よ！」

「そうだな。着物がよく似合っている。いっそあのみっともない服はやめて、いつも着物姿でいたらどうだ？」

「……もしかして私が寸ずん胴どうとでも言いたいの？」

「そんな事は言っていないが、お前がそう思うのならそうなのかも知れないな」

にやにやと英国人らしい婉えん曲きよくな嫌いや味みを口にするディーナに言い返そうとする刀羽華だったが、またもや観光客に話し

かけられて小言を引っ込ませた。
「……まったく。こんなに面めん倒どう臭くさいなら、いつものみっともない格好の方が百倍増しだな」
　ディーナが嘆息するが、どことなく寂さびしそうに聞こえるのは気のせいではないと、星一郎は思った。
　意地っ張りな性格のディーナだから、ああやって好き放題に言い合うのを、実は密ひそかに楽しんでいるのかも知れない。
　微笑ましい所もあるじゃないかと内心含ふくみ笑わらいをしていると、ディーナが手て持もち無ぶ沙さ汰たを紛まぎらわすように星一郎へ振り向むいた。
「しかし、こんなに観光客も多い場所に、本当に凄すご腕うでの魔ま術じゆつ師しがいるのか？」
「さぁ……僕ぼくにはなんとも……」
　今日三人が戦闘訓練を休んで出で掛かけたのは、刀羽華の顔見知りという新京都在住の古典魔術師を訪ねるためであった。
　京都が魔力災害で壊滅して魔導工学先進都市として生まれ変わる際、先祖伝来の技術を有する古典魔術師たち――陰おん陽みよう師じや祓はらい屋と呼ばれた人々――は、大半が新京都から各地へ散った。古典魔術は魔導工学にとっても最高の教材である為ため、長年歴史の影かげにあった古典魔術師たちは注目されるのを厭いとったのだ。
　新京都に残った古典魔術師の大半は魔導工学に協力的な者たちで、ほとんどが企き業ぎように雇やとわれている。このような観光地の真ん中に居を構えた古典魔術師の話を、星一郎は聞いたことがない。
「その辺りはどの国も同じだな。協力的で表に出るか、注目されるのが嫌いやで隠いん棲せいするかの両りよう極きよく端たんになる」
「私たちが今日会うのは、この国で五本の指に入る超ちよう一いち流りゆうの術者よ」
　狭せまい道をしずしずと歩きながら刀羽華が言う。
「私の実家の忌寸は巫ふ覡げきの大家としてそこそこ発言力があった

けど、これから会うのは日の本の魔術界の御ご意い見けん番ばんだった方なの」
「それほどの人が、新京都で名も知られずにいるとは驚きだ。僕もこっちに来てけっこう長いのに」
「人ひと嫌ぎらいというわけではないのだけど……あまり人前に出たがらない方なのよ」
　やがて刀羽華は、路地とも言えない隙すき間ま道に入った。そうと知らなければ入れるとも思えない、本当に狭い小道だった。
　身体を横向きにして進むと、不意に広場へと抜け出でた。
　狭くて暗い小道の先にあるとは思えない明るい広場には、レンガ造りに蔦つたの絡からまった平屋があった。カフェか古道具屋のような趣おもむきだが窓は曇くもってよく見えず、扉とびらの横に立てかけられた『時じ剋こく洞どう』と書かれた看板も、それだけでは何を示しているのかよく分からなかった。
「さぁ、入りましょう」
　刀羽華が扉を開くと、軽かろやかな鈴すずの音が鳴った。
　薄うす暗ぐらい室内に入ると、星一郎は目の前の景色に目を見張った。
　時計だ。
　大きさ、年代、機構も様々な時計が、部屋の中で静かに時を刻んでいた。
　水時計もあれば、砂時計もある。懐かい中ちゆう時計が天てん井じようから掛かっていれば、腕うで時ど計けいが壁かべ紙がみのように埋うめ込まれている。室内で役に立つか怪あやしい日時計も置かれている。
　古今東西の別なく、ありとあらゆる時計が集められていた。
　そして、ただの一つとして、普通の時計はこの部屋に存在していない。
　目を凝こらすと、〈聖楔者ヒエロス〉である星一郎の霊れい視し力りよくが、周囲の時計たちが力ある呪じゆ物ぶつの群れだと伝えてき

た。動いているのが不思議な古い鳩はと時ど計けいから、なんの変へん哲てつもなく見えるデジタル時計に至るまで、この部屋の大小様々な時計は一つ残らず魔ま術じゆつ的てき作用を秘ひめている。

星一郎と同等の霊視力と、星一郎以上の魔術的知識を持つディーナは、星一郎よりもさらに驚いており、聞き間違えようのない感かん嘆たんの吐と息いきを漏もらしていた。

「この結界は……すごい。時と空間にまで干かん渉しようするとは。仙洞——道教の高位陣じん地ちか？　いや、陰おん陽よう道どうの遁とん甲こう陣じんの趣おもむきも……複雑すぎて、〈聖楔者〉の霊視力でも読み取るのに一苦労だ。芸術品のように精せい緻ちで美しい結界だ……」

「お褒め頂き光栄ですが、斯か様ような結界は貴方あなたたちなら蝋ろう燭そくの火を吹き消けすように消し払はらえるものに過ぎませぬよ」

時計たちの針の音に紛れ、穏やかな声が掛かる。

声のした方へと振り向けば、いつの間にか時計と時計の間、時計を埋め込んだ奇妙な木製イスに、一人の女性が腰こし掛かけていた。

一言で言えば、白い。

髪も眉まゆも睫まつ毛げも漂ひよう白はくされたように真っ白で、瑞みずみずしい肌もシミひとつない。服装も、白いブラウスにホワイトジーンズ、白いスニーカーという格好だった。

十代半ばの幼さの残る面おも立だちの中、全身の白さとバランスを取るかのように深い色合いの黒瞳が星一郎に鮮せん烈れつな印象をもたらした。ちょっと角度を変えると黒瞳の中に複雑な色合いが瞬くように行き過ぎて、全身の色という色をその瞳に凝ぎよう縮しゆくしたかのようだった。

只ただ者ものではない、と〈聖楔者〉の強力な霊れい感かんが告げていた。

星一郎が両目に魔力を注いで霊視力を強化すれば、見た目通りに少女と呼ぶのを躊躇ためらうような女性が、濃こくて重い魔力を纏って

いるのを視みる事ができた。〈聖楔者〉の強力無比で膨ぼう大だいな魔力とはまた違う、歳とし経へた古樹のように泰たい然ぜんとした気配である。

ディーナも、この白尽ずくめの女にただならぬ気配を感じているらしい。頬ほおをうっすらと赤く染めてじっと見つめている。年とし頃ごろの少女が有名人と出会って興奮するような表情だ。

星一郎とディーナがこの結界――工こう房ぼうの主らしき白身黒瞳の美女に見入っていると、二人をここへ案内してきた刀羽華が深々とお辞じ儀ぎをした。

「ご無沙汰をいたしておりました、白はく明めい様」

「忌寸の巫み女こ殿どのか。いまや私の方が『様』付けしなければならないのに、相も変わらず丁てい寧ねいであられるな」

白しら髪がの女――白明は刀羽華の態度にくすりと笑うと、ディーナの方へと視線をずらした。

「ほほぅ……こちらの舶はく来らいの姫ひめ様さまも代行者――いや、今は〈聖楔者〉と呼ぶのだったか？　神々に選定されし御お方かたであられるか。名乗りが遅おくれたが、私は古こ堂どう白明と申す。このような埃ほこり臭くさい場所にようこそお出いで下さった」

「過分な言葉、痛み入ります。ディーナ・チャレンジャーと申します」

ディーナは、星一郎が見たこともないくらい丁寧な物もの腰ごしで頭を下げた。

「――失礼ながら、古堂白明というお名前は寡か聞ぶんにして聞き覚えがございません。貴方様の本当の洗礼名は、おそらくわたしのような若じやく輩はい者ものでも知る有名なものと思われますが？」

洗礼名は、魔術名や諱いみなといった、魔術を使う際のペンネーム、魔術における契けい約やく名の俗ぞく称しようである。洗礼名が携けい帯たい電話の契けい約やく者しや名ほどに陳ちん腐ぷ化かした現代魔導工学ではあまり意味のないものだが、古典魔術の世界では戸こ籍せき名めいよりも重要視されて有名となる名前だ。

　きらきらと顔を輝かせるディーナに、白明は困ったように頬を掻かいて苦く笑しようした。
「さて……私の洗礼名は悪名ばかりであるから、姫様が聞いてあまりおもしろいものではありますまい。それに、私はもはや隠いん居きよした婆ばばあ。どうか白明と気楽に呼んでいただきたい」

「……かしこまりました。しかしながら、わたしの如き若輩者に敬語は不要です。どうぞディーナと呼び捨てにして下さい」
「ほほぅ……刀羽華お嬢じよう様さまもそうだが、近ちか頃ごろの若い娘むすめ御ごは丁寧であられる。老い先短い婆には朗報であるな」
　そうかなぁ、と普段の刀羽華とディーナの様子を知る星一郎は、胸中で首を捻ひねる。
　そんな星一郎に視線を移した白明は、秀しゆう麗れいな白い眉をぴくりと揺らした。
「ふむむ……こうしてまじまじと見ると、これは凄まじい奇き相そうの持ち主であるな……」
　思わず、星一郎は自分の顔に手をやった。自分では平へい凡ぼん極きわまりない顔だと思っていたので、白明の言葉は寝ね耳みみに水みずだった。
「その顔ではなく、貴方様の魂こん魄ぱくの貌かおのことよ。器は涼すずし気げな男子であられるのに、内側に満ちた魂魄の気配は峻しゆん厳げんな霊れい峰ほうを思わせる荒あら々あらしさ。これほど器の印象と魂魄の気配が一いつ致ちしない者は初めてお目に掛かる……」
「はぁ……」
　第一印象とは大おお違ちがいだなどと度たび々たび言われるが、ここまで大おお仰ぎように言われたのは初めてで、星一郎は適当な返事が思いつかず曖あい昧まいな声を出だすばかりだった。
「おお、代行者に対してあまりにも無礼な物言いでありましたな。どうぞお許し願いたい、荒々しき生命の息い吹ぶきを宿せし若わか殿どの」
「あ、いえ、気にしていないので謝あやまらないで下さい」
　頭を下げようとする白明に慌あわてて声をかけると、彼女はほほぅと感嘆したような吐息を漏らした。
「寛かん大だいであられる。魂魄の気配からすればこの素っ首が叩き落おとされるものかと思うたが」
「……僕って、そんなに野や蛮ばん人じんに見えますか？」

強こわ張ばりそうな頬を揉もみ解ほぐしていると、曰いわく言いたげな視線が左右から注がれた。横目に窺うかがうと、ディーナと刀羽華が『普段は大人しいけど……』と物言いたげな顔をしていた。
「いやいや、心が魂に影えい響きようされていないということ。それを見抜ぬけなんだは我わが不徳の致いたすところですな」
「心と魂？　そのふたつは同じものだと思っていたのですが……？」
「それは正しくもあり、間ま違ちがってもおりますな。魂とはその存在に刻まれた衝しよう動どう、肉体における本能のようなもの。心は魂の衝動と肉の本能によって形作られるものではありますが、けして魂と同一物でも従属物でもありませぬ。心とは、魂を律し肉を律し、時に魂に縛しばられ肉に縛られるもの。心とは存在の表現型なのです」
「分かったような分からないような……禅ぜん問もん答どうですね」
「左様。心とは『禅ぜん』ではなく『禅問答』そのものなのですよ、若き代行者殿」
「はぁ……」
星一郎は曖昧な声で頷くばかりであった。
なんにせよ同年代の少女のように見える――しかしおそらく見た目以上に年上だろう――女性に敬語を使われるのは気き疲づかれすると、星一郎は自己紹しよう介かいの後に敬語は結構だと白明に言いい添そえた。
「お三方の代行者とは思えぬ気き遣づかい、この白明感嘆を禁じ得ぬ」
孫を愛めでるような笑えみを幼さの残る美び貌ぼうに浮うかべ、白明は星一郎たちに席を勧すすめた。
三人が椅子に腰掛けると、すぐ側のテーブルに湯気の立つほうじ茶が現れた。
「ささ、まずはお茶で喉を潤うるおして下され」
フィルムを切って繋つなげたような唐とう突とつさで現れた湯ゆ呑のみだが、いまさらこの程度で驚くこともないかと、星一郎は白明に

勧められるままお茶を飲んだ。
「さて、刀羽華殿が代行者のお仲間とともにこちらに参られたからには、『摩天の夜宴』なる祭りの件であらせられるな？」
「はい」
　刀羽華は姿勢を正して白明に頷いた。
　ディーナもぴしりと背筋を伸のばした。
　白明が現在では少なくなった真に力量のある古典魔術師であると予想していた星一郎だが、二人の態度はその予想を裏付けていた。
「白明様は、古くからこの地に工房を構え、この地の気脈霊脈にも通じておられます。現在この新京都で行われている『摩天の夜宴』の状じよう況きようを伺うかがうに、これ以上の御方は居られないかと」
「かの委員会は、教えてくれないので？」
「カルディア委員会は、あくまで〈聖楔者〉間の戦いの監かん督とく役やくであり、必要以上の情報は開示していません。『夜宴』の戦せん闘とう映像くらいですね。〈聖楔者〉同士の接せつ触しよくは、あくまで〈聖楔者〉の行動に任せるという方針です」
「さもありなん。神格を帯びた運命を考えれば、出会うべきものはそうあるべくして出会う。『聖王』の代行者であられるディーナ殿と、『人間』の代行者であられる星一郎殿が出会ったように」
　白明の言葉に、星一郎とディーナは思わず互いの顔を見つめ合った。
『聖王ギルガメツシユ』と『人間エンキドウ』の〈聖楔者〉が出会うのは出来過ぎかとも思っていたが、やはり互いに宿った神格同士が引き合っていたということなのだろう。
「他ほかの代行者の方々も同様であられる。大きく分け、新京都の代行者は二つの集団に分かれつつあります。一つは善神、天使に翻ほん訳やくされし神々ですな。『熾し天てん使し』を中心とした代行者たちが新京都北西方面に集つどいはじめております。もう一つは悪神、悪あく魔まと翻訳された神々の代行者が北東方面に引き寄せられておりますな。こちらは『魔ま王おう』の代行者が取とり纏まとめている

ようです」
「『熾天使』に『魔王』……いかにも強そうだ」
　字じ面づらからして強そうな響ひびきに、星一郎は軽く呻うめいた。
「〝最も旧ふるく新しい神々〟――カルディア委員会が『原型神格』と呼び称しようしているバビロニアの神格の直系といえるのが教会の唱える『天使』と『悪魔』ですからな。翻訳されて変質した『顕けん現げん神格』も強力であって当然ということでしょうね」
「あ、それは授業でも聞きました」
　つい最近まで真ま面じ目めな魔ま導どう工学の学生だった星一郎が白明の言葉に頷いた。
　占せん星せい術じゆつの基き礎そを確立したのがバビロニアの魔術師であったように、こと現代魔術の世界では『汎はんバビロニア主義』が常識と言っていい。魔術の基礎コードたる神話の原型であるバビロニア神話の後世への影響は、魔術史の基礎のひとつである。
　その中でも、キリスト教圏けんの天使と悪魔は、バビロニア神話の影響を色いろ濃こく受うけ継つぐ格好の教材であった。
　例えば、旧約聖書に出てくる悪魔の殆ほとんどがバビロニアの大神たちであるのはよく知られている。イスラエルの聖王ソロモンが封ふうじた七十二体の悪魔の筆頭で、サタンと並ならび称される大悪魔『バール』も、元は『偉い大だいなる主』を意味する『ベル』の訛なまりである。バビロニアの主神マルドゥークも、多くの場合『ベル・マルドゥーク』と尊そん称しようされている。つまりバビロニアの『偉大なる神々ベル』が、聖書では『悪魔バール』となったのだ。
　反対に、天使として神聖視された神々もいる。由来のはっきりしているものでは、『智天使ケルビム』だろうか。智天使の前身と目されるケルブという魔ま物ものは、そのものずばりバビロニアの神々の使い魔まである。
　悪と善の違いこそあれ、現代でも語かたり継がれる天使と悪魔は、正しく原型神格から名と性質を受け継いだ直系の神格なのである。

「お若いのに、よく勉強なされておいでですな」
　白明は星一郎の知識に拍手を送った。
「天使に連なる神格を纏める『熾天使』の方は炎ほのおの属性を帯びている様子ですので、炎えん神じんか、あるいは太陽神に連なる系けい譜ふでしょう。最上級に近い力の高まりから大神級以上……主神級かも知れません。刀羽華お嬢様の素盞嗚尊スサノオノミコトに匹ひつ敵てきするか、それ以上の顕現神格の使い手でありましょう」
　つまり、神話における代名詞のような神格ということだった。もし白明の推察通り太陽神に連なる系譜なら、『太陽』は多くの神話で主神中の主神として取り扱あつかわれている。
　間違いなく、この新京都に集った〈聖楔者〉で最高クラスの使い手であろう。
「悪神と悪魔の代行者たちをまとめる『魔王』については、まったく視れないので私にも皆かい目もく見当が付きません。これまでの『夜宴』においても自らは動いていないようですので、如何いかなる顕現神格の権能を振ふるうかは実際に相対しなければなりますまい。私が探さぐれるのは属性と強大さくらいですので、本職の審神者のようにはいきません。そもそも私程度のただの魔術師には、神格の放つ光を直視できませぬ故ゆえ」
「白明様ですら、ですか？」
「刀羽華お嬢様、そういう貴方たちも、私からすれば眩まぶしすぎます。私の研けん鑽さんの結けつ晶しようであるこの『時剋洞』も、先さき程ほどから悲鳴をあげています。畏光メランムを発してすらいない貴方たちですらこれなのです。神格を表出させた代行者ならばなおさらでございますよ」
　白明は自じ嘲ちようを含んだ笑みで星一郎たちを見回した。
「何事もなければ、私はあと二百年くらいは生を繋げられるでしょうな。しかしながら、さらに五百年生きたとしても、貴方たちの百分の一の力も得られますまい。いえ、力の大小などがそもそも問題にならないのですよ。神性の顕あらわれたる畏光が照らすところ、遍あまね

く魔ま力りよくが従い、全すべての術式が意味を失う。神格とはそういうもの。神聖不ふ可か侵しんの代行者たる貴方たちも同様でありますれば」

ひと目で尋じん常じようならざる術者と分かる白明の自じ虐ぎやく的てきな言葉に、星一郎はおろか、魔術を引ひき継いできた家系の出であるディーナと刀羽華までもが軽く首を傾かしげた。

実感のなさそうな代行者たちに、超一流という表現でもまだ足りない魔術師であろう女性は、老いのほろ苦さを白はく貌ぼうに浮かべてみせた。

「もっとも、だからといって望んで神格を得たいとも思いませぬが。魔術はどこまでいっても技術に過ぎず、手段に過ぎませぬ。真理だの神に至る道などというのは、零れい落らくした魔術に我慢できなかった者達たちの空言に過ぎませぬ。武士道と同じですな」

「武士道？」

「騎き士し道どうでもいいですが」

白明の言葉に、ディーナと刀羽華は戸と惑まどったように顔を曇らせる。

対して星一郎は彼かの女じよの言葉の意味をなんとなく察し、遠えん慮りよがちに白明に確認した。

「……武士道や騎士道と同じというのは……正当化しようとしていたということですか？　戦国時代には『勝つことが本にて候そうろう』と言っていた武士が、戦いのない江え戸ど時代になって武士という支配階級を正当化するために武士『道』を唱え出したように？」

「左様です。ただの技術を神聖だの何だのと盲もう信しんして魔『道』などと称するのは、そこらの新興宗教と変わりませぬよ」

実感のこもったような白明に、ディーナと刀羽華が驚いた顔をする。とくに生き真ま面じ目めなディーナは、強張った顔でうめき交じりに苦言を漏らした。

「白明殿……それはさすがに言い過ぎでは？」

「別に卑ひ下げしているわけではありませぬよ、ディーナ殿。受け継

いだ技術を誇ほこりにするのは当然のこと。ですが魔術のはじまりは矢や張はり『便利な技術』なのです。魔ま法ほう使つかいのお伽とぎ話ばなしを思い出してみれば宜よろしい。大きな石を動かしたり雨を降らせたりと、よりよい生活のためにと力を使っていますよ。真理だの神へ至る道などと吹ふい聴ちようする魔術師などは、三流ＳＦのマッドサイエンティストと同類の狂きよう人じん、あるいは詐さ欺ぎ師しの同類でございますよ」

　白明はそう言うと、ポケットから薄うすい板状の物体を取り出した。銀光を放つ魔ま導どう晶しよう体たいを備えた魔導デバイスだった。

「……この無機的で面おも白しろ味みのない魔導工学というものは魔術のあるべき姿ですね。技術とはお手軽であればあるほど良いのですから。それを考えれば、神格の宿る《天命の書版》を道具として利用しようとするカルディア委員会の計画は実に人間的といえますな」

　白明の言葉に、ディーナと刀羽華は難しい顔で黙り込んでしまった。白明の意見を正しいとは思うが、あまりにも明あけ透すけなので反応に困っているようだ。

　黙ってしまった少女たちの代わりというわけではないが、魔導工学者――白明がいう所の『技術者』を目指していた星一郎が口を開いた。

「由ゆい緒しよある古典魔術師の方からすれば、『摩天の夜宴』はあまり望ましくないものと思っていましたが？」

「神格を弄もてあそぶ儀ぎ式しきだからですか？　たしかに私の考えが極きよく端たんであるという自覚はありますが……それでもほとんどの古典魔術師は羨うらやましく思えども忌き避ひする者は極ごく々ごく少数でしょうな。畢ひつ竟きよう、魔術師とは技術者ですよ。技術者というのは、自分の持つ技術や道具を見せびらかしたくてたまらない人種。何十代に渡って受け継がれた技術と力を振るいたくてしょうがない筈はずですよ」

「『神話の再編』を謳うたっている割に、かなり俗ぞくな気がしてき

ますね……」
「おやおや？　星一郎殿ならご存じだと思ったのですが？」
　白明は教師が生徒に講義するような得意げな顔を星一郎に向ける。
「神話というものは時代を遡さかのぼれば遡るほど、良く言えば人間味が、悪く言えば俗っ気が濃くなるものですよ。全知全能の存在などは神の息吹を身近に感じられなくなったが故の誤魔化しに過ぎませぬ。ましてや、最古の神話に回帰させようとする儀式です。俗っぽくないわけがありますまい」
　あまりに極端な意見とは思うのだが、妙みように納なつ得とくしてしまう星一郎であった。
「さて……もう一つの用事もすぐに済ませられるかな？」
「……はい」
　白明の言葉に、刀羽華が神しん妙みような顔で頷うなずき、星一郎へと目を向けてきた。なんなのだろうかと訝いぶかしげに思っていると、ディーナも真しん剣けんな表情で星一郎を見つめていた。
「星一郎。白明殿に身体を見てもらえ」
「からだ？」
「惚とぼけようとしてもダメだ。異常があるはずだ」
「……」
「星くん。白明様は身体と魂魄の専門家――呪医でもあるの。見てもらって」
「……全部お見通しか」
　諦め、星一郎は指示されるままにシャツを脱ぬいだ。
「うっ……」
「星くん……」
　ディーナと刀羽華が小さく呻く。星一郎の裸はだかの上半身を見たから――だけではない。
　むき出しになった星一郎の胸や腹には、ミミズ腫ばれのような痕あとが浮き上あがっていた。星一郎が《人間》の権能を発揮するときに浮き上がる楔くさび形がた文字の刻印だ。〈聖楔者〉の証あかしたる

『神デインギル』の聖楔とは違ちがい、刃は物もので刻まれたような痛々しさがある。
「……いつからこんな？」
「波は々ば木き節せつ奈なとの戦いの後からかな。段々、一つ二つと刻印が残るようになった」
　バレてないと思ったのだが、そうそう隠し事ごとは出来ないようだ。
「うまく隠せてると思ったんだけど……」
「……隠せてると思ったのか？」
　星一郎の零こぼした言葉に、ディーナが呆あきれたように鼻を鳴らした。
「お目め出で度たいな。あれほどわかりやすい変化を見せておいて」
「？　何かあったっけ？」
「お前、わたしたちを風ふ呂ろ場ばから遠ざけていただろうが？　これまではなんてことない顔でのらりくらりと相手をしていたのに」
「……年頃の男子としては、それが普ふ通つうだと思うけど？」
「星くんがそれを言うの？」
　と、今度は刀羽華が呆れに諦めをミックスした苦笑を浮かべて首を振った。
「私の家で居候してた時、どれだけ際きわどい着き替がえシーンを見せても平気な顔で風ふ呂ろ掃そう除じや障子の張はり替かえを続行してた星くんが、いまさら年頃の男子の恥はじらいを持ちだしても、これっぽちも説得力がないわ」
　まるで不ふ感かん症しようのごとく責められ、星一郎は不満気に口元を歪ゆがめた。
　昔からやたらに刀羽華の着替えに遭そう遇ぐうしていたが、偶ぐう然ぜんではなく確信犯だったらしい。
　だいたい、いつもバツが悪いのを必死に取り繕つくろっていたのに、平気な顔だったと責められるのは理り不ふ尽じんである。むしろ責められるべきは、自分がいつの間にか平気になってしまうほどドッ

キリイベントを大安売りしてきた幼おさな馴な染じみの方ではあるまいか？
　そんな星一郎の内心を知ってか知らずか、彼かれと似通った表情になったディーナが、責めるような半眼になって刀羽華を見やった。
「……お前がそうやって無駄な耐たい性せいを付けさせた所為せいで、星一郎のあの鉄面皮が出来あがったわけか……」
「むぅ……なによ？」
「余計なことを……そうやって思いつきで行動して反省もないからああなるんだ。星一郎の鉄面皮を育てたのは刀羽華の無節操さに他ならない。これに懲こりたら、せいぜい自重というものを覚えて欲ほしいものだな」
「え、偉えらそうに……だいたい私のせいだって言うけど、単にあなたに魅み力りよくが足りないだけじゃないの？」
「……ほほう？　自分の魅力の無さを誤魔化そうと責任転てん嫁かか？　魅力ばかりか誇りまで大安売りしようとするのは関心しないぞ？」
「……誤魔化すのに必死ね、ディーナ？　その返しは肯こう定ていと受け取るわよ？」
「……ふふふ……」
「……うふふ……」
　周囲の景色を歪める殺気を発しながら笑い合う美少女二人。人間とはこんなにも白々しく笑えるのかと、感心するほどの作りものの笑みを浮かべていた。
　不気味な笑みを浮かべ合うディーナと刀羽華から、星一郎はそっと距きょ離りを取る。
「ふふ、可愛かわいらしいねぇ。若いというのは本当に羨ましい」
　白明が見かけとは裏腹にしみじみと呟つぶやいた。
「さて、お嬢様方がじゃれ合っている内に、星一郎殿の調子を調べてしまいましょうか？」
　ちょいちょいと招かれ、星一郎は笑え顔がおで額を突つき付つけ合

う二人を横目に白明へと近づいた。いつの間にか彼女の前には丸椅い子すが現れており、星一郎はすでに驚くこともなく受け入れて白明の前に座すわった。

　自分の前に座った星一郎に、白明は医者が触しよく診しんするように手を翳かざした。

「ふむ……」

　真剣な目の白明だったが、星一郎の身体の触診を続ける内に、真剣な目付きが段々と熱を帯びていく。

「……星一郎殿……貴方様、痛みはないのですか？」

「いえ、痛みは殆ど無いですが……」

「痛みはですか……なるほど……」

　星一郎から手を離はなした白明は、そのまま腕うでを組んで黙だまり込んでしまう。

　微笑ほほえみの牽けん制せいを行っていたディーナと刀羽華も白明の様子に気付き、窺うかがうような瞳ひとみを星一郎と白明に向けた。

「……白明様？」

　黙りこんだ白明に刀羽華がおずおずと呼よび掛かけると、白尽くめの魔ま女じよはゆっくりと客人たちの顔を見回した。

「……刀羽華お嬢様。お嬢様は、星一郎殿の身体の不調が気き掛がかりであると仰おつしやっていましたね？」

「ええ……星くんは、《天命の書版》をその身に宿した特異な存在です。私たち〈聖楔者〉は神格に選定されて強力な権能を振るいはしますが、神格そのものを宿しているわけではありません」

　新京都に集って『摩天の夜宴』に参加する〈聖楔者〉たちは、自分たちを選定した神格を専用の魔導デバイス〈第二書版セカンダリイ〉に封ふう入にゆうしている。神の力を振るう代行者に選ばれたとはいえ神格――〝力の塊かたまり〟を受け入れるには、人間は繊せん細さいに過ぎる。

「何らかの拒きよ否ひ反応が出る……それを恐おそれていたのです

が……」
「……その点は安心してもらって結構。星一郎殿に、拒否反応らしき兆候はありません」
「そ、それじゃ――」
「拒否反応は、ありませんな」
　安心しかけた刀羽華に、白明が念を押おすように言った。ニュアンスやアクセントからいって、言葉通りに安心させる答えではけっしてない。
「……白明殿。そのような言い方ではむしろ不安ばかり感じます」
　ディーナが咎とがめるように言う。
「不安を煽あおるような言い方は止めていただきたい」
「……言い方が悪かったのは謝ります、ディーナ殿。ですが、これは……」
　白明は重々しい声でディーナへ返すと、場ば違ちがいな感心をしていた星一郎に眼を戻もどした。
「……星一郎殿。貴方様は、いつその身に神格が宿ったか、心当たりはないのですか？」
「心当たりといっても……こう見えても、僕自身はいたって普通ですから。周りにすごい人はいましたが」
「……本当に？」
「そう言われても……」
「なら、その胸の傷はいったいどうして？」
　白明は星一郎の胸の真ん中に刻まれた傷きず痕あとを指差した。十年前、両親がなくなった事故に巻き込まれて出来た傷だ。大穴を慌てて埋め直したような引き攣つった傷痕は、大人の掌てのひらほどもある。
「これですか？　昔の事故で死にかけた時の傷痕ですけど……」
「その事故はいつ？」
「十年前です。僕が……六歳さいの時ですね」
「……六歳の子供が、そんな傷を受けて生き延びたと？」

「そう言われても……生き残ったのだからそういうものだと」
「何か、後こう遺い症しようは？」
「何も。ああ、けれど事故後しばらくは身体が麻ま痺ひしたようになっていました。姉がリハビリに付き合ってくれて、いまではこの通り健康体ですけど」
「……そうですか……」
「……白明様？」
「白明殿、一体何なのです？　拒否反応はないのでしょう？」
「……ディーナ殿。この場合、拒否反応があった方がいいのです。拒否反応があるなら、その大本を取り除けば解決する訳ですからね」
　白明は溜ため息いきを吐ついた。若々しい見た目とは裏腹に、老人を思わせる枯かれた吐息だった。
「……星一郎殿に宿った神格はこれ以上なく星一郎殿に馴な染じんでいます。その身体に刻まれた楔の刻印は、拒否反応ではなく馴染んでいる証しよう拠こです」
「……馴染む？」
「《天命の書版》そのものになりつつあるのです。神格を記す楔形文字が浮かび上がるのは当然のことでしょう？」
　ディーナも刀羽華もギョッと顔を引き攣らせた。当然だろう。生きた人間が《天命の書版》――〝神格の器うつわ〟と化しはじめているというのだから。
「……ご本人は、驚おどろいていませんな」
「驚いていますよ？　ただ、それ以上に残念なだけです」
　星一郎は白明に苦笑を返す。
「ディーナと刀羽華には心配を掛けないようにと思っていたのに、こうして驚かせてしまいましたから」
「……呑のん気きというか、大物というか……反応に困りますな」
　星一郎の受け答えに、白明は笑った。
「白明様!?　なにを笑ってらっしゃるのですか！」

「笑うしかないからですよ、お嬢様。笑うしかない。星一郎殿は存在自体が奇き蹟せきみたいなものですから」
「……僕自身は、ちょっと我が慢まん強づよいだけで普通の人間だと思ってきたんですけど？」
「我慢強いのは確かでしょうな。十年前に死んでいて当然なのにこうして泰然としているのですから、当代無む双そうの我慢強さでしょうとも」
「……その言い方だと、十年前に僕の身体に《天命の書版》が埋め込まれたということですか？」
「それしか考えられませんな。六歳の子供がそんな傷を受けて生き延びるのがそもそも奇蹟的でしょう？　しかも後遺症もなく健康体で育ったとなれば、奇蹟の二ふた重え掛かけです。偶然が二回重なったら必然とよく言います。奇蹟が二回重なったら、これは神の力の賜たま物ものでしょうな」
「……」
　星一郎は静かに胸の傷痕を撫なでた。
　むしろ大仰に反応したのはディーナと刀羽華で、驚きよう愕がくから覚めると、二人は徐じょ々じょに顔を青くしはじめた。
「……白明様。星くんには拒否反応が見られないと言われましたね？」
「然しかり。星一郎殿は〝神の力〟に、これ以上なく順応しておられる」
「……白明殿。ということは、星一郎から《天命の書版》の本体を取り出すことは……」
「ディーナ殿、例えば、拒否反応なく臓器移植が成功した患かん者じゃから、その移植した臓器を抜き取ればどうなると思われます？」
「……」
「星一郎殿に宿った神格はすでに彼の身体の一部、魂たましいの一部です。現在の星一郎殿の変化は、〝異変〟ではなく〝成長〟なのです」

白明は星一郎の相そう貌ぼうを見み据すえて、重々しく断言した。
「――星一郎殿と《全き人間》の神格はすでに馴染みきっています。無理やり神格を取り出せば、好ましからぬ事態になるのは明白ですな」

2

まるで不治の病を宣告されたかのようだと、星一郎は人ひと事ごとのように白明の言葉を聞いていた。
別に、星一郎とて死にたくはない。
だが、星一郎にとって〝死〟は十年前から身近な存在だった。
傷を負った記き憶おくはなくとも、〝死の恐きよう怖ふ〟は何度も夢に見てきた。
だから、星一郎は自分の生死にはかなりの耐性がある。
他人の死の方が、よっぽど星一郎には堪こたえるのだ。
白明に死の可能性を告げられても、それが自分の事でむしろ良かったと思うほどだった。
「星一郎！　お前、何をそんなに落ち着いているのだ!?」
慌てふためいたディーナがシャツの襟えりを掴つかんでがくがくと揺ゆさぶってくる。
「……落ち着いてよ、ディーナ。別にいますぐ死ぬ訳じゃないんだから」
「お、お前……」
「何言ってるの、星くん!?」
気け圧おされたように後退あとずさったディーナに代わり、今度は刀羽華が星一郎を揺さぶった。
「星くん、怖こわくないの？」
「力が強くなるなら簡単に殺されないようになるし、むしろ好都合じゃない？」
「こ、好都合って……」

あっけらかんとした物言いに、刀羽華も呆ぼう然ぜんとして手を離してしまった。
二人が言葉を探している内に、星一郎は白明に向き直った。
「白明さん。僕ぼくからも伺いたいことがあります」
「私に答えられることでしたら」
「僕は〝成長〟していると言ってましたが、最終的にどうなるのでしょう？　意思を失ったりするんでしょうか？」
「……それはないでしょう。貴方様の身体の〝成長〟は、増大した魂――〝存在の重さ〟とバランスを取るための変化です。そのバランスが取れる限り、貴方様の〝心〟が喪うしなわれることはないでしょう」
「バランスが取れる限り……バランスが崩くずれたら？」
「狂を得るでしょうな。もっとも、それは誰だれにでも言えることですが」
「それはそうですね……なら、身体の変化は？　腕が四本になったりしませんよね？」
「貴方様に宿った神格は《人間》ですからね……神造の人間、完かん璧ぺきな人間、神の似姿――それが《人間》の神格です。あくまで人間として強きよう靭じんになるでしょうが、異形にはならないでしょう」
「そうですか……何か、他に気を付けることはありますか？」
「そうですね……」
白明はちらりとディーナと刀羽華に目をやると、立ち上がって部屋の奥おくへ歩き出した。
「二人きりで話しましょうか。渡わたすものもありますし」
「わかりました。二人とも、ちょっと待っててね」
「あ、ああ……」
「う、うん……」
掛けるべき言葉を探したままのディーナと刀羽華を置いて、星一郎は奥に進んだ。大きな壁かべ掛かけ時計が嵌はめ込まれたドアを潜く

ぐると、奥の小部屋もまた多くの時計に囲まれていた。違いは、時計の埋うめ込まれた本ほん棚だなと薬品棚、クローゼットが置いてあることか。
　星一郎がドアを閉めると、白明は薬品棚から錠じよう剤ざいの入った瓶びんを取り出した。
「これを差し上げよう。我慢が出来なくなったら飲みなさるといい」
「……分かるんですね」
「伊達だてに魔ま女じよはやっていませぬよ」
　白明は笑って瓶を星一郎に手渡した。
「本当は我慢しない方がいいのですが……困るでしょう？」
「ええ、困ります」
　星一郎はここでようやく顔を曇くもらせた。
「……なんというか、歯止めが効かなくなる予感がするんですよね……」
「男子ならしかたがないことですがね」
　からからと白明は笑った。
　先程までの重々しい気配を吹ふき払はらった白明の態度に、星一郎は思わず眼をパチクリさせてしまう。
「……さっきまでの態度は態わざとですか？」
「ご本人が事態の重要さを分かっていないのでは、周りに注意を促うながすしかありませぬでしょう？」
「やり過ぎにも思えますけどね」
　ちらりとドアの向こうを見やって星一郎は呟いた。
「……あまり心配はさせたくなかったんですけど、ね」
「そういう貴方あなた様さまだからこそ、ですよ」
　白明は壁時計の一つに寄りかかると、どこからか現れた煙管キセルを咥くわえた。現れた時にはすでに火が点ついていたようで、深々と紫し煙えんを燻くゆらせる。
「……これでも結構長く生きてきましたからね。貴方様のような性格の方は、直接注意しても梨なしの礫つぶてだと嫌いやというほど知っ

ているのですよ」
「僕はちょっとだけ我慢強い以外は、普通だと思いますけどね」
「その我慢強さが問題なのですがね」白明は紫煙を吐きながら肩かたを竦すくめた。「我慢強い――我慢を愛情と勘違いした人間は本当に度どし難がたい。貴方様のような人間は、相手を思いやって我慢することで相手を傷付けると気付きながら、その気付きにさえ我慢する。なんでか分かりますか？　我慢に慣れた人間は自分の価値を下げ慣れてしまうからですよ」
「……」
「だから、周りを心配させることが貴方様のような人間には最高の特効薬ですよ。貴方の我慢が周りの人間を傷付けることがあるのだと、ちゃんと思い知って下さい」
「……見かけによらず、お節せつ介かいなんですね」
「歳を取ると、お節介が何よりの趣しゆ味みになるのですよ」
　外見だけは少女のような白尽ずくめの美女は意地悪く笑った。
「まぁ、我慢できなくなったら勢いに任せてしまえばいいと思いますけれどね。案ずるより産むが易やすしで、流れに身を任せる方が男と女は上手うまく行くものですよ」
「……これでも積み重ねてきたキャラがあるんです。そう簡単には行きませんよ」
「男は見み栄えの生き物だというのはよく知っていますよ。だからこそ薬を渡したワケで」
「……そう言っておいて、まさか毒じゃありませんよね？」
　心配になった星一郎は、先ほど白明から渡された錠剤の入った瓶を疑わしい眼で睨にらんだ。
「ちゃんとお悩なやみの衝動を抑おさえてくれますよ。まぁ、あくまで男性限定ですが」
「……男性限定？　なら、女性は？」
「男は陽、女は陰いん。まったく逆の効果を発揮しますね。だから貴方様のような使い方は実は裏うら技わざです。まぁ、本来の使い方を

試ためしてみるのも一興でしょうけれど、ね」
　と、白明は煙管を咥えた唇くちびるをニヤリと歪めた。矢張り、さっきまでは猫ねこを被かぶっていたらしい。こうしてお節介を趣味と言い若者をけしかける彼女は、暇ひまを持て余した意地悪な老人そのものである。
「……遠慮します」
「ああ、これが耳に聞こえた草食系というやつですか。時代は変わりましたねぇ」
「……昔を懐なつかしんでばかりいると早く老ふけますよ？」
「おっと、これは一本とられましたな」
　白明はぴしゃりと膝ひざを叩たたくと、咥えていた煙管を煙けむりとともに吹き消けして歩み寄ってきた。そして、幾いく分ぶんか真面目な顔で星一郎の肩を叩いた。
「なんにせよ、我慢のし過ぎは身体の毒に気の毒となる。適度に力を抜ぬくことを覚えることですな」
　ぽんぽんと軽く肩を叩くと、白明はドアを開けて小部屋を出る。薬の瓶をポケットにねじ込んで星一郎もそれに続く。
　待っていたディーナと刀羽華が、戻ってきた白明と星一郎を見てばっと立ち上がった。
「は、白明様……星くんは……」
「大だい丈じょう夫ぶですよ、お嬢じょう様さま。細々と注意事じ項こうを伝えただけですから」
　白明は真面目くさった真しん摯しな声で刀羽華に答える。
「注意事項？　それは、どのような……？」
「漏もれ無なく伝えましたので、気になるのでしたら後でご本人に伺うかがって下さい」
　安心させるようにディーナに頷いた白明が、後ろを振り向むいてニヤリと星一郎に笑いかけた。
　星一郎は顰しかめっ面つらになりかけたのをすんでのところで抑えた。この一点をもってしても、星一郎の我慢強さがわかろうというも

のであった。
　何しろ振り向いた白明は、ニヤリと笑っているのは星一郎へ振り向いた右半分だけで、ディーナたちが見ているであろう左半分は真面目な表情を保っている。無む駄だに器用だ。よくもまぁ、こんなに自由自在に外面を取り繕えるものである。
　この白尽くめの女性は間ま違ちがいなく〝魔女〟だと、星一郎は心底納得した。
　これ以上時剋洞ここにいると遊ばれてばかりと、星一郎はディーナと刀羽華の背中を押すようにして出口へ向かった。
「ああ――そういえば一つ言い忘れておりました」
　出口に手を掛けた三人に白明が言った。
「どうにもこのところ、『外』の術師がこそこそと動き回っています」
「……『外』？」
「臭においからして、大陸の道士の類たぐいですな。もしかしたら目め障ざわりな事があるかもしれませんので、一応ご用心を」
　用心と言いながら、白明の声は『知らない人に付いて行かないように』『ハンカチを忘れないように』と、大人が子供に慣習的に言い聞かせるような調子だった。
　星一郎たちも、流れ作業のように頷いた。白明の言う『外』――国外の術師がどれほどの者かは分からないが、超ちよう一いち流りゆうの魔ま術じゆつ師しだろうと、神聖不可侵な畏光を背せ負おう〈聖楔者〉には傷一つ付けられないのだから。
「大丈夫だとは思いますが、一応それとなく心に留め置いて下さい。……それでは、またのご来訪をお待ちしております」
　白明の挨あい拶さつを背に時剋洞を出ると、急に都市のガヤ音が耳を打った。時計の針の音に囲まれていたせいか、急な変化に瞬しゆん間かん移動でもしたかのような唐とう突とつさだった。いや、もしかしたら時計の針の音すらも魔ま術じゆつ的てきな意図を持っていたのかもしれない。

そう思って背後を振り返かえると、そこには忘れられたような小さなお地蔵様の社があるだけだった。
「……白明殿どのは、やはり凄すさまじい腕うで前まえなのだな」
跡あと形かたもなく消えた時剋洞の『跡あと地ち』を見やり、ディーナは感心したように頷いた。
「白明殿は五百年掛けてもわたしたちに届かないと仰っていたが……〈聖楔者〉の能力を抜きにすれば、わたしなどは赤子のようなものだろうな……」
「白明様は、この国の術師たちの相談役ですもの。国内どころか、世界中でも五本の指に入る古典魔術師よ」
少女たちはしきりに感心しているが、性悪婆ばばあの本ほん性しようを垣かい間ま見みた星一郎は、感心しつつも苦いものを感じずにはいられないのであった。

路面電車で帰路に就くと、星一郎はディーナと刀羽華のもの問いたげな視線に居い心地ごこちが悪くなった。
白明と二人で何を話していたのかが気になるのだろう。
星一郎としてはあまり話したくない話題なのだが、二人が知らない振りをしてくれるとも思えない。かといって正直に話しても、あまりよろしい結果になりそうもないので、どう誤魔化そうかと、ポケットの中の瓶に触ふれながら巧うまい言い訳を考え続けた。
行きの時間よりはるかに短い時間に思える帰りの行程を恨うらみがましく思っていると、自宅のマンション前に救いの女め神がみが待っていた。
「――お待ちしておりました」
カルディア委員会のエージェント、グリムゲルデ・シュランゲンは、相変わらずの無表情で慇いん懃ぎんに頭を下げた。
「遅おくればせながら、先日の〈錬金術神ヘルメス〉――《書と知の神ナブー》の神格の回収おめでとうございます」

丁てい寧ねいで慇懃ではあるのだが、感情が篭こもっていない声も相変わらずである。あくまで事務的な響ひびきで、グリムゲルデは訪問の用件を告げはじめる。
「本日は、お三方との『夜宴』を望む声がありましたので、こうして伺った次し第だいです」
カルディア委員会は『摩天の夜宴』の監かん視し役やくにして進行役である。〈聖楔者〉同士の邂かい逅こうによる戦いが無む軌き道どうに陥おちいらないよう見張るのと同時に、《天命の第二書版トウプシマテイ・セカンダリイ》の完成のために恙つつが無なく『夜宴』が進行するように務めている。こうして〈聖楔者〉間の調整マネージメントも重要な仕事というわけだ。ある程度神格同士が引き合うと言っても、『夜宴』が進めば新京都の〈聖楔者〉の人数も減って邂逅の機会は減るであろうから、進行役は必要不可欠であった。
「……三人そろってで良いのか？」
「はい。貴方方との『夜宴』を望む〈聖楔者〉は二人組で、ともにチームで戦うことを望んでいます」
確かく認にんするディーナに、グリムゲルデは淡たん々たんと頷く。
自宅の居間に移動すると、グリムゲルデはさっそく要件に入った。
「貴方方との戦いを望むお二人は、〈狼おおかみ座ざ〉を顕けん現げん神格とするマリオン・ルシェール様と、〈獅し子し座ざ〉を顕現神格とするベルナデット・リエーヴル様です」
「星座を顕現神格とする〈聖楔者〉か……」
占せん星せい術じゆつの起源がバビロニア、もっと言えばその基き礎そとなったシュメール文明にまで遡れるのは考古学的にもはっきりしている。
古代バビロニア人の占星術者たちは、天球がラピスラズリで出来ていると説き、神の住まう天で瞬まばたく星々の連なりである星座に神々やその眷けん属ぞくたちの似姿を見た。現代の占星術に使われる星座はギリシャ神話が元となっているが、そのギリシャ神話の星座も

バビロニア時代に纏まとめられた星座を原型としている。特に『黄道十二星座』などはほとんどそのままと言っていい。
　星座に纏まつわる神話や言い伝えは、『天使と悪あく魔ま』とおなじくらいにバビロニア神話直系の物語プログラムであった。
「カルディア委員会のデータバンクにアクセスしてもらえれば、ルシェール様とリエーヴル様の戦いの記録も閲えつ覧らんできます。お返事はその戦せん闘とう映像をご覧になった後でも良いですが……いかがいたしますか？」
　星一郎はディーナを見やった。星一郎次し第だいである刀羽華もディーナを見る。
　行動方針を握にぎるディーナは、しばし瞑めい目もくした後でゆっくり目を開け、グリムゲルデへ向かって頷いてみせた。
「――承うけたまわった。謹つつしんで参加させていただくと返答してもらいたい」
「畏かしこまりました。挑ちよう戦せんを受けられた以上、お三方が舞ぶ台たいをお決めになるのがバランスが良いかと思われますが、希望の日にちと場所はございますか？」
「準備に一日置かせていただき、二日後深夜零時がよいと思うが」
　ディーナが確認すると、星一郎も刀羽華もすぐに首しゆ肯こうした。
「場所は……カルディア委員会に一任する」
「はい。では二日後に――三十三間堂再現史し跡せきを舞台といたしましょう。今現在、その近辺での『夜宴』は予定されていませんので、ちょうど宜しいかと存じます」
「よろしくお願いする」
「畏まりました。我らカルディア委員会は、皆みな様さま方がたのご健闘をお祈いのりいたしております。どうぞご存分に戦って下さい」
　グリムゲルデは図ったように完璧な動きで、深々と頭を下げた。
　相変わらず慇懃で愛あい想そのない態度だったが、これでしばらくは目の前の『夜宴』の準備に忙いそがしくなると、星一郎はカルディ

ア委員会のエージェントに密ひそかに感謝するのだった。

二章　　巨狼　ト　獅子

1

　カルディア委員会に指定された日の深夜、星せいーいち郎ろう、ディーナ、刀と羽う華かの三人は、指定された三十三間堂再現史跡へと向かった。

　敷しき地ち内ないへの入り口は開け放されたままだったが、人避よけの結界のおかげで周囲に人ひと影かげはない。

　庭の砂じや利りを踏ふみ締しめながら進んでゆくと、お堂の正面付近に小さな人影が二人分佇たたずんでいるのが確認できた。

　――映像で見てはいたけれど……

『摩天の夜宴バビロン・ナイト』の記録は、自由に閲覧することが出来る。魔ま術じゆつが人の意識によって発生する事象である以上、大おお掛がかりな儀ぎ式しきには多くの人間の注目が必要であるからだ。

　星一郎たちも、カルディア委員会の映像データを見たので、今夜の『夜宴』の相手の顔はすでに知っている。

　それでも、自分たちを待ち受けていた二人組を見て、星一郎はわずかに口元を歪めた。

　――実際に見ると、余計に幼く見える……

　マリオン・ルシェールとベルナデット・リエーヴルは、十代前半の少年と少女だった。どちらの背せ丈たけも、よいところ星一郎の胸の辺りまでしかない。

　マリオンは、癖くせのある黒くろ髪かみを短く切りそろえた、切れ長で鋭するどい瞳が目立つ少年だった。整った容姿なのだが、その睨み付けるのが常態らしい刺とげ々とげしい視線のせいで、人に慣れない野の良ら犬いぬめいた印象がある。お仕着せらしい衣服をラフというにはいささか乱暴に着き崩くずしているのも、彼の反はん抗こう的

てきな印象を際きわ立だたせていた。
　ベルナデットは、マリオンとは真逆に、非常におとなしく気弱な印象を見る者に与あたえる少女であった。緩ゆるく波打つ薄うす茶ちやの髪かみに、垂れ目がちな大きな瞳。ふっくらとした頬ほおや瑞みずみずしい唇など、「お人形みたいな」という形容の似合う美少女だった。そんな可愛らしい容姿に合わせたらしいエプロンドレスも実に似つかわしい。
　星一郎たちに気付くと、マリオンが一歩踏み出だしてこちらを睨み付け、ベルナデットはマリオンの背に隠かくれるようにして寄より添そった。彼らの二人組の立ち位置は見た目通りのものらしい。
　数メートルの距離を置いて立ち止まると、少女をかばうようにしたマリオンが、じろりと音が聞こえてきそうな刺々しい視線で星一郎たちを一人ひとり睨み回した。
「……ディーナ・チャレンジャーに宿すく儺な星一郎、忌いみ寸き刀羽華で間違いないな？」
　まだ声変わりもしていない甲かん高だかい声に、星一郎たちは思わず顔を見合わせてしまう。マリオンとベルナデットが想像以上に幼く、三人とも戦意がうまく回り出さないのだった。
「……いかにも。呼び出しに従って参上した」
　代表者としてディーナが返事をするが、彼かの女じよも目の前の少年と少女に戸と惑まどっているようだった。
「そちらは、マリオン・ルシェールとベルナデット・リエーヴルの両名で間違いないか？」
「ああ」
　ディーナの確認に、マリオンはぶっきら棒に頷うなずいた。その様子は、子供が精せいーいつ杯ぱい粋いきがっているようにしか見えず、刀羽華がこっそりと耳打ちしてきた。
「……星くん。あの子たち、どう思う？」
「……これまでの〈聖楔者ヒエロス〉と雰ふん囲い気きが違ちがうな……」

これまでに戦った〈聖楔者〉たちは、多少の差はあれどリラックスした緊きん張ちよう感、適度にコントロールされた戦意を纏っていた。

だが、マリオンはハリネズミのように周囲に敵意を放ち、ベルナデットは臆おく病びような小動物のように身体を縮ませている。まるで普ふ通つうの子供だ、と星一郎は思った。

二人からは神性を帯びた魔ま力りよくが漏れ出しており、〈聖楔者〉であることに疑いはない。霊れい視しによる巨きよ大だいな存在感と現実の見た目のか弱さであまりに差があるので、星一郎はもちろん、ディーナと刀羽華も、なんともいえない居心地の悪さを感じていた。

「……なんだよ」

マリオンが歯を剥むいて凄すごむが、精せいーいつ杯ぱい意地を張っているようにしか見えなく、迫はく力りよくというものに欠けていた。つい先日、同年代の少女と見えてもただ座っているだけで大きな存在感を放っていた白明と会っていただけに、マリオンの威い嚇かくは歳とし相応にしか映らなかった。

「あ、いや……なんでもない」

歳相応な、しかし神格の担にない手てとしては不相応な態度と雰囲気に、ディーナが虚きよを突かれた顔で思わず謝った。

もし狙ねらって油断させようとしているならよほどの策士だが、苛いら立だたしく舌打ちするマリオンは、ただ感情のままに振ふる舞まっているだけに見える。

「ちっ……余よ裕ゆうな面しやがって……」

「マ、マリオン……」

弱々しい——しかし耳心地ごこちのよい、鈴すずの音のような声が漏れる。

少年の背に隠れるようにしていたベルナデットが、マリオンにおずおずと声をかける。

「呼び出したのはこっちなんだから、あまり乱暴な言い方は……」

「ベル！　弱気な態度を見せるな！　あいつらは敵なんだぞ!?」

「ひぅっ!?　ご、ごめん、マリオン……」

マリオンに怒ど鳴なられ、ベルナデットはびくりと肩を竦める。彼女も、歳相応の、あるいは見た目以上に臆病で幼いたい気けな少女に見えた。

「……やりにくいな……」

ぼそりとディーナが漏らした。

古典魔術師の家系に生まれ、『摩天の夜宴』に備えて鍛きたえてきたディーナにしてみれば、二人の子供らしいほどに子供らしい態度は、およそ場にそぐわないものだろう。

神格を守り伝えてきた巫女みこの家に生まれ育った刀羽華も、マリオンとベルナデットを訝いぶかしげに眺ながめていた。

二人とも『摩天の夜宴』という〝戦いの場〟に現れた子供らしい子供たちを、うまく咀そ嚼しやくするのに苦労しているようであった。

——もしかして……

戸惑うディーナと刀羽華を眺め、星一郎はふと我わが身みを省かえりみた。

——〝巻き込まれた一いつ般ぱん人じん〟としては、あの二人の反応が当たり前なのか……？

星一郎も巻き込まれるようにして『摩天の夜宴』に参加することになったが、元々我慢強い——それも死の恐怖に対して我慢強い星一郎は、命の危険すらある超ちよう常じよう者の戦いにすんなりと順応していた。

もし星一郎が慣れていなかったら、マリオンとベルナデットのようになっていたのではないだろうか。とくにベルナデットの怯おびえた

様子は、荒あら事ごとに巻き込まれた女の子ならごく普通の反応ではあるまいか。
　そんな風に考えて眺めていたら自然と凝ぎよう視ししていたらしく、ベルナデットが星一郎の視線から逃のがれるようにマリオンの陰かげに身を隠した。
「……なんだよ、テメェ」
　ベルナデットの盾たてになったマリオンが、仔こを守る母犬のように星一郎に唸うなった。
「テメェ……ベルを見て何を考えてやがった！」
「いや、僕は……」
「ベルに何をするつもりだっ!?　女を二人も侍はべらしてるくらいだ。ベルも手て籠ごめにするつもりだなっ!?」
「意味を分かって言ってるのかな……」
　達者な日本語の語ご彙いに感心していると、両側から生ぬるい空気が漂ただよってくる。見回してみれば、ディーナと刀羽華が、曰いわく言いがたい視線を星一郎に注いでいた。
「……星一郎。お前、まさか……」
「……星くん……まさか、小さい子が……」
　じりっと距きよ離りを取ると、ディーナが刀羽華を咎めるように睨んだ。
「刀羽華！　お前が過か剰じようなスキンシップをとるから、こういう風に感性がねじ曲がってしまうんだ！」
「違うわよ！　……い、いえ、けど……まさかなんてことない顔をしてたのは、我慢してたんじゃなくて、本当に興味が……」
　刀羽華が絶望したような顔になって幼おさな馴な染じみを見み詰つめる。
　二人が何を考えているのか察し、必死に否定したい星一郎だが、ここで首を横に振ふってもドツボにはまるだけなのは明らかなのでグッとこらえる。
　だが、勘違いしたのはディーナと刀羽華だけではなかった。

マリオンが切れ長の眼めをさらに吊つり上あげ、敵意を殺気に変えて星一郎を睨み据すえた。
「テメェ！　ベルを攫さらうつもりだなっ!?」
「いや、それは……」
「黙だまれ！　まさかとは思ったが本当だったとはな！　テメェにベルは渡さない！　ここで叩きのめしてやる！」
特大の気き炎えんを吐き、マリオンが懐ふところから本型ストレージ魔ま導どうデバイス〈第二書版セカンダリイ〉を取り出し、額に楔形の八はち芒ぼう星せいを輝かがやかせた。
「〝神デインギルの威い光こうよ！　神の門バベルの鍵かぎよ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！　太母より遣つかわされし《狂くるえる巨狼ウルディンム》よ！　マリオン・ルシェールが汝なんじの似姿たる〈狼座ループス〉の名を借りて訴うつたえ奉たてまつる！　狂きよう乱らんを撒まく獣けものよ！　その牙きばと爪つめの威いをここに示し給たまえ!!〟」
マリオンの手にあった〈第二書版〉は、神性を顕あらわす虹にじ色いろの畏光を発するや、無数の破は片へんとなって散らばった。一いつ瞬しゆん空中に留とどまった数多あまたの光片は星のように瞬き、光の滝たきとなって地面へ降り注ぐ。銀色の魔力光が硝子ガラス細工のように形を変え、やがて巨大な獣の姿へと変わる。
鈍にぶい金属光こう沢たくの外皮を備えた、巨大な狼型の自動人形オートマタ。大地を踏みしめる四し肢しには鋭い爪が光り、すっと掲かかげられた頭部が軽く顎あごを開けば、日本刀を思わせる冷たい刃はの輝きが列を成していた。
あの巨狼のオートマタが、マリオン・ルシェールの権能武装なのだろう。
「ベル！　お前も出せ！」
神こう々ごうしい巨きよ獣じゆうを顕現させたマリオンが、背後のベルナデットへ叫さけぶ。
ベルナデットはマリオンの声にびくりと身体を震ふるわしたが、や

がて意を決したように自らも〈第二書版〉を取り出した。
「……〝神デインギルの威光よ！　神の門バベルの鍵よ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！　太母より遣わされし《大いなる獅子ウガルル》よ！　ベルナデット・リエーヴルが汝の似姿たる〈獅子座レグルス〉の名を借りて訴え奉る！　勇ゆう猛もうなる獣の王よ！　汝の威い容ようを今こそ此処ここに示し給え！〟」
　ベルナデットの〈第二書版〉もまた、マリオンのように無数の光となって散らばると、マリオンの巨狼を超こえる輝きを放ちながら、光が巨大なシルエットを形作る。
『っ……！』
　星一郎は息を呑のんだ。ディーナと刀羽華も同様だった。
　ベルナデットが顕現させたのは、力強い四肢に重じゆう厚こうな体たい躯くの、黄金こがね色いろの輝きを放つ獅子型のオートマタだった。
　マリオンが顕現させた狼型のオートマタは鋭く凶きよう暴ぼうな暗殺者を思わせる気配を放っているが、この獅子の存在感は凄まじく重い。そこに身み動じろぎもせず立っているだけで、まるで巨大な城じよう壁へきを前にしたような圧あつ迫ぱく感だった。
「やるぞ、ベルっ！　あいつらは敵だ！」
　マリオンの憎にく々にくしげな叫びとともに、巨きよ狼ろうが吠ほえた。
　巨狼の咆ほう哮こうはそれ自体に何らかの力が込められているのか、再現史跡である三十三間堂の実体幻げん像ぞうが輪りん郭かくを霞かすませる。
　そして咆哮をまともに浴びた星一郎たちは、射い竦すくめられたように一瞬身体が固まった。
「行け、〈ジェウォーダン〉！」
　すかさず巨狼が地を蹴けった。
　数メートルの距離はすぐに縮まり、巨狼〈ジェウォーダン〉が眼前に迫せまる。

「こ――のっ！」
　すぐさま自らも畏光を纏い、星一郎が巨狼の前に立たち塞ふさがった。
　迫ってくる巨狼の鼻先に、思い切り拳こぶしを振る。だが強力な神聖不ふ可か侵しんの守りに阻はばまれ、巨狼は何ら痛つう痒ようもなく星一郎の拳を首を振って弾はじき、頭を丸まる呑のみできそうな大顎をガバッと開いた。
　すんでのところで首筋を掴んで押おし留めた星一郎の鼻先で、鋭い牙がガチガチと噛かみ鳴らされる。
「星一郎！　そのまま押さえていろ！」
　金かな縛しばりから復帰したディーナが、すぐさま自分の〈第二書版〉を愛用の大おお槍やりへと変え、巨狼をけしかけたマリオンへと向かう。
　刀羽華も〈第二書版〉を権能武装へと変化させてディーナを追う。
「くっ……！」
　狂ったように唸り牙を剥く巨狼の首を押さえ、星一郎はなす術すべなく二人の背を見送った。

2

「刀羽華！　お前の風で牽けん制せいだ！」
「分かったわ！」
　こと戦闘では、三人の中でディーナに一日の長がある。戦闘に際しては、彼女が指示を飛ばすことが多い。
　普ふ段だんは口を開けば互たがいに憎にくまれ口ぐちばかりの刀羽華も、すぐに頷き返す。罵ば詈り雑ぞう言ごんをぶつけ合っていても――いや、ぶつかり合っているからこそ、刀羽華はディーナの事をよく理解しているようだった。
　刀羽華の権能武装〈クサナギ〉が虹色の光を放つや、使い手の意思に従って風を喚よんだ。一秒と経たたずに集められた強力な風の渦う

ずが、『夜宴』の舞台となった再現史跡の上空の景色を歪ゆがませる。
「高天原を――天をも騒さわがす風を喰くらいなさい！」
〈素盞嗚尊スサノオノミコト〉を顕現神格とする刀羽華の命により、鉄てつ槌ついじみた吹き下ろしダウンバーストがマリオンとベルナデットへと打ち下ろされる。幼い少年と少女であるが、正式な対戦にもかかわらず強きよう襲しゆうしてきた二人には刀羽華も腹に据えかねていた。キツイお灸きゆうを据えるのに躊躇ためらいはない。
「っ！　ベル！」
「〈リオン〉！　お願い！」
　泰たい然ぜんとしていた獅子が、少女の呼よび掛かけに傲ごう然ぜんと顎を上げる。迫ってくる風の鉄槌を見み据すえ――
　――轟ごうッ！
「え――」
　獅子が吼ほえた。
　音は響かない。獅子の咆哮は空気ではなく魔力そのものを震わした。
　魔力を掻かき乱みだす激しくも無音の咆哮は、刀羽華の喚び寄せた豪ごう風ふうと打ぶつかると、その風をそよ風のように無害なものへと変えた。
「そんな……」
　全力でないとはいえ権能によって喚んだ風を無力化され、刀羽華は目を見張った。
「シッ――」
　風を打ち消すべく上空を見上げた獅子の喉のど元もとへ、ディーナが間かん髪はつ容いれず神槍〈ブリューナク〉を突つき入れた。
　――ギィィィイイイイインンッッ！
　畏光の守護が削けずり合う虹色の火花が激しく舞まう。
〈ブリューナク〉の鋭い鋒ほこを突き込まれても、獅子型オートマタ〈リオン〉は泰然とした様子を崩さない。ゆっくりと顔をディーナへ

向け、
——轟ッ！
再び無音の咆哮を放った。
「な、に……」
ディーナの纏う神性の輝きが揺ゆらめき、畏光が掻かき消えた。
神聖不可侵の守護が消えると、〈リオン〉の畏光の圧力にディーナの槍が弾かれた。
すかさず獅子が太い前足を振り上げて爪を繰くり出す。
辛かろうじて大槍の陰に滑すべり込んで防ぼう御ぎよしたディーナだったが、獅子の剛ごう力りきによって軽々と弾き飛とばされる。
「ディーナ！」
刀羽華が随ずい騎きであるトリフネを召しよう喚かんし、空を舞うディーナを慌あわてて受け止める。受け止められたディーナは、青い顔をしていた。
「ディーナ……畏光は？」
「すぐに回復した……あの獅子の『咆哮』は、一時的なものらしいが……」
痺しびれる両りよう腕うでを解ほぐしながら、ディーナは獅子を睨んだ。
人造の獅子は、その巨きよ体たいで自分の主たちの小さな身体を隠してディーナの視線を受け止めた。ディーナの〈ブリューナク〉や刀羽華の〈クサナギ〉のような権能武装ではなく、神しん獣じゆう系の神格の寄り代として作られた『随ずい獣じゆう』。かつて戦った波はゞば木き節せつ奈なの〈オロチ〉と同じタイプだ。
随獣は〈聖楔者〉本人の戦せん闘とう力りよくを肩かた代がわりするので強力なのが常だが、その中でもあの獅子型オートマタは凄まじい力を感じさせた。
「……獅子座、と言っていたな……」
「黄道十二星座の一つ……大物ね」
ディーナの呟つぶやきに刀羽華が首肯する。

いまや『星座占うらない』として、ほとんど別個の〝神話〟と化した星座たち。その代表格である黄道十二星座は、神話の主神クラスの知名度と信しん仰こうを誇ほこっている。そして『獅子座』はギリシャ神話における『ネメアの獅子』のエピソードにあるように、偉い大だいさ強大さの象しよう徴ちようである。

「しかも原型は《大いなる獅子ウガルル》……『十一の獣イレブン・クリーチヤーズ』の一体か……」

バビロニア神話において、『旧ふるき神々』の一柱でありすべての神々の母であった《太たい母ぼ竜りゆうティアマト》が、『新しき神々』を殺し尽つくすべく生み出したとされる十一柱の神獣――それが『十一の獣』だ。日本神話の八岐之大蛇ヤマタノオロチの源流ともいえる《七頭龍りゆうムッシュマッヘ》も、『十一の獣』の一柱である。

太母の放った『十一の獣』の大半は『新しき神々』に退治され、あるいは調ちよう伏ぶくされたが、《大いなる獅子ウガルル》は《畏おそるべき赤竜ムシュフシュ》と共に、『新しき神々』を祀まつる神しん殿でんの守護獣として古代中東全土で敬われた。王権を守護する女神の守護獣も獅子であった。幻げん想そうの獣の王がドラゴンならば、地上の獣の王が獅子であると、遥はるか太古から獅子は強大さの象徴であったのだ。

凡およそ神話上の〝獅子〟という概がい念ねん、信仰が、あの随獣の力強さに繋つながっているのだ。

今も、こうして上空で相対しているだけで、あの獅子に内包されたエネルギー量をびりびりと感じることが出来る。

「……降ろしてくれ、刀羽華」

「どうするの？　どっちかが囮おとりになって使い手を狙う？」

「随獣相手にはそれが一番だが、まだあの獅子の力が測れない……これまで、あの二人はもっぱら巨狼が攻こう撃げきしていたからな……まずは力の程を測る。空から風を打ち込んでくれ」

「分かったわ」

ディーナが地上へ飛び降りると、刀羽華はトリフネを上じよう昇しようさせる。

刀羽華が〈クサナギ〉を突き上げて風を招くのを背に感じながら、ディーナも自分の権能武装に力を注いだ。

「貫つらぬけ、〈輝ける神槍〉！」

三さん叉さとなった大槍の切っ先から眩まばゆい紫し電でんが放たれた。

目を見張り小さい身体を寄せ合う子供たちを背に、獅子が声なき咆哮を上げる。

――轟ッ！

魔力を震わす音無き振しん動どう波はが雷かみなりとぶつかり合う。

生なま半なかな防御は紙のように貫き、〈聖楔者〉の神聖不可侵の守護にも痛手を与える〈輝ける神槍〉の雷らい撃げきだが、そのエネルギーを負担する魔力そのものが揺らされてその狙いがそらされる。無効化こそ免まぬがれたが分ぶん裂れつし枝分かれした細い稲いな妻ずまが、獅子とその主たちの周りに着ちやく弾だんした。

「あの咆哮は攻こう撃げき的てきな畏光、と見るべきか!?」

「きゃあっ！」

着弾の衝しよう撃げきにベルナデットが悲鳴を上げる。

その悲鳴に素す早ばやく反応し、着弾の衝撃で飛んだ小さな瓦が礫れきを獅子が受け止める。主の少女に怪我けが一つないのを見て取り、気高き随獣は着地したばかりのディーナへ顎を開いた。

『ごるぁぁぁおおおおおおおおおおおおぁぁぁぁぁぁぁああああああああああっっ!!』

耳を劈つんざく本物の咆哮がディーナを打った。

ビリビリ震える空気の壁かべが襲おそい、ディーナは衝撃とも振しん動どうともつかぬショックを受けて吹ふき飛ばされた。畏光の守護のおかげで傷はないが、おかげで次の行動が阻そ害がいされる。

「くっ……魔術的なものも物理的なものも自在というわけかっ！」

すぐに受け身をとって立ち上がるが、獅子が追つい撃げきの咆哮を放とうと顎を開き、
「空気はこっちの領分よ！」
させじと上空の刀羽華が風の弾だん丸がんを雨あめ霰あられと放つ。準備しただけあって、一発一発が砲ほう弾だん同然の威い力りよくだ。
ディーナへ放とうとしていた咆哮の狙いを上空に変え、獅子が魔力を震わせる。
――轟ッ！
風弾の着弾直前で間に合った咆哮が強固な空気の塊かたまりを解く。絨じゆう毯たん爆ばく撃げきの如ごとき猛もう風ふうは夏の空気を散らす涼りよう風ふうに変わってしまう。
「ディーナっ!?」
「続けてくれ、刀羽華！」
最初は畏光の守護を散らされて度ど肝ぎもを抜ぬかれたが、獅子の咆哮の弱点は分かった。あの攻撃はあくまで『咆哮』――魔力か空気かの違いはあれど振動の伝でん播ぱだ。振動は、発生源から遠のけばその影えい響きようが落ちる。あの咆哮が畏光を散らすのは基本的に至近距きよ離りだろう。
咆哮を浴びた刀羽華のトリフネがいまだ浮うかんだままなのがその証明だ。
あの厄やつ介かいな咆哮はあくまで至近での脅きよう威い。
畏光の削り合いにおいて近きん距きよ離り戦が封ふうじられたのは厄介だが、こちらは数の理もある。長中距離で二方向から飽ほう和わ攻こう撃げきを加えればいい。幸い、あの獅子は主を守るために最初の位置から移動していない。
子供を狙うようで少し心が痛むが、戦いである以上は最善の策を取るまでだ。
ディーナの意図を読み取り、刀羽華は再度風を喚んだ。後方の星一郎への加勢のため、彼女も躊躇いはなかった。

「薙なぎ払はらえ、〈戦神の剣クサナギ〉！」
「貫け、〈輝ける神槍〉！」
　風が吠え、雷が光る。
　獅子は上空へと咆哮を放って槍やり衾ぶすまのように降り注いだ風刃を打ち消す。
　が、ディーナの雷撃には間に合わず、その黄金色の身体へと紫電が突き刺ささる。畏光の加護が悲鳴を上げ、虹色の火花が激しく舞う。
『ぐるぅ……』
「〈リオン〉！」
　揺れる獅子を見て、マリオンの背に庇かばわれていたベルナデットが思わず身を乗り出した。
　ディーナは追撃を加えるべく走り出す。
〈ブリューナク〉に稲妻を纏わせ、雷の刃を形成する。最大出力を放つのに星一郎の助けがいるディーナが編み出した戦闘方法だった。
　星一郎には及およばなくとも十分に超ちよう人じん的てきな速さで踏み込んだディーナは、存分に威力の乗った雷の刃を獅子の喉元へと叩たたき付つけた。
「灼やき貫け――ッ！」
　ぞわっ、と悪お寒かんが走る。
　ディーナは攻撃を無理やり中断して横っ飛びに距離を取った。
　コンマ一秒前に頭のあった位置を、何かが鋭い音を立てて通り過ぎた。
「なん――」
　鋭い風切り音を立てる細長い影が、飛び退のいたディーナを追ってくる。
　宙を泳ぐように迫ってくる正体不明の脅威に、ディーナはとっさに雷の刃の収束を解く。周囲に撒き散ちらされた幾いく多たの紫電の幾いくつかがバチリと音を立ててディーナに迫っていた影を迎げい撃げきした。
「尾お、か……？」

弾かれたのは、鋭い刃は片へんの連なった鞭むちで、それは獅子の尾部から伸のびていた。『獅子の尾シヤムシール』を意味する曲刀があるが、随獣〈リオン〉が振るう尾は蛇鞭剣スネークブレイドの如く自在に振るわれるようだった。

獅子はシャラリと音を立てて尾鞭を手て頃ごろな長さに引ひき戻もどし、上空へと再び咆哮を放った。ディーナを援えん護ごすべく放たれた刀羽華の風弾が無効化される。

「……思った以上に堅いな……」

大槍を構え直し、ディーナは口の中で呟いた。

近距離では敵の守護を打ち消す咆哮、中ちゆう距きよ離りでは伸しん縮しゆく自在の尾鞭。隙すきのない布ふ陣じんで相手の出方をどっしり待ち受ける姿は、まさしく王の威い風ふうを漂わせる。

あの獅子は一体の獣ではなく、堅けん固ごな城壁と考えるべきだった。

「抜かった……こういう『普通に強い』相手こそ、星一郎が向いているのに……」

純じゆん粋すいな身体能力の高さこそが権能であるといっていい星一郎の方が、あの獅子のように堅く待ち構える敵には打って付けだろう。

いっそ受け持ちをすぐに変えるべきか？

ディーナがそう考えた時、後方で変化が生じた。

「ぐあっ！」

星一郎の苦鳴が響く。

獅子を視界に収めつつ確認すれば、星一郎が巨狼に右みぎ肩かたを噛み付かれて血を流していた。畏光の反発も見られず、一方的に鋭い牙が星一郎の肩に食い込んでいく。

「星くんっ！」

ディーナより先に、刀羽華がトリフネを駆かって星一郎の元へと向かう。大剣を振り被かぶり、星一郎の血を啜すする巨狼の首筋へと狙いを定める。

「星くんを離はなせ！　この駄だ犬けん!!」
『ギュルアッ！』
　咥くわえた星一郎を首を振って放ほうり捨てると、巨狼は向かってくる大剣へと牙を突き立てた。
　ギャリギャリと金属が擦すれ合う音が響ひびく。畏光の反発による火花も異音もなく、刀羽華の権能武装がガッチリと咥え込まれた。
「そん――っ!?」
　狼がぐいと剣を振り回まわす。
　刀羽華がバランスを崩くずしたところに、巨狼がその牙を突き立てようと口を開く。
「させるか！」
　獅子が動かない様子なのを見て全力で駆け寄ったディーナが雷撃を放つ。
　巨狼の胴どう体たいに突き刺さった電でん撃げきが畏光を削る虹色の火花を盛大に発生させ、巨狼へしたたかな衝撃をもたらした。
『ギャウッ!?』
「お返しだ！」
　体勢を立て直した星一郎が、傷ついた右肩を庇うように左拳を巨狼へ叩き込む。
　――ギィィイイイ――――ンンッッ！
「お、お、お――おおおおおっ！」
　星一郎の全身に楔くさび形文字の刻印が輝く。畏光を纏まとうというよりも畏光そのもの、身体そのものに神性が宿ったかの如く濃のう密みつな畏光の輝きが、巨狼の守護を打ち破る。
　巨狼は悲鳴を上げて吹き飛ぶが、野生動物さながらの靭しなやかな動きで着地して主の側へと走り寄る。ダメージが然さ程ほどなさそうなのは自分で跳とんだからだろう。〈聖楔者〉の指示によるものか巨狼自体の判断によるものか、いずれにせよ目を見張る反応速度だった。
「大だい丈じよう夫ぶ、刀羽華？」

「それは星くんの方でしょ!?」
　刀羽華が星一郎の右肩を指差して叫ぶ。
　巨狼の牙を受けた星一郎の肩かたの咬こう傷しようからは、いまもだらだらと血が流れ出ている。
「大丈夫だよ……骨までは行っていない」
「それでも重じゆう症しようだ……刀羽華、星一郎を癒いやしてやってくれ」
　巨狼と獅子へ槍を向けつつ、ディーナが近づき指示をする。
　刀羽華が慌てて治ち癒ゆの魔術をかけ始める。
「お前らしくないな……何があった？」
「畏光の守りがほとんど通じなかった……噛まれる瞬しゆん間かんに思いっ切り力んだから、なんとか噛み千切られずにすんだけど……」
「……力んだだけで対たい抗こうできるとは、いよいよ人間離ばなれしてきたな」
　喜ぶべきか悲しむべきか判断しづらいが、何にせよ星一郎だからこそこの程度ですんだ点は幸いというべきかも知れなかった。
「見たか変態野や郎ろうが！」
　巨狼を撫なでながら、マリオンがいい気味だとばかりに声を張り上げた。
「オレの随獣〈ジェウォーダン〉の牙は、畏光の守りを引き裂さく！　こいつの牙の前じゃ、〈聖楔者〉も生身同然だ！」
「〈狼座〉……というよりも〝狼という神格〟の具現か……」
　獅子の随獣〈リオン〉と同様、『十一の獣』由来の強力な魔ま獣じゆうの流れをくむ巨狼の随獣〈ジェウォーダン〉も、油断できない性能を持っているようだ。
〈輝ける神槍〉の雷撃や〈戦神の剣〉の風といった権能、あるいは先日の波々木節奈の随獣〈オロチ〉の雨や毒とも違う。
　ディーナは、最初はあの随獣たちの権能を詳くわしく知ろうと思っていたが、あの高い戦せん闘とう能力そのものがあの二体の獣の神格の権能なのだ。

ある意味、星座という象しよう徴ちよう的てき、偶ぐう像ぞう的な顕けん現げん神格を得たからこその権能ともいえる。

もっとも、ディーナはあの二体の随獣と似た存在をよく知っているのだが。

「高密度の畏光の集中による打だ撃げき力りよくと、目を見張る運動能力……星一郎を二人分相手にすると思うべきだな」

「僕ぼくは獣じゃないんだけど？」

星一郎が肩を回しながら苦言を漏もらす。治癒術の助けがあったとはいえ、呆あきれる再生力である。

具合を確かめるように星一郎が肩を回すと、マリオンが苦々しく唾つばを吐はいた。

「チッ……頑がん丈じような奴やつだな。さっさとくたばれよ」

「……目の敵にされているみたいだが、何か身に覚えはあるか？」

「僕の方が聞きたいよ」

「本当か？　あっちは随ずい分ぶんとお前個人を毛け嫌ぎらいしているみたいだが……」

窺うかがうようにマリオンを見やると、彼かれは整った顔を盛大に歪ませて歯を剥いていた。自身の操あやつる巨狼よりもよっぽど獣じみた表情であった。

「……ええと……君とは今夜初めて会ったけど、なんでそんなに僕を睨にらんでるのかな？」

「いけしゃあしゃあと！　こっちは知ってるんだぞ！　お前が……」

星一郎が首をひねりながら問いかけると、マリオンは火を吹かんばかりの憎ぞう悪おとともに指を突き付ける。

「お前が、とんでもない変態野郎だってことはな！」

「……はい？」

「恍とぼけるな！　聞くのもおぞましい性せい癖へきをした最悪の女好きだって情報は入ってるんだ！」

「……そうだったのか？」

ディーナがじとりとした視線を向けると、星一郎はぶるぶると首を

振った。
「とんでもない！」
「そうよ、ディーナ！　星くんが女好きなら、私はとっくに星くんと結けつ婚こんしてるわ！」
「それは、単に刀羽華おまえが対象外だからじゃないのか？」
「そ……そんなことは……」
　刀羽華は愕がく然ぜんとした顔で否定しようとするが、少し身に覚えがあるのか「そんな筈はずは……いえ、でも！」などと自問自答し始めた。
　思わぬダメージを受けた刀羽華をひとまず置いておき、ディーナは再度星一郎を見やる。
「繰り返かえすが、ほんとうに身に覚えは？　火のない所に煙けむりは立たないというが？」
「もし本当に変態的な性癖の女好きなら、ディーナが無事な理由はないと思うけど」
「……褒ほめ言こと葉ばと受け取っておこう」
　ディーナは自分が魅み力りよく的てきな女性だという意味に聞こえた嬉うれしさを抑おさえて神しん妙みように頷いた。
　だが、それもマリオンの次の言葉を聞くまでだ。
「オレは騙だまされないぞ！　お前は幼女趣しゆ味みの変態野郎だろうが！」
「……ほほう？」
　それなら自分のように魅力的な女性が無事な理由になると、星一郎を見やるディーナの視線が鋭するどくなる。
「……そうだったのか？」
「ええと……まさか、信じてないよね……？」
「安心しろ。ロンドン塔とうは無理だが、なるべく居い心地ごこちの良い場所を用意してやろう」
「牢ろう獄ごくは確定なんだ……」
「幼女趣味の変態野郎は人類の敵だからな」

「……信じないでよ……僕が幼女趣味の変態に見えるの？」
「しおらしい態度をすんな！　そのクソ変態野郎はベルを狙ってやがるんだ！」
「……」
「いやいやいや！　僕はあの子と会うのも初めてだから！」
「嘘うそを吐つくな！　ネタは挙がってるんだ！　テメェが幼女趣味のサディスティックで、幼気な少女に食い込む縄なわに興奮する最低の変態嗜し好こうの持ち主だってな！　ベルみたいな弱気でおとなしい性格が大好きなんだろうが！」
　マリオンがゴミでも見るような目で星一郎を睨む後ろで、ベルナデットが怯えたようにマリオンの背にしがみついた。その仕草は保護欲を刺し激げきする小動物のようだが、反面、可逆趣味の変態には極ごく上じようの獲え物ものに映りそうだった。
「……やけに具体的だな」
「お願いだからそろそろ勘かん弁べんしてくれない？」
「そうだな。お前の性癖が本当はどうなのかは置いておくにしても、さすがに変だ」
　たとえ星一郎が本当に隠かくれ幼女趣味だとしても、マリオンの言うことはどうにも具体的すぎるし、端はなからこうだと確信しているような言い方だ。
『夜宴』が始まって以来、星一郎とはほとんど一いつ緒しよに行動しているから、彼がマリオンとベルナデットの二人に接せつ触しよくしたようにも思えない。
　なんとも言えない気持ち悪さを感じ、ディーナはマリオンに問とい掛けてみる。
「――マリオン・ルシェール。一つ聞きたいが、あなたはこの男が幼女趣味の変態野郎だとどうして知ったのだ？」
「……ほんとにもう勘弁してくれない？」
　星一郎が情けない声で懇こん願がんする。ディーナはいつもやり込められる側の自分がちくちくとダメージを与あたえているのに気分が

良くなるが、
「はっ！　んなこと教えるかよ！　この尻しり軽がるがっ！」
「……は？」
「テメェが尻軽のビッチだって事も知ってるんだからな！　男と見ればほいほい従う雌めす豚ぶたが、いっちょ前に人間の言葉を喋しやべるんじゃねぇ！」
「……」
　何を言われたのか、ディーナはとっさに判断がつかなかった。
　だがマリオンの甲かん高だかい声が脳に染しみこんでゆくにつれ、喉のどが自然と震え始めた。
「くっ……くくっ……くっくっく……」
「……ディーナ……？」
「くくっ……いや、今日は記念すべき日だな……今日ほど頭にきたのは初めてだ……」
　怒いかりと一緒に笑いが喉からこみ上げてくる。
「……刀羽華！　いつまでブツブツ言っているんだ!?」
「ふぇ？　え？　ディーナ？　な、何をそんなに怒おこってるの……？」
「怒ってなどいない。わたしは冷静だ。とても冷静だ。北極のブリザード並に冷静だとも」
「ま、まったく冷静に見えないんだけど……」
　いつもなら何か言い返してくる刀羽華が怯えた表情をしている。変だな？　だが、今はとてもありがたい。
　何しろ、速すみやかにあのクソ生意気で口の悪いガキに躾しつけをしなければならないのだ。
　余計な手間は掛けたくない。
「さぁ、やるぞ？　あの目め障ざわりな犬っころと大きいだけの猫ねこもどきを片付けて、じっくりとあのガキを追い回してやらねば！」
「は、はは……ねぇ、君？　何を言ったのか知らないけど、早めに謝あやまった方が――」

「ウルセェ、このスベタ！」
「……へ？」
「気持ち悪い声で丸め込もうとしたって無む駄だからな！　媚こびを売る相手の区別もできない空っぽの頭をしといて偉えらそうに言うんじゃねぇ！　このノータリンの馬ば鹿か女！」
「……ふ、ふふ……手伝うわ、ディーナ。あのクソガキのお口を治ち療りようしてあげましょう？」
「くく……初めて意見が合ったな、刀羽華」
「ふふ……私たちの心は一つよ、ディーナ」
　笑い合った二人の少女は、それぞれの得物を力強く握にぎり直した。
「……行くぞ、クソガキ」
「泣いて謝るなら今のうちよ……？」
「やってみろ、クソ女ども！　変態野郎ともどもぶっ倒たおしてやる！」
　相手を子供と思って様子見をしていたディーナと刀羽華だが、さすがに腹に据えかねて本物の殺気を漂わせていた。
　口くち汚ぎたなく罵ののしったマリオンの意思が伝わったのか、巨狼〈ジェウォーダン〉が低い唸うなり声ごえを上げる。
　互いにじっと睨み合あう〈聖楔者〉たちの間で、戦意と殺気が高まっていく。
　誰だれかがごくりと唾を飲み、皆みなの身体が次の行動を起こそうと力を溜ため、今まさに飛び掛かろうとし、
「……っ！　マリオン！」
　場の緊きん張ちように怯おびえていたベルナデットが、切せつ羽ぱ詰つまった声を上げる。
　獅し子しが少女の声とともに飛び出し、その身体に光の矢が突き刺さった。
『ぎゃおおおおぉぉぉおおおおっ!!』
「〈リオン〉っ!?」

身を盾たてにした随獣に少女が悲鳴を上げる。
が、その悲鳴は、すぐにその場全員の驚おどろきの声にかき消される。
『な――』
獅子が撃ち抜かれた次の瞬間には、夜空を無数の光の矢が埋うめ尽くしていた。
戦せん闘とう舞ぶ台たいとなった三十三間堂再現史し跡せきの敷しき地ちを埋め尽くさんばかりの光の矢――魔ま力りよくの矢が音もなく降り注ぐ。
「これは――」
驚く間もなく対応を迫られ、ディーナは反射的に〈ブリューナク〉を振ふる。
大槍と接触した光の矢が、虹色の火花を散らした。
「畏光――〈聖楔者〉の攻撃!?」
身体に受ければ加護を破られかねないと、ディーナは懸けん命めいに槍を振るった。
刀羽華も大剣を盾にして矢を防ぎ、星一郎も拳を使ってなんとか弾く。
突とつ然ぜんの矢の雨はほんの二、三秒の間の事だったが、再現史跡の様相は一変していた。
神性の込められた魔力の矢が降り注いだため、三十三間堂の実体幻像は敢あえ無なく魔力光を発して崩れてゆく。内部の仏像の群れも罰ばち当あたりなことに矢の雨に貫かれ、無残な姿を見せながら崩れていった。
「て、めぇ、ら……」
光の矢が突き立ったその向こうで、マリオンが陰いん鬱うつな怒り声を漏らした。
マリオンとベルナデットの周囲には光の矢は見当たらない。獅子の咆哮が間かん一いつ髪ぱつで打ち消したらしい。おかげで怪我はないようだったが、マリオンは心底軽けい蔑べつしきった瞳ひとみで

ディーナたちを睨んだ。
「やってくれたな……騙だまし討うちか。さすがに変態野郎と阿あ婆ば擦ずれどもだな！」
「待て！　わたしたちもこの事態は――」
「騙されるかよ！　テメェらの言葉は何一つ信じねぇ！　――吼えろ、〈狂乱の獣ジエウオーダン〉!!」
　マリオンの叫びに合わせ、巨狼が今こ宵よい一番の巨きよ大だいな咆哮を上げる。
『ギャルォォォォオオオ

「そっちが卑ひ怯きような手を使うなら、こっちも手段は選ばないからな！　覚かく悟ごしろ、クソども！」
　口汚い捨すて台詞ぜりふとともに、マリオンが巨狼の背に飛び乗った。
　ベルナデットも、獅子の背に抱だきつくようにしてよじ登る。
「待てっ！」
「待つかよ、クソ女！」
　巨狼と獅子が跳ちよう躍やくして撤てつ退たいすると、周囲の野良猫たちが狂くるったように飛び掛かかってきた。
「このっ！」
　ただの野良猫だが、数が多い。光に群がる虫のように飛びかかってくる猫の群れで、あっという間に視界が猫で埋まった。
「ちぃ！　こっちも後退だ！　刀羽華、星一郎……星一郎っ？」
　仕方なしに撤退しようと振り向むけば、星一郎が頭を押さえて蹲うずくまっていた。
「星くんっ!?」
「……すま、ない……ちょっと、動けない……」
　ぶるぶると震えている星一郎は、びっしょりと汗あせを掻いていた。刀羽華に支えられ、ようやく立つことが出来るといった状態だった。
「くっ……とにかく逃にげるぞ！　こんな数の野良猫を相手にしてられない！」
　ディーナが殿しんがりになって大おお槍やりを振るって野良猫の狂きよう騒そうを防ぎながら、彼かの女じよらは疑問と混乱を抱かかえて撤退した。

※　※　※

「……あ～あ。失敗かぁ」
　何の変へん哲てつもないとあるビルの屋上で、一人の少女が混乱の

坩る堝つぼにある三十三間堂再現史跡を遠目に見やってぼやいていた。
　十代後半の、不思議な雰ふん囲い気きの少女だった。
　立ち姿は一級の武具を思わせる凛りゞりしさなのに、肩を竦すくめる仕草は年とし頃ごろの少女が調子に乗っておどけるような緩ゆるさだ。一見するからに掴つかみどころの無い少女であった。
　だが、右手に持つ巨大な弓を軽々持ち上げるのを見れば、只ただ者ものでないことだけは確かであった。
「うーん……思ったよりも勘かんがいいな？　あのちっちゃい娘こは本当に要注意だねぇ」
「……随分と余よ裕ゆうだな」
　おどける少女が振り返ると、ゆらりと黒い影かげが姿を見せる。前身黒尽ずくめのその姿は闇やみの中に溶とけそうで、冷ややかな双そう眸ぼうだけがぽっかり浮かんでいるかのようだった。
「……貴様は〝任務〟に失敗した。もう少し殊しゆ勝しように振る舞って欲ほしいものだ」
「殊勝に振る舞って得があるならそうするけど、ね」
　少女はぱたぱたと手を振って、へらへらと軽く笑い返す。
「あたしが殊勝に振る舞ったところであんたたちの態度が変わるわけでなし。だったら気を遣つかうだけ無駄だね」
「……だとしても、貴様が我々の〝駒こま〟であることに変わりはない。〝駒〟は任務と命令に忠実でなければ、存在価値はない」
「命令違い反はんなんかしてないだろ？　心配しなくても仕事はするよ。ちょいとミスったが、すぐに命中させるさ。これまで通りだ」
「……そう願いたいものだ。我々はこれからのことを検討する。貴様は別名あるまで待機していろ」
「はいはい。りょーかい、りょーかい」
「……外地の人間が。〝本土〟に不利な報告を上げられたくなければ、軽けい薄はくな言葉くらいは改めろ」
　黒尽くめの影が冷ややかな眼光を閉じると、ふっとその姿を霞かす

ませた。
　ビルの屋上には、再び少女一人だけが立つのみとなる。
「やれやれ……。あたしも『弓』に選ばれた身の上なんだけどねぇ」
　少女は芝しば居いがかった仕草で大おお仰ぎように肩を竦め、手にした大弓を天頂に向ける。
「……天狼は狙ねらいを外さない、さ」
　天頂――北極星の位置する場所へ狙いを定め、少女はにやりと笑いかけた。

3

「――なるほど。予期せぬ者の襲しゆう撃げきを受けた、と」
　マリオンとベルナデット、二人の『随獣使い』たちとの戦いの次の日。
　ディーナは、彼らとの『夜宴』を持ち込んだグリムゲルデを呼び出した。
　宿儺宅に呼び出されたグリムゲルデは、待ち構えていたディーナと刀羽華に恭うやうやしく頭を下げた。そして昨晩の一部始終を聞き終えると、冷ややかな美び貌ぼうの麗れい人じんは珍めずらしく表情を僅わずかばかり歪ゆがませて小さく嘆たん息そくした。
「……星一郎様との出会いといい、波々木節奈の件といい、そして今回の件といい、貴女あなた様さまの周りはトラブルばかりですね、ディーナ・チャレンジャー様」
「失敬な」
　まるで自分が諸悪の元げん凶きようと言いたげなグリムゲルデに、ディーナは特大の苦虫を噛かみつぶしたような顔になった。
「トラブルメイカーはわたしではなく、星一郎の方だ」
「そうですか？　わたくしはどんぐりの背比べであると思いますが」
　皮肉げなセリフが、単なる事実確かく認にんのように聞こえる淡たん々たんとした物言いであった。

さも当然のことを告げるようなグリムゲルデは、その冷ややかな顔をディーナの隣となりに座すわる刀羽華にも向ける。
「ああ、ご安心を。刀羽華様もちゃんと我々のトラブルメイカー枠わくに入っていますので」
「……それはありがとうございます」
刀羽華が慇いん懃ぎん無ぶ礼れいの見本みたいなグリムゲルデにささやかな皮肉を返すが、カルディア委員会のエージェントは気にした風もなく話を続けた。
「それで、マリオン・ルシェール様とベルナデット・リエーヴル様ですが、あのお二人には三人目の仲間、あるいは協力者が居られるという情報はありません。貴方方の協力者でもないのでしょう？　お二人の証言を信じるなら、ですが」
「もちろん、わたしたちの仲間でもない」
「でしょうね。となると、無関係の〈聖楔者〉という事ですか」
グリムゲルデは冷ややかな瞳を蛇へびのように冷たく光らせた。
「困りますね……不意打ちのようなやり方で決着を付けられるのは、『摩天の夜宴』としてあまり歓かん迎げいせざる戦いなのですが」
新京都で行われる『摩天の夜宴』の最終目的は、無限に魔力を湧ゆう出しゆつする機構の鍵かぎである《天命の書版》の復元である。その為ためには〈聖楔者〉たちが保持する神格の賦ふ活かつが必要だ。『摩天の夜宴』という〝戦いの舞ぶ台たい〟が用意されたのも、錆さび付き変質した神格に活を入れ、十分に活性化した神格を統合して《天命の第二書版トウプシマテイ・セカンダリイ》の完成度とそこに宿る加護を可能な限り引き上げる為であった。
『摩天の夜宴』とは、正しく〝祭り〟なのだ。
祭りは劇的であればあるほど良い。熱ねつ狂きようと興奮で満ちれば満ちるほど、神に捧ささげる祭りは最上のものとなる。
神々に捧げられる〝舞闘〟が不意打ちのようなやり方であっさり決着が付けられるのは、祭事を管理するカルディア委員会には好ましくない状じよう況きようであった。

「それを考えると、ディーナ様たちはトラブルも多いですが派手な戦いが多くて盛り上がりが良いので、カルディア委員会としては痛いたし痒かゆしですね」
「……お褒めいただき光栄だな」
　ディーナがささやかな皮肉を返すが、もちろんグリムゲルデは睫まつ毛げ一本も動かさなかった。皮肉と諧かい謔ぎやくを愛する英国人的気質とまったく相あい容いれない相手である。
「……それで、『摩天の夜宴』を管理するカルディア委員会は、今回の件でどう動く？」
「我々カルディア委員会と致いたしましては、公正なる『夜宴』の実行を妨さまたげる方には、厳重なる注意を呼よび掛かけます。それで行動を改めていただければ良し。従わぬ場合は、〈聖楔者〉の皆みな様さまに情報公開とバックアップを行います。先日の波々木節奈の場合と同じですね」
「カルディア委員会は、昨夜の襲しゆう撃げき者しや――いや、敢えて〝襲撃犯〟と呼ぶか――昨夜の〝襲撃犯〟に心当たりがあるのか？」
「〝襲撃犯〟の正体は分かりかねますが、問題のある方々は委員会でも要注意人物のリストが用意されております。まずはその方々に確認を取る必要がありますね。その内お二人の確認はすでに済んでおりますが」
　グリムゲルデが丁てい寧ねいな言葉とともに冷ややかな瞳を左右に動かすのを見て、ディーナは自分と刀羽華がその『要注意人物のリスト』に入っているのを理解した。
　正直さが必ずしも人間関係の潤じゆん滑かつ剤ざいとならない見本だと、ディーナは盛大に顔を歪める。
　刀羽華もムッと唇くちびるを歪めた。不ふ機き嫌げんなのもあるだろうが、言っても無駄な言葉を呑のみ込むための反応だろう。
　慇懃無礼な麗人は、そこで今気付いたかのように表情を動かさずに首を傾かしげた。

「……そういえば、星一郎様は如何いかがなされました？」
　グリムゲルデに問われ、ディーナは一いつ瞬しゆん口ごもった。相手は第三者を標ひよう榜ぼうするカルディア委員会の者とはいえ、あまり不利になりそうな情報は渡わたしたくないからだ。
　……無論、この女性が慇懃無礼なのも理由の一つではあるが。
「……星一郎はいま自室で休きゆう憩けい中だ。昨晩の『夜宴』で一番負傷したのが星一郎だからな」
「左様ですか。すぐに治癒したように見えましたが……〝特異点〟の彼でもそうそうすぐには完全回復とはいかないようですね」
「……〝特異点〟？」
「はい。我々カルディア委員会での星一郎様の呼び名です。何といっても、この新京都に集った〈聖楔者〉の中で唯ゆい一いつ、〈第二書版〉ではなくその身体に神格を宿した存在ですから」
「……そのことで聞きたかったのだけど」
　と、刀羽華が強こわ張ばった表情でグリムゲルデに問い掛けた。
「……カルディア委員会は、星くんを――宿儺星一郎をどうするつもりなの？」
「どう、とは？」
「今あなたが言ったように、星くんは〝特異点〟――生身に神格を宿した唯一の〈聖楔者〉よ。そんな星くんに、あなたたちはどんな誠意を見せてくれるの？」
　だんだんと問い掛けるのではなく、問い詰つめると評すべき口調になってゆく刀羽華。最愛の幼おさな馴な染じみが関かかわることだけに無理もない。古こ堂どう白はく明めいによって、より詳しよう細さいに星一郎の状態を知っただけに、刀羽華の心配も一ひと入しおだろう。
　あの只ただ人びとならざる古典魔ま術じゆつ師しは「すでに《全き人間》の神格は星一郎の一部だ」と言っていた。「神格を引き剥はがすのは癒ゆ着ちやくした臓器を摘出するのに斉ひとしい」とも。
　星一郎が『摩天の夜宴』を戦い抜く中でいつか神格を回収されるこ

とになったら……そう考えたら、幼馴染みの少年を愛するこの少女は、気が気でなくなるのも仕方がなかろう。
　かく言うディーナも、星一郎の現状については歯がゆく思っている。刀羽華が問わなかったら、自分もこの場でグリムゲルデに問い質ただしていただろう。
　何しろ、宿儺星一郎の中に眠ねむっていた〈全き人間〉を目覚めさせ、『摩天の夜宴』へ参加させる契けい機きを作ったのは、他ほかならぬディーナ自身なのだから。
　自ずと険しくならざるを得ない二人の少女の視線を受け、しかしカルディア委員会のエージェントは、さしたる表情の変化も見せず、
「特に、何も」
　と、言った。
「……特に？」
「何も……ですって？」
「はい。確かに〝特異点〟である星一郎様はカルディア委員会としても興味深い〈聖楔者〉ですが、『摩天の夜宴』における《天命の第二書版》の完成という目標に変化はありません」
「それは……星くんが死んでも構わないというつもり!?」
「まさか。最大限のバックアップは約束いたします。もし星一郎様が敗北して神格が回収され、その結果として体調を崩されたなら、カルディア委員会は他の神格を失った〈聖楔者〉同様に手厚く保護いたします」
「体調を崩す……それだけで済むと思うのかっ!?」
「そうですね……貴女のお兄様のように植物状態になる可能性もたしかにありますね」
「貴様っ――」
　敬愛する兄の――『摩天の夜宴』に参加する一番の理由を口にされ、さすがにディーナも激高して腰こしを浮うかせ掛ける。
「いまさらこの場で言うことでもないのですが――」
　怖こわい顔で睨むディーナと刀羽華に、氷の麗人はゆっくりと温度

のない視線を巡めぐらせた。
「この『摩天の夜宴』は、戦いです。それも〈聖楔者〉という、人類史で最高の個人戦闘能力を持った神々の代行者、英えい雄ゆうの再来たる者たちの戦いです。カルディア委員会がどれだけ安全に管理しようとしても、一度はじまれば何が起こるかは予測不能……そういう覚悟を持って、貴女方も新京都へやって来られた筈です」
「……」
「負傷もするでしょう。心を蝕むしばむ恐きよう怖ふも覚えるでしょう。二度と立てない身体になるかも知れません。最悪の場合は命を落とすかもしれない。それを覚悟した上で、貴方あなたたち〈聖楔者〉は『摩天の夜宴』に参加された。ある者は叶かなえたい願いの為に。ある者は純粋な欲望の為に。ある者は受うけ継ついだ誇ほこりの為に。ある者はそれこそ生きる糧かての為に」
「……」
「刀羽華様は家名の誇りの為に参加された。もっとも勝かち抜ぬく意欲には欠けるようですが……貴女様は違ちがいますよね、ディーナ・チャレンジャー様？」
「……何が言いたい？」
「貴女様はお兄様の〈輝ける神槍ブリューナク〉の神格を借り受けて『摩天の夜宴』に参加された。『最強の〈聖楔者〉』と呼ばれながら危き篤とくとなったお兄様の無念を晴らす為、回復の見込みもないまま眠り続けるお兄様を助ける為……ああ、お兄様を襲おそった『書版狩がり』を見つけるという理由もありましたね？　貴女様ほど『夜宴』を勝ち抜く強い理由を持つ方も珍しいでしょう。そんな貴女様が、今さら危険があると言って委員会を責められるのですか？　むしろ貴女様こそが、誰よりも星一郎様の神格を回収したい筈でしょう？」
「……それとこれとは話が別だ」
「そうでしょうか？　貴女様の《至高の聖王》の神格は強力です。戦うほどに力を増す――神格を回収することで、貴女様の畏光は目に見

えて出力を増したように見受けられます。以前のように低出力の畏光をやりくりする苦労が減ったのでは？」
「……」
　事実だった。ここ最近は相手の畏光に押おし負けることも少なくなっていた。
　畏光とは神性の顕あらわれ、神々の齎もたらす加護のもっとも基本の力だ。〝数多あまたの神格の加護を借り受ける〟という《至高の聖王》の権能は、兄の権能武装を顕現させるだけでなく、神聖不ふ可か侵しんの加護の輝きをも増していたのだ。
「神格強度が低くても他の神格を回収することで加護を増してゆく貴女様の《聖王》の権能は、ただ一柱の神格の加護を得ることしか出来ない〈聖楔者〉たちにとって〝鬼札ジヨーカー〟です。星一郎様とは違った意味で〝特異点〟といっていい。他の神格をすべて回収し、残った〈聖楔者〉が貴女様と星一郎様のお二人だけとなった時……貴女様はどうなさるおつもりだったのですか？」
「……」
「我々カルディア委員会は、最大限のバックアップを〈聖楔者〉の皆様にお約束しましたが、その本分が『《天命の第二書版》の完成』であることもはっきり伝えています。〈聖楔者〉の安全か、《天命の第二書版》の完成か……両者を秤はかりにかけたら、カルディア委員会は後者を取る。それを知った上で、貴女様もこの『夜宴』に参加された筈です」
「……なるほど、よく分かった」
　ディーナは、舌打ちだけはかろうじて我が慢まんして吐き捨てた。
「お前たち委員会が……《天命の第二書版》にしか興味が無いことはな」
「はい。我々カルディア委員会はそれにしか興味が無いからこそ『摩天の夜宴』の管理を各国から委い託たくされているのです」
　にべもないとはこういう状態を言うのか。
　グリムゲルデは、冷ややかな眼まな差ざしも口調も変えず静かに頷

うなずいた。
「……まるで使いっ走りのセリフだ」
「事実、私はただの使いっ走りですので」
　この女の表情に罅ひびを入れることの出来る皮肉はないものかと、ディーナは憎にく々にくしくグリムゲルデの顔を睨みつけた。
「それに、それほど星一郎様の心配をなされる必要もないかもしれませんよ？　貴女様と星一郎様が最後まで勝ち残り、貴女様が彼を信じて回収した神格の全すべてを譲ゆずり渡せばよろしいのです。星一郎様は一度約束したことを翻ひるがえすお方ではないとお見受けしますし」

その点は、ディーナも同意見だった。

星一郎はあくまで『護まもるための戦い』の為に戦っている。その護るべき対象をディーナと定め、彼女の騎き士しとして行動するのが星一郎の『摩天の夜宴』に対する姿勢スタンスだ。

その事をいまさら疑いはしない。宿儺星一郎という男の覚悟を疑う地点はとっくに過ぎ去っている。

問題は、首しゆ尾びよくディーナが星一郎と共に『夜宴』を勝ち抜いたとして、彼にすべての神格を預けたらどうなるか、だ。現在の星一郎を、白明は〝適応〟と表現していたが、果たして数十数百の神格を受け入れた時、星一郎はどんな変化を見せるのか？

想像など出来るはずがない。

神話の時代であっても、神そのものを受け入れた英雄など存在しないのだ。神が乗り移ったと言われる神官や巫女みことて、あくまで神の一部が経路を繋つなげたに過ぎない。

だが、この『摩天の夜宴』は違う。

〈聖楔者〉たちが奪うばい合うのは《天命の書版》の欠片かけらに眠っていた神格そのもの。神の本体とも言うべきものなのだ。

そんなものが宿った時、その人間はどうなってしまうのか……神の権能を振るう〈聖楔者〉であっても、神ならぬ身には計り知れないことであった。

「……それに星一郎が《天命の第二書版》と適合してただ一人の〝現あら人ひと神がみ〟となった場合——神そのものとなった時、カルディア委員会は神に斉しい存在を看過できるのか？」

「星一郎様ならば大だい丈じよう夫ぶなのでは？　彼は自分勝手に強大な力を振るうような方ではなさそうですし。彼の欲は〝自分以外の誰かを護る〟ことですから、カルディア委員会の管理を快く受け入れてくれるのではないでしょうか？　我々カルディア委員会の目的は〝全人類の利益〟となることなのですから」

「……管理、か。人ひとりの権利など、《天命の第二書版》の完成とは比べようもないということか」

「はい。その通りです」
　グリムゲルデは淡々と頷いた。
「すでにこの世界は、魔ま導どう工学なしには――魔力なしには動きません。使えば幽かく世りよへ還かえるだけの完全にクリーンなエネルギーなしには。発電所が魔導工学の恩おん恵けいでどれだけ高効率化されたと思います？　汚お染せんされた土地の浄じよう化かがどれほど容易たやすくなったと思います？　アプリで起動する簡易治ち癒ゆ術が年間何人の人間の命を救っていると思います？　その巨大な恩恵を思い出してしまった現在、魔力の恒こう常じよう的てきな供給は全人類の生存に必要不可欠です。だからカルディア委員会という一組織に強大な権力が許されているのです。《天命の第二書版》を完成させ、魔ま力りよく湧ゆう出しゆつ炉ろ〈ＢＡＢＥＬ〉を起動させる。幽世から無限の魔力を汲くみ出す機構の完成なしに、人類の次の百年の栄光はありえないのです」
「……」
「我々カルディア委員会は、ただ一人の人間の去就を気にして『摩天の夜宴』を取りやめることなど致しません。だからこそ、我々は『夜宴』の管理者として認められているのですから」
　押し黙だまったディーナと刀羽華を眺ながめて一つ頷くと、もう話も終わったと感じたのか、グリムゲルデはすっとソファから立ち上がった。
「……襲撃犯については早さつ急きゆうに対応いたします。その正体を掴んだなら、すぐにでも貴方方にご連れん絡らくいたします。それがはっきりするまで、我々カルディア委員会からの『夜宴』の取り次ぎは一時ストップしておきましょう。より良い『夜宴』の実行こそ、我々のもっとも望むところですので」
　結局この女は、やってきてから今まで、まったく表情を変えなかった。言うことはいちいち正論だったが、それだけに腹立たしい。
　せめて毛筋一本でもいいから冷ややかな無表情を歪ませてやりたいと、ディーナは何か反はん撃げき材料はないかと頭の中の引き出しを

ひっくり返した。
「……よりよい『夜宴』の実行か。本当に皆がそう思っているのなら幸いなのだが、な」
「何が仰おつしやりたいのでしょうか？」
「最近この街を〝外〟の術者が動き回っていると風の噂うわさに聞いたのだがな」
「……どこからの情報ですか？」
　ぴくり、とグリムゲルデがその冷ややかな顔を僅かばかり動かして聞き返した。瞼まぶたの端をほんの少しだけ震わせただけのとても微び妙みような変化であったが、これまでが微び動どうだにしなかっただけに、ダメ元で言い放ったディーナの方が予想外の変化に驚いた。
「……風の噂で、と言ったが？」
「噂、噂ですか……察するに在野の古典術師からの情報でしょうか？　なるほど……有益な情報ありがとうございました。何かありましたらお気軽にご連絡下さい。それでは、私はこれで失礼致します」
　グリムゲルデはひとりで納なつ得とくしたように頷き、さっと踵きびすを返した。
　返事も聞かず風のように去ってゆくその背を、ディーナは目をパチクリさせて見送った。
「……あの女、表情筋があったのね……」
「ああ……」
　呆ぼう然ぜんとした刀羽華の言葉に、ディーナは気の抜けた声で頷いた。

　ジョキリ、ジョキリ、と鋏はさみが鳴く度たび、鏡の中の毛むくじゃらが少しずつ人間に近づいてゆく。
　腰のあたりまで伸のびた自分の髪かみを掴み、星一郎は無心に鋏を動かした。足元にはすでに黒くろ髪かみの山が出来上がっており、その中には爪つめの切りカスも溜まっていた。

ここ最近、戦せん闘とう後の朝は髪と爪が伸びて野人のような有様になっている。その度にディーナと刀羽華に知られないように髪と爪を元通りに整えていたが、あまり意味がなくとっくにバレていた。考えてみれば彼女たちもあれで一応女性のカテゴリーに入っているし、他人の外見にはそれなりに目が利くのだろう。

「……それにしても今日は量が多いな……」

委員会への説明をディーナと刀羽華に任せ、星一郎は変わり果てた外見を繕つくろうのに掛かかりっきりになっていた。

髪も爪も硬かたさを増していたので、髪切りも爪切りも一苦労だったのだ。

物を掴むのも苦労しそうに伸びた爪は普ふ通つうの爪切りでは刃はが立たず、箪たん笥すの奥おくの工具箱に眠っていたニッパーを使った。

今こうして髪を切っているが、弾だん力りよくがすごいので一気に切きり払はらうのが骨で小まめに纏まとめて切り落としている。

自分の身体ながら、人間を相手にしている気がしない。野生動物でも相手にしているみたいだった。

なんとか髪の毛けをみっともない程度に切り整えると、上半身に張り付いた髪を払い落とす。そのついでに自分の身体もチェックするが、鏡で背中を確認すると、昨晩まではなかったはずの変化があった。

「……また文字が増えたな……」

左の肩けん甲こう骨こつのあたりに刻まれた楔形文字に触ふれ、星一郎は溜め息いきを漏もらした。

自分の変化に辟へき易えきしているのではなく、これをディーナや刀羽華が見たら心配するだろうと思って気が重くなったのだ。

地面に敷しいた新聞紙を丸めて髪と爪の切れ端はしを纏めてゴミ箱に放ほうると、身体を隠かくすためにシャツを被かぶった。

自室を出ると、どうやらカルディア委員会の人間――十中八九グリムゲルデであったろうが――はすでに帰ったようだ。リビングでは難

しい顔をしたディーナと刀羽華の二人が顔を突つき合わせていた。
　彼女らが顔を突き合わせて静かにしているとは珍しいこともあるものだと思っていると、二人は同時に顔を上げて星一郎を見た。
「星一郎。もう身体はいいのだな？」
「うん」
「本当に？　星くんはすぐに無理をするから……」
　刀羽華が立ち上がり、気き遣づかわしげに近づいて来た。いつもなら心配する幼馴染みにからかい文句の一つでも返すのだが、今の星一郎はぐっと息を呑んだ。
（う……まずい……）
「星くん？」
　刀羽華が首を傾げる。さらりと黒髪が揺ゆれ、彼女の首筋に視線が集中する。その視線は自然と移動し、立派に育った幼馴染みの胸むな元もとへ吸い寄せられてしまう。
「……なんでもないよ。ちょっと喉のどが渇かわいて」
　無理やり視線を引ひき剥がすと、星一郎は精せい一いっ杯ぱいの苦く笑しようを返してキッチンへ向かった。冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出して振り返かえると、気になったらしい刀羽華が後を追って歩み寄ってくる。
「大だい丈じよう夫ぶ、星くん？　朝ごはんもまだでしょう？　何か食べる？」
「……いや、何かを食べるって、僕ぼくが用意するんだろう？
ちょっといまは面めん倒どうだから水分だけでいいよ」
「う、それはそうだけど……けど星くん、いつも何か作り置きしてるじゃない？　何かお腹なかに入れた方がいいと思うけど……？」
　心配そうな顔で刀羽華がさらに寄ってくる。互たがいの体温が感じられるほどの距きよ離りだ。
　普ふ段だんなら何てことのない顔で平然とするのだが、いまは拙まずかった。とても拙い。星一郎はごくりと鳴りかけた喉を必死に抑おさえた。

間近に迫せまって来たおかげで、背の高い星一郎は自然と刀羽華を見下ろすことになる。そうすると、彼女の豊かに育った胸の谷間が否いやが応おうでも目に入る。

女性の胸というのは意外と簡単に谷間を演出できるものだが、刀羽華の場合は普通に立っていてもしっかり出来上がっている。二つの大きく柔やわらかな膨ふくらみの間に出来たその隙すき間まは、男の視線を引き込む奈な落らくの谷の如しである。

（……恨うらむぞ、亜あ矢や香かちゃん……）

こんな格好をさせて送り込んできた刀羽華の妹に、星一郎は本気の恨み言ごとを送った。

「星くん……？」

心配そうに刀羽華が手を合わせると、柔やわ肉にくが隆りゆう起きして谷間が深まる。一体何処どこまで落とす気なんだこの肉は！

と、星一郎はらしくなく胸中で頓とん珍ちん漢かんな悪態をついた。

星一郎は、別に性欲がないワケではない。女ばかりの家族にかこまれて悶もん々もんとすることも多い。それでも星一郎が周囲から『枯かれてる』などと思われるのは、表情筋を取とり繕うスキルが異常に高いからである。

星一郎は我が慢まん強づよい性格なのだ。

なのだが、今はその我慢強さが揺らいでいる。

さんざん見慣れて平気な顔をするのも流れ作業になったハズの幼馴染みの肢体からだに、いつも以上に興奮している。深い谷間が視覚的に訴うつたえてくる彼女の柔らかな物体をガン見するのを抑えるのに、通常の三倍の自制心が求められていた。

「……いや、やっぱり水だけでいいよ。食欲はないけど、元気だから……」

むしろお腹いっぱいである。元気なのも本当……一部が異常に元気だ。

誘ゆう蛾が灯とうみたいに視線を引き寄せる二つの果実から目を引き剥がし、星一郎は表面上は普段通りに、しかし内心は急いで自室に

戻もどろうとする。
「待て、星一郎！」
　リビングから脱だつ出しゆつしようとした星一郎を、ディーナが出口に身体を割り込ませて通せんぼする。
「お前……顔が赤くないか？　もしかして、熱があるのではないか？」
　言うが早いか、ディーナは返事を待たず滑すべるように接近し、星一郎の額に手を当てた。
「～～～～！」
　悲鳴を上げなかった自分自身に、星一郎は最大級の拍はく手しゆを送った。
　喉のど元もとに刃を押し当あてられたみたいに動きを止めた星一郎は、目と鼻の先にあるディーナの顔を凝ぎよう視しした。
（う、ううう……）
　白人女性の肌はだの白さの割に肌目が荒あらかったりする。これはメラニン色素が少なくてダメージを受けやすいとか角質層が厚いからとか言われるが、実際にはその土地土地の食生活の影えい響きようが大らしい。そうだとすると、ディーナの食事メニューを、世の女性たちは知りたくて堪たまらないだろう。
　白々とした肌には染しみの欠片も見当たらなく、その頬ほおを突いて瑞みずみずしい弾力を確かめたくなる。いや、確かめたいのは頬よりも、薄うす紅べにに色付いた唇の方か。蜜みつ蜂ばちが花に吸い寄せられるようにディーナの唇に視線を惹ひき寄せられた星一郎は、花弁の奥の蜜みつの味を想像し、今度こそ「ゴクリ」と唾つばを呑んだ。
　幸い、真しん剣けんに星一郎の体調を心配して熱を測るディーナは、生なま唾つばを呑んだ様子に気づくことはなく、軽く唸うなって朱しゆ唇しんを引き結ぶ。
「ふ、ぅむ……やはり熱があるか？　汗も掻かいているみたいだ……」

体調を気にしてくれるなら早く下がって欲しい。どうにかなってしまいそうなのを我慢するのに、手に持ったペットボトルを握にぎりつぶしそうだった。

（落ち着け、落ち着け……そうだ、深呼吸！　……って、匂においが!?）

ディーナの横髪が鼻先を擽くすぐると、シャンプーと汗とその他もろもろが混じり合った甘あまい匂いが脳底をガツンと殴なぐりつけてくる。事ここに至っていまだ自制心を失っていない自分の我慢強さは、ギネスとして登録されて然しかるべきではあるまいか。

――だが運命は、まだまだ星一郎の我慢強さを試ためす気満々らしかった。

「ほんとに!?　ちょっと、私も……！」

「こら、刀羽華！　ムリヤリ割り込んでくるな……！」

星一郎に熱があるらしいと聞いて、刀羽華が自分も熱を測ろうとディーナの横から手を伸ばす。ごく自然にベストポジションを取ろうとしてディーナを押し退のけようとし、それにディーナが反射的に抗あらがう。

星一郎の目の前に、二人の美少女の顔がぐぐっと迫ってくる。

いつもなら即そく座ざに圏けん外がいへと難を逃のがれる星一郎であったが、今この瞬しゆん間かんは案山子かかし同然の木で偶くの坊ぼうと化していた。

組み合っていた二人がそろって倒たおれ込んでくるのに抗うことも出来ず、星一郎は無様にリビングの床ゆかに後頭部を打ち付けて倒れ、敢あえ無なく少女たちの下した敷じきとなる。

「ぐっ……痛いな、も……う……」

「くぅ……何をするのだ、刀羽華!?」

「いたた……ディ、ディーナがすぐに退どかないのが悪いんじゃない!?」

いつもの調子でディーナと刀羽華が口論を始める。

――星一郎の上で。

薄うす手でのシャツ一枚向こうで、脇わき腹ばらを両方からぐにぐにと柔らかく圧あつ迫ぱくするむず痒がゆい感かん触しよくに、星一郎の脳内が多大な刺し激げきを捌さばききれずにフリーズしかける。おまけに彼女たちの太ふと腿ももが彼かれの足を挑ちよう発はつするように蠢うごめき合う。おかげで頭に上った血が下半身へ移動して、星一郎はほんの一瞬だけ理性を取り戻した。

「っ……人の上で暴れるなぁぁぁあああああ!!」

自前の臀りよ力りよくを総動員して二人を撥はね除のけ、星一郎は顰しかめっ面つらをして彼女らを睨にらみ付つけた。

「……心配してくれるのはありがたいけど、二人のおかげでたん瘤こぶが出来たよ！　まったく……部屋で休ませてもらうからね！」

一方的に言い放つと、ぽかんとした彼女たちをほっぽって、あからさまにどしどし音を立てて自室に引っ込む。バタンと部屋のドアを叩たたき閉め、星一郎は前まえ屈かがみになってどっと脂あぶら汗あせを掻いた。

「ッ……あ、あぶなかった……」

どくんどくんと大きく跳ねる心臓を押さえ、星一郎は机の上の薬の瓶びんを手に取った。先日、白明から渡された瓶だ。

錠じよう剤ざいを取り出し、ペットボトルの水をがぶ飲みして喉の奥へ送り込む。

しばらくジッとしていると、身体に渦うず巻まいていた興奮の熱が少しずつ納まってゆく。

「……ほんとに効くとは思わなかった……白明さんに感謝しないとな……」

危機が過ぎ去って、星一郎は胸の奥から安あん堵どの息を吐ついた。

ここ最近、星一郎は代謝の上じよう昇しようで髪が伸びたり爪が伸びたり、挙句は身体に楔形文字の刻印が浮き上あがったりと目まぐるしく変化していたが、彼が一番重大視していたのは外見の変化より、むしろ内面の変化の方だった。

身体の変化が進むにつれ、劣れつ情じようといったあれやこれやが抑えづらくなってきた。

有あり体ていに言えば、性欲を持て余している。

食欲も高まっていたので、おそらく生物に本来備わった欲求そのものが高まっているのだろう。

おかげでここ最近、ディーナと刀羽華に相対するのに並々ならぬ労力を費やしていた。

星一郎は、別に『枯れている』ワケではない。あくまで我慢強いのであって、性欲がないワケではけしてないのだ。

「……さっきは、本当に危なかった……」

ディーナと刀羽華というタイプは違えどめったに見ない美少女二人の柔やわ肌はだを間近に感じ、もう少しで我慢の限界だった。あと数秒正気に戻るのが遅おそかったら、星一郎は生しよう涯がいで初めて怒いかり以外で我を失っていたかも知れない。

そんな星一郎の高まった性欲を密ひそかに見破った白明が渡してきた薬だが、予想以上に興奮を抑えてくれた。仮かり初そめの賢けん者じやタイムに感謝である。

「困る……困るよなぁ……」

自分の身体の変化にはほとんど無む頓とん着ちやくの星一郎だったが、内側で燻くすぶる劣情にはほとほと困り果てていた。

星一郎にとって、身体の変化にはあまり抵てい抗こうがない。十年前死に掛けて、一度自分の身体が自分のものでなくなる経験をしているのが大きい。胸から下がほとんど麻ま痺ひしてベッドに横たわっていた幼い日々で、身体は意識を裏切るのだと思い知っている。

けれども今星一郎を悩なやませている欲求は、星一郎自身がディーナや刀羽華に女性的な魅み力りよくを感じているからだ。肉体は、心に忠実に従っているに過ぎないのである。

「……なのに二人とも、僕の懊おう悩のうなんてまったく気にする素そ振ぶりもないし……」

頭を抱かかえる星一郎だが、これは自じ業ごう自じ得とくというものだった。今まで『女の裸はだか？　なにそれ美味おいしいの？』と言わんばかりに気のない素振りをしてきたのだから、今さらそんな態

度を取られた彼かの女じよたちが自重するわけもない。
　ディーナと刀羽華の肌の色や柔らかさを思い出して悶々としていると、星一郎の腹が鳴る。性欲も高まったように、食欲も相応に高まっていた。
「……あんな事を言ったけど、戻って何かを食べるか……」
　リビングに戻ろうとすると、ぴくりとその動きが止まった。
　自室のドアの向こうで、二人分の息いき遣づかいと体温を感じ取る。ディーナと刀羽華がうろうろと部屋の前で様子見をしているらしい。
「……いまは顔を合わしたくないな……」
　せっかく納まったばかりの性欲が再燃しかねないと、星一郎は苦い顔をしてドアから離はなれた。
　とはいえ、食欲を抑えるのは難しかった。身体が作り変えられているのでむしろこちらの方が顕けん著ちよで、日々エンゲル係数が増大している。
　ぐるりと部屋を見回すが、部屋の中には口に含ふくめられるものはない。
　腹の虫と戦う星一郎は、意を決して部屋の窓を開け、ベランダのサンダルを履はいた足裏を手て摺すりにかけた。
「……この身体能力も良よし悪あしだな……」
　星一郎は嘆たん息そくすると手摺りを蹴けり、誘ゆう惑わくだらけの自宅から脱出した。

4

　身体能力で強ごう引いんに自宅マンションから飛び降りた星一郎は、さながら密林の肉食動物のように建物の屋根から屋根へ飛び移り、十分に離れたところで裏道に降り立った。
　適当なコンビニでカゴいっぱいの食料を買い込むが、さすがに食べ歩き出来る量ではないので腰の落ち着ける場所を探した。

「どこか、公園か神社は……」

黙って出てきた疚やましさのせいか、自然と人気のない方へと歩いて行く。やがていつの間にやら、いまの星一郎を皮肉るようなラブホテルの密集地域に足を踏ふみ入いれていた。観光地でもある新京都のこういったホテルはそれらしい飾かざりはなく外観はただの旅館のようだが、やはり雰ふん囲い気きは雰囲気である。

さすがに日中なので人気のないホテル地帯を横目に足早に通り過ぎると、こじんまりとした神社に辿たどり着ついた。あまり有名ではないようだが、縁えん結むすびの神社らしい。

縁結びの神社の近くにホテル街。縁えん担かつぎか即そく物ぶつ的てきかは判断しづらいところだ。

とはいえ人気もなく丁度良いので腰を落ち着けようと鳥居を潜くぐって境けい内だいに入ると、

「……？」

首筋にぴりっと違い和わ感かんを覚えた。差さし迫った危機感ではなく、予感めいた感覚だった。

「……」

慎しん重ちように進んでゆくと、神社の裏手に公園があった。ブランコと鉄棒という最低限の遊具が配置された公園で、奥のベンチに小さな人ひと影かげが蹲うずくまっていた。

さらに近付く。ベンチに横になっていたのは十代前半の女の子だった。植木が丁度よい陰かげとなって、気持ちよさげな木こ漏もれ日びがさらさらと薄茶の髪を撫なでている。幼げながら人形のように整った顔は日ひ向なたぼっこをする子こ猫ねこみたいに目を閉じて緩ゆるみ、老ろう若にやく男なん女によを問わずほんわかさせる微笑ほほえましさに溢あふれている。

知っている顔だった。

というより、昨晩出会ったばかりの少女である。

星一郎が反応に困って見つめていると、少女は小さく呻うめき、小さく欠伸あくびをしながら横になっていたベンチの上に身体を起こし

た。
「ふ、わぁ……ふわ？」
「……」
　タレ目がちな大きな瞳ひとみが、ばっちりと星一郎の視線とぶつかった。
　寝ね起おきの少女は初めこそぼんやりしていたが、だんだん意識がはっきりしてくると共に大きな瞳をさらに大きく見張って、陶とう器きのような白しら肌はだを青褪ざめさせていく。
「あ、う、あうわ……！」
　少女は勢い良く立ち上がって走り出そうとしたが、寝起きのせいもあったのか、すぐに足を縺もつれさせてばたんと音を立てて転んでしまった。小さな子供がやってしまう、勢いを全く殺せない転び方であった。見てるだけでも痛そうだ。
「ひうっ！　……う、うぅ……」
　転んだ少女がぐすりと湿しめった声を漏らす。
　何もしていないのに居た堪れない気持ちになり、星一郎はおずおずと少女に話しかけた。
「……ええと、ベルナデット・リエーヴル……さん、だったよね？」
　昨晩の『夜宴』で戦った〝獣けもの使い〟の片割れ。獅し子し型の随ずい獣じゆうを操あやつっていたベルナデット・リエーヴルは、星一郎に呼ばれてビクッと身体を震ふるわせてびくびくと顔をこちらに向けた。
「……大丈夫？」
　人見知りな小動物を相手にしているようで、星一郎は必要以上に気を遣った。食料の詰まったビニール袋ぶくろをベンチに置くと、ベルナデットに駆かけ寄よってしゃがみ込む。
　転んだまま動けないベルナデットは、星一郎が近付くと声もなくびくびくと震え上がっていた。
「……ひとまず、立とうか？」
　星一郎は少女の脇わきに手を差し入れて立ち上がらせた。小こ柄が

らな少女はとても軽く、気を付けないとそのまま空へ投げ飛ばしそうで気を使った。

星一郎が触れても、ベルナデットは声を出ださない。「やめて」とか「放して」くらいは言われるかと思ったが、怯おびえきった雛ひな鳥どりみたいに口を閉ざしていた。

（……調子が狂くるうな……）

星一郎にとって女性というのは、強したたかで気分屋な悪いた戯ずら好ずきの妖よう精せいみたいな存在だ。

目の前の少女みたく気弱で繊せん細さいな〝女の子らしい女の子〟は珍めずらしく、どうにも反応に困ってしまう。なるべく丁てい寧ねいに優やさしくしようと、星一郎は彼女の全身をチェックした。膝ひざが擦すり剥むけているので、壊こわれ物ものを扱あつかうようにベルナデットを抱だき上げた。

「っ……！」

「傷を洗うだけだから」

息を呑のんだベルナデットに説明して公園の水場へ運ぶ。緊きん張ちようの極きよく致ちらしい彼女は星一郎に為なされるがままで、もし自分が本物の悪人だったらどうするつもりなのだと心配になるほどだった。

傷口を水で洗ってベンチに戻ると少女を座すわらせ、さっき買い物をした時にもらったナプキンで傷を押さえる。

簡単に傷の処置を終えると、星一郎はベルナデットから少し離れて同じベンチに腰を下ろした。

「やれやれ……」

慣れない相手への気遣いで、さらに空腹が増したように感じた。

星一郎はビニール袋からオニギリやサンドイッチを取り出し、包装を剥いた端から胃の中へ送り込んでいった。

黙り込んで星一郎を窺うかがっていたベルナデットだが、彼がすごい勢いで食べ物を消費し始めると、小さな口をぽかんと開けて呆あつ気けに取られてしまった。その後も星一郎が食事を続けていると、

――くぅぅ～～ん……

星一郎の腹の音が狼おおかみの高たか鼾いびきなら、彼女の方は子犬の鳴き声といったささやかさだ。それでも少女には恥はずかしい音に違いなく、ベルナデットは頬を赤くして俯うつむいてしまう。

「……食べる？」

開けたばかりのツナサンドを差し出して訊たずねてみる。

少女は差し出されたサンドイッチと差し出す星一郎の顔をきょろきょろと眺めていたが、やがておずおずと受け取り、恐おそる恐る口を付けた。

「……んむ……んむんむ……」

「お茶も飲む？」

紅茶のペットボトルを差し出すと、今度は迷う素振りをした後で、小さくペコリと頭を下げて受け取った。こくこくとペットボトルに口を付けるその仕草は、なんだかハムスターが水を飲んでるみたいで、星一郎は微笑ましくなってひっそりと笑った。

星一郎がオニギリ十七個にチキン七枚にサンドイッチ五袋を平らげる間に、時間を掛けてツナサンド二つを食べ終えたベルナデットがぺこりと頭を下げた。

「あ……ありがとう、です」

「どういたしまして」

腹がひと心地ごこちついたのも合わせ、ベルナデットがようやく話しかけてくれたので、星一郎はほっと胸を撫で下おろす。餌え付づけしたみたいで若じやつ干かん後ろめたくもあるが、機を逃さずに気になっていたことを質問することにした。

「……昨晩の『夜宴』で、君たちは妙みように僕を敵視していたみたいだけど……僕は君たちと会ったことあったかな？」

「……いえ、昨日が初めて……です」

「なら、何で？　〈聖楔者〉同士で戦うのは仕方ないにしても、僕も身に覚えのないことで恨まれるのは良い気持ちじゃない」

「……マリオンが、言っていた、です……『宿儺星一郎はベルを狙ね

らってる幼女趣しゆ味みの変態野や郎ろうだから先手を取って倒すんだ』……って」
「……僕って、そんなに幼女趣味の変態野郎に見えるのかな？」
　引き攣つった笑えみを浮うかべて星一郎は自じ嘲ちようした。
　目の前のベルナデットは、確かに変態野郎には垂すい涎ぜんの獲え物ものに見える。
　彼女の年ねん齢れいは十四歳さいの筈はずだが、大人しい態度と小柄な体格のせいでずっと幼く見える。顔立ちなどはフランス人形みたいに整っているが、その一方で小柄な身体は背せ丈たけとは裏腹に育つべきところは育っている。幼い顔立ちと雰囲気とトランジスタグラマーな身体つきの対比は、不ふ埒らちな人間を大いに刺激するだろう。
　しかしだからといって、星一郎が不埒な人間の一例――昨晩の言葉を借りるなら『最低の変態野郎』と見て噛かみ付いてくるなど、とばっちりもいい所だ。
　それとも気付かないだけで、実は自分は『最低の変態野郎』な顔をしているのだろうか？
「あ、いえ！　いえ、その……あなたは、そんな人には見えない、です……最初は怖こわかったけど、傷も診みてくれましたし、ご飯も分けてくれて……とても優しい人だと思い、ます」
　びっくりした様子で必死に言いい繕い慰なぐさめてくれるベルナデット。可愛かわいらしく有り難がたいと思う反面、その素す直なおさがちょっと心配にもなる。
「ありがとう。だけど簡単に他人を信じるのもどうかと思うよ？　もしかしたら僕は君を油断させるために演技しているかもしれないだろう？」
「いえ。それはない、です」
　と、ベルナデットはこれまでのおどおどした喋しやべり方かたとは違ちがう、音量は小さくともはっきりとした口調で断定した。
「あなたはとてもよい人、です。あなたからは悪い〝ニオイ〟がしま

せん」
「……におい？」
　何かの暗あん喩ゆだろうか？
「あなたの〝色〟が付いた魔ま力りよくからは、いい〝ニオイ〟がします。だから分かります。あなたは悪い人ではない、です」
「それは……」
　霊れい視しで魔力を視みるように、彼女は魔力を嗅かいでいるというのだろうか？
　魔力を感じ取る霊れい感かんは肉体の感覚とは別種の、肉体に重なる魂こん魄ぱくの感覚だ。霊視、霊聴という霊感があるのだから、〝霊嗅〟の霊感があるのは不思議なことではない。実際に『霊れい臭しゆう』という単語もあるし、悪あく臭しゆうを誤ご魔ま化かせない悪あく魔まや悪あく霊りようの逸いつ話わもある。
　だがベルナデットの言葉を信じるなら、彼女は魔力に移った〝色〟――おそらくは残留思念までも〝嗅ぐ〟ことが出来るらしい。だとすれは、彼女はかなり希少な霊感の持ち主だ。人の『精神の匂い』まで嗅ぎ取ることが出来ると言うのだから。
「……僕は、君にとってどんな〝ニオイ〟がするんだい？」
「あなたからは、向日葵ひまわりの〝ニオイ〟が、します。太陽の、命の〝ニオイ〟、です」
　ふわり、とベルナデットが微笑んだ。どうやらいまのは彼女にとって最大級の賛辞の言葉らしい。
「仏――解げ脱だつした魂たましいは最上級の抹まつ香こうの香かおりを纏っているなんて言われるけど、僕はベルナデットの表現の方が好よきだな」
　見る者を和なごませる少女の柔らかな笑みに、星一郎も自然と笑みを返す。
　しかし何故なぜか、ベルナデットは恥ずかしそうに顔を伏ふせてしまった。
「？　どうしたの？」

「いえ……慣れてない、から……」
「慣れてない？」
「……わたしの〝鼻〟……あまり褒ほめられたことない、です……みんな、分かりにくいって……」
「そう？　花に例えるなんて可愛いじゃないか。花が好きなの？」
「……」
　ベルナデットは黙ってこくりと頷うなずいた。
「……花も、動物も好き、です。花と動物はウソの〝ニオイ〟がしない、から……」
　なるほど、と星一郎は胸中で頷く。彼女の言う〝ニオイ〟を嗅ぐことの出来ない星一郎にも、嘘うそや誤魔化しの〝ニオイ〟が良いものだとは思えなかった。
「……でも、あなたはいい〝ニオイ〟、です。あたたかい〝ニオイ〟……わたし、あなたの〝ニオイ〟が好き、です」
「ありがとう、ベルナデット」
「……ベル」
「ん？」
「ベル、です。友達は、ベル、って呼び、ます……」
　そう言って、ベルナデットは再び顔を俯けた。恥ずかしいのか顔が真っ赤だ。
　穏おだやかで大人しい少女である。「友達になりましょう」と言うのは、とても勇気の要いる行動なのだろう。
「――ありがとう、ベル。喜んでベルと呼ばせてもらうよ」
　申し出通りに呼ぶと、ベルナデット――ベルは顔を上げた。ぱちくりと星一郎の顔を見み詰つめると、やがてふわりと笑った。
　花の蕾つぼみが綻ほころぶように笑う少女である。
　出来たばかりの小さな友人に微笑み返し、星一郎も遅おくればせながら自己紹しよう介かいする。
「知ってるかもしれないけど、僕は宿儺星一郎。星一郎って呼び捨てにしてくれていいよ」

「はい。セーイッチ……？　セイッ、イチロゥー……？」
　ベルは星一郎の名を呼ぶのに苦戦した。しっかりした日本語を話すから大丈夫かと思ったが、ちょっと難易度が高かったようだ。
「無理をせず、好きな呼び方でいいよ？」
「は、はい……え、と……『セイ兄様』、でもいいで、すか？」
　柄がらにもなく、星一郎は兄という単語に胸がときめいてしまった。
　弟属性が染み着き、幼おさな馴な染じみの妹分は悪戯好きの妖精そのものでいらぬ苦労ばかり。そんな環かん境きようにあった星一郎からすると、おとなしい女の子から『兄』と呼ばれるのに新しん鮮せんな感動があった。
　嬉うれしくなり、二つ返事で了りよう承しようする。
「うん、もちろん」
「はいっ。よろしくお願いします、セイ兄様」
　ぺこりと頭を下げたベルナデットの緩く波打つ薄うす茶ちやの髪が、ご機き嫌げんな犬いぬ猫ねこの耳みたいに揺れる。純じゆん粋すいな保護欲から、星一郎は彼女の頭を撫でた。撫でられた少女は一いつ瞬しゆんびっくりしたが、すぐに気持ちよさそうに目を細める。そのまま顎あごも撫でたい気分になるが、辛かろうじて撫でるのは頭だけに押おし留とどめた。
　我慢強い自分でもここまで猫可愛がりしたくなるのだから、実に恐ろしい少女である。こんなに可愛らしい少女が変態野郎に狙われてると知ったら、星一郎だって腹を立てて相手をぼろくそに罵ののしるに違いなかった。
「……ベルがいい子なのはよく分かった。昨晩のマリオンの態度も納得できるけど……そもそも何で僕がベルを狙ってるなんて思ったんだい？」
「それは……」
　友達が出来て幸せそうな顔をしていたベルが、不安に顔を曇くもらせた。

「……手紙……」
「手紙？」
「手紙が、届いたんです……『宿儺星一郎は幼女趣味の変態で、ベルナデット・リエーヴルを狙っている』……って」
「……誰だれからの手紙？」
「差出人はありませんでした。いつの間にか、わたしたちの隠れ家がに届いていました」
「そんな手紙の文句を信じたの？」
「マリオンは、わたしのことになると冷静じゃなくなるん、です……」
「手紙……手紙か……」
　星一郎に『変態野郎』などという不ふ名めい誉よを押し付けたのはその手紙の差出人だったらしい。だが一番の問題は、何でそんな手紙でベルたちを煽あおったかだ。
　単純に考えれば、自分たちとベルたちを噛み合あわせるつもりだったのだろうが……
　思し索さくに耽ふけりかけた星一郎だが、首筋にゾクリと冷ややかな感覚がして思考を切り替かえた。神社の境内に足を踏み入れた時とは違う、明確な危機感だ。
　急に立ち上がった星一郎に怪け訝げんな顔をしたベルだが、すぐに彼女の顔が急速に青褪める。
「セイ兄様！」
　ベルが小さな身体を使って星一郎に飛び付いた。
　一瞬後、彼らの座っていたベンチが爆ばく発はつしたように吹ふき飛とぶ。
「っ!?」
　振ふり返った星一郎に、地面に突き刺ささった『光の矢』が目に入る。
「きゃっ……」
　抱き着いたままのベルを抱え上げ、星一郎は方向も定めず跳ちよう

躍やくした。
　新たな光の矢――魔力の矢が星一郎の立っていた場所に突き刺さる。
「っ……セイ兄様……!?」
　抱き上げたベルがぎゅっと首に抱き着いてくる。少しでも彼女を安心させるよう抱き上げる腕うでに力を込め、星一郎は公園から駆け出した。
「昨晩の襲しゆう撃げき犯……こんな日の高い時間に……！」
　カルディア委員会が定めた『七聖条約』に真っ向から違い反はんする行こう為いだ。襲撃犯は『夜宴』に横よこ槍やりを入れるだけでは物足りなかったらしい。
　矢の飛んできた大凡おおよその方向に見当を付け、星一郎は公園に併へい設せつされている神社の社しや殿でんの陰かげに身を潜ひそめた。
　以前戦った波々木節奈と違い、正確な狙そ撃げきをしてきた以上、襲撃犯の狙いは暗殺だろう。
　姿を晒さらさなければ、暗殺目的の狙撃は防げるはず――星一郎はそう考えたが、
「兄様！　上！」
　ベルの必死な声を聞いた瞬間、星一郎は思考をカットして横に飛んだ。
　直後、隠れていた物もの陰かげに矢が突き刺さった。
「曲射!?　いや、それでも……！」
　突き刺さった矢はほとんど垂直に地面へ突き刺さっていた。曲射したらしいが、狙いが正確過ぎる。明らかに隠れたこちらの位置を掴つかんでいる。
　――どうする？
　いっそ人ひと混ごみの中に紛まぎれるか？
　だが、襲撃犯が周囲の被ひ害がいを躊ちゆう躇ちよしなくなったら酷ひどい被害が出るだろう。

苦く慮りよした星一郎は、ベルを抱えて走り出した。
「ッ！」
人間が走っているとは思えない速度にベルが悲鳴をかみ殺す。
星一郎はなるべく人目につかないよう走り続ける。時折遭そう遇ぐうする一いつ般ぱん人じんがギョッとするが、あまりに速すぎて星一郎の顔など確かく認にんできないだろう。
一般人に迷めい惑わくをかけぬよう街の死角を疾しつ走そうするおかげで断続的に狙撃が続く。何もない天から降ふってくる曲射という技術の枠わくを超こえた精密狙撃を、星一郎は屋根を蹴り壁かべを蹴り、街中にあって道無き道を行って強引に引き離す。
かなり無む茶ちやな疾走の結果、星一郎は短時間で目的の場所へと辿り着くことが出来た。
「……ここ、は……」
ベルが、人気のない廃はい墟きよの群れを見てぽつりと呟つぶやく。
四半世紀前の『魔力災害』の置おき土産みやげ。魔ま力りよく溜だまりとなって人を寄せ付けなくなった新京都市街の虫むし喰くい穴。
地元の人々が『洛らく外がい』と呼ぶゴーストタウンだ。
暴走した魔力の残ざん滓しは『魔ま疽そ』と呼ばれ、抵てい抗こう力りよくのない人間には毒となる。旧京都市街を襲おそった魔力災害の名残なごりは、自然に霧む散さんするまで捨て置かれていた。
だが、魔力を無条件で支配する神性を備えた〈聖楔者〉には関係ない。
およそ一km四方の区画は、時間の流れから取り残されたように無残な躯むくろを晒している。
元は先ほどの公園みたいな場所だったであろう広場で止まり、星一郎はベルを地面に下ろした。
「う……セイ兄様……？」
ベルを下ろした星一郎は、風切り音を置き去りにする速度で手を振った。

――ギィイイイイイイ――――ンンンッッ!!

虹にじ色いろの火花と異音が鳴なり響ひびく。

振り抜ぬいた星一郎の手には、ここまで彼らを狙ってきた光の矢が握られていた。

「……」

折り砕くだくと、矢は魔力光を発して霧散する。

空の彼方かなたを睨む星一郎はすぐにまた腕を振る。今度は掴み取った先から力任せに砕き散らす。連続して降ってくる狙撃を、星一郎は片かたっ端ぱしから掴み取っては砕いていく。

「……す、ごい……」

ベルの感かん嘆たんの声を背に、星一郎は無心に腕を振るい続ける。星一郎の周囲には砕かれた矢の欠片かけらが花はな吹雪ふぶきの如ごとく舞まい、作業的な撃げき墜つい行こう為いに幻げん想そう的てきな装いを添そえた。

果たして幾百の魔力の矢が射られては砕かれただろう。

唐とう突とつに狙撃が止やむ。

迎げい撃げきできる構えを維い持じしながら様子を見る星一郎だが、狙撃が再開する気配はない。

一方で、ピリピリとした違和感は消えていない。こちらを狙う何者かは、まだ攻こう撃げきを諦あきらめたワケではなさそうだ。

さらに様子を見ていると、何かを嗅ぎ取とったのか。星一郎の背後のベルがびくりと身体を震わせた。

「っ――出て、〈リオン〉ッ！」

いつの間にかベルの握っていた〈第二書版〉が、彼女の呼よび掛けに応じて獅子型の随獣へ再構成される。

ほぼ一瞬で顕けん現げんした獅子型オートマタは星一郎の前に回り込むと、空へ向かって声なき『咆ほう哮こう』を放った。

声なき『咆哮』は、空から降ってきた光の矢の絨じゆう毯たん爆ばく撃げきと打ぶつかると、星一郎とベルの周囲だけをポッカリと安あん全ぜん圏けんとし、文字通りの矢の雨から二人を救った。

（……そういえば、昨日も襲撃に最初に気付いていたのは彼女だったか……）

ちらりと背後のベルを見やり、星一郎は昨晩の『夜宴』を反はん芻すうする。

（〝ニオイ〟……見た目は弱々しいけど、とても有用で、すごく厄やつ介かいな能力の持ち主だ）

〈聖楔者〉としての畏光メランムや権能の大半は随獣に付加されているが、ベルの特異な霊感は単純な戦せん闘とう力りよく以上の脅きょう威いかもしれない。

どこまで正確に人の思念を嗅ぎ取れるのかは不明だが、こうして襲撃に対応してみせた以上、不意打ちや待まち伏ぶせの類たぐいは彼女には通じまい。卑ひ劣れつ上等の襲しゆう撃げき者しやにしてみれば、ベルナデット・リエーヴルの霊れい的てきな嗅きゆう覚かくは忌いま々いましいものであるに違いなかった。

と、矢の雨を咆哮で打ち消した獅子がぬぅっと視線を遮さえぎった。魔ま術じゆつの賜たま物ものとはいえ人工物に過ぎないはずの獅子型オートマタは、魔ま導どう晶しよう体たいの瞳でじとりと星一郎を見返した。

――ウチのお姫ひめ様さまをジロジロ見るな。

そんな声が聞こえてきそうな目付きである。

「〈リオン〉、セイ兄様をそんな目で見ないで」

仔こを守る母ライオンを思わせる〈リオン〉の頬を、ベルの小さな手がぺしりと叩く。

獅子はきゅうんと声を漏もらして蛇鞭剣スネークブレイドの尾おをぺたんと垂らした。

「セイ兄様、ごめんなさい。この子は過保護なん、です」

ベルが申し訳無さそうに頭を下げる。

弱気で大人しいが礼れい儀ぎ正ただしいベルナデットを眺ながめていると、過保護になるのもしょうがないことに思えた。事実、星一郎も彼女を襲ってきた襲撃犯に強い怒りを覚えている。

「大だい丈じよう夫ぶ、気にしてないよ」

ベルに笑い返し、獅子に共犯めいた視線を向けると、〈リオン〉と名付けられた随獣は返事代わりにかひゅひゅんと尾を振った。

獅子とともにベルを守って周囲を警けい戒かいしていると、人の気配の絶えたはずの洛外に、こつこつと足音が響いた。わざと音を立てているのだろう。足音の響いてくる方向からは、強い神性の気配が漂ただよっている。

やがて、崩くずれた家屋の陰から、一人の女が姿を現した。

いや、少女と言った方が良いだろうか。

星一郎とそう変わらない年齢の、東洋系の整った顔立ちの少女だった。にこにこと笑った顔は陽性の空気を放っており、街角で見かける悩みなき学生そのものだった。

だが、身体の線をはっきりさせる衣服から見える彼女の手足はスラリと伸のびつつも緊張をはらみ、青竹のような靭しなやかさを感じさせていた。身体の小さな動きにもキレがあり、表情が見せる陽気さとは逆の剣けん呑のんさが見みえ隠かくれしていた。

そして何よりも、彼女が肩かたに担かつぐものが問題だった。

遠目の輪りん郭かくは『弓』に見えるが、アーチェリーに使う複合弓コンパウンドボウをさらに仰ぎよう々ぎようしくした代しろ物もので、弓の形をしただけのほとんど別物だった。

持ち手ライザーは射手の腕に絡からみつくようなアームガードで半ば固定され、スタビライザーや照準器に似たパーツが一体化されている。見ようによっては上じよう腕わんから先が武器へと変化したかのようだ。辛うじて『弓』だと思わせる上下に伸びたしなりリムも大小の金きん属ぞく片へんが組み合わさって構成されており、下手をすれば少女の腕よりも太くゴツくなっている。

そんな巨きよ大だいで超ちよう重じゆう量りようの物体を軽々担ぐのが、ただの少女であるワケがない。

星一郎がいつでも飛び出せるように警戒を高めると、

「あー、やめやめ！　あんまり身構えないでよ」

　構える星一郎とは逆に、少女はぱたぱたと手を振って気軽に第一声を発した。
「もうホントに参った！　だいたい何なのよ、矢を掴み取るとか！　ないわー、それはないわー。狙っても直前で避よけるし、そっちのお嬢じようちゃん以上に異常だよ！　あ、いまのは洒落しやれね？　座ざ布ぶ団とんくれてもいいよ？」
「……むしろ没ぼつ収しゆうしたい気分なんだけど」
「マジ!?　あちゃー、あたしもマダマダだなぁ」
　少女は弓を持っていない方の手でピシャリと額を叩いた。
　十中八九この少女が狙撃してきた襲撃犯なのだろうが、底そこ抜ぬけな陽気さと軽けい薄はくさでどうにも調子を崩される。

　それでも警戒を解かないでいると、少女は星一郎越ごしにベルへと視線を移した。
「あ、そっちのお嬢ちゃんはもう行ってイイよ？　あたしとお兄さんはこれからオトナなお話をするからＲ十五でお願いね。まぁ、ほとんどのお子様はそんなもの守っちゃいないけど、かく言うあたしも十八禁ゲームのデビューは十四歳の夏からだったけど、お嬢ちゃんはこんな汚よごれたオンナになっちゃイケないわよ？」
「……セイ兄様……」
　ベルが不安げな声を掛けてくる。
　星一郎は辛うじて半身になって彼女に横顔を見せ、心配ないよと頷いた。
「――〈リオン〉に乗って帰るんだ。安全な場所に戻もどるまでは守ってもらうんだよ？」
「……はい」
　素直に頷くと、ベルは〈リオン〉の背によじ登る。
「……ご無事、で」
　ベルが別れの言葉を告げると、〈リオン〉は急速に洛外の廃墟の向こうへと消えていった。
　彼女と随獣の気配が十分に離れたのを確認すると、星一郎は弓を担ぐ少女をぐっと睨にらむ。
「……何が目的だ？」
「その前に自己紹介しない？　あたしは春しゆん雷らい。花か春雷。花も恥じらう十八歳。日本語は七つの玉を集める野菜系戦せん闘とう民族のアニメで覚えたのよ？　けっこうなもんでしょ？」
「……宿儺星一郎」
「それだけ？　ノリが悪いなぁ」
「そっちはノリが軽すぎる」
「あー、うん。よく言われる。あたしの数少ない欠点の一つなのよねぇ」
　少女――春雷はけらけらと笑った。

話せば話すほど掴みどころの無い少女だ。『夜宴』の最中に横槍を入れ、こんな日中にも関わらず狙撃を行った襲撃犯とは思えない。

もっとも演技かも知れない。ベルが残っていれば〝ニオイ〟で分かっただろうが、生あい憎にくと星一郎は彼女ほど鼻が利きかない。もしそれを見み越こしてベルをこの場から退散させるように促うながしたとしたら、外見の雰囲気とは裏腹な抜け目め無さを備えていることになる。

「……それで、何が目的だ？」

「うーん、せっかちさんだなぁ。そんなじゃ女の子にモテないぞぅ？」

「はぐらかしてばかりの女は男に敬遠されると思うけど？」

「……あんた、けっこう口が達者だね。見た目はエロゲ主人公な流され系っぽいのに」

「生憎、口の達者な姉貴分や妹分には事欠かなかったからね。門前の小僧もなんとやらだ」

「あー、それは分かるわー。あたしも上に兄貴が五人もいてね。おかげで頼たのんでもいないのに耳みみ年どし増まになっちゃった。穢けがれ無き妹がいるのにエロ話ばかりでさぁ」

「頼んではいなくても望んでいたように見えるけど？」

「あはははっ！　ホントに口が達者なんだね!?　いやー、楽しい。こんなに楽しいお喋りは久しぶりだよ、星一郎！」

いつの間にやら呼び捨てにされるが、意外に違和感がない。

ベルのような女の子らしい女の子はほとんど未知の存在であった星一郎だが、この春雷のような男兄弟ばかりの中で育った女友達といまみたいなバカ話をしてよく盛り上がったものだ。もし出会いがもうすこし穏おん当とうだったら、仲の良い友人になっていたかもしれない。

「くくっ……楽しいけど、しょうがない。悲しいけど、これ戦争なのよね、ってヤツね。じゃあ、ズバリ言うわ。あのベルナデットってお嬢ちゃんから手を引いてくれる？」

「手を引くも何も……僕ぼくは彼女とは昨晩会ったばかりだ」
「そうなんだけど、どうにも星一郎とあのお嬢ちゃんには縁えんが出来ちゃったみたいだからねぇ。昨晩も結局はアンタたちだからこそ狙撃に失敗しちゃったし、いまもこの有様でしょ？　この手の縁は尾を引くから、ちゃんと楔くさびを打ち込んでおくべきかなと思ってね」
「……縁、ね」
　敵ながら的を得た表現だ。
　星一郎は平和主義者でもフェミニストでもないが、自分を「兄様」と呼んでくれる小さな友人を見捨てるほど薄はく情じようではない。
「あちゃあ……藪やぶ蛇へびだったかなぁ……」
　鋭するどさを増した視線を受け、春雷はぼりぼりと頭を掻かいた。
「確かにあのお嬢ちゃんは可愛いけど、昨日会ったばかりで話したのも一時間足らずでしょ？　そこまでムキになる？　あ、それともホントに幼女趣味の最低クソ野郎だった？」
「もう彼かの女じよとは愛あい称しようで呼び合う仲だし、それに……どうやら僕に嫌けん疑ぎをかけた犯人も分かった。それだけでも、戦うのに十分だと思うけど？」
「あ、かなり怒おこってる？　あたしはやめようって言ったのよ？　幼女趣味の変態じゃなくて、せめて小さい子に踏まれるのが大好きなドM野郎にしといた方がイイって……」
「どっちも変態だっ！」
　我が慢まん強づよい星一郎もさすがにこれ以上覚えのない変態疑ぎ惑わくをかけられるのは御ご免めんだった。
　諸悪の元げん凶きようらしき春雷へ、星一郎は身体中に刻印を輝かがやかせて跳躍する。
「やれやれだわ――」
　肩を竦すくめた春雷の右足の太ふと腿ももに八はち芒ぼう星せいの楔が浮き上あがる。〈聖楔者〉であることを示す神格との経路、『神デインギル』の刻印だ。
「ダメね、ダメダメよ」

同じ〈聖楔者〉と比べても際きわ立だった星一郎の突とつ進しんを、春雷はゆらりと風に吹かれたような自然さで躱かわしてしまう。
「敬意を払はらえ！」
――ギィィィイイイイイイイ――――ィィイイイッッ！
「ぐっ――」
異音を発して叩たたき込まれた衝しよう撃げきに星一郎が地面を転がる。すぐに立ち上がり振り返かえると、春雷は引ひき締しまった足を振り上げたまま、ニヤリと演技めいた笑みを浮かべていた。
「女の子の言葉を途と中ちゆうで遮るなんて、エロゲをインストールしたその日にセーブデータを拾って画像コンプするような無ぶ粋すいさね。ちゃんと製作者の心意気に応こたえないと！」
「どれだけエロゲが好きなんだ……」
軽口を返す星一郎だが、予想外の動きに内心は冷ひや汗あせだ。
弓という遠えん距きよ離り武器の使い手ならば接近戦に持ち込むのが最上手段と考えたが、容易たやすく躱されたのみならず、するりと反はん撃げきまで食くらってしまった。蹴けりの威い力りよくこそ畏光が相そう殺さいしあってほとんど無いが、防ぼう御ぎよも受けも出来ずに打ち込まれたのは打だ撃げき以上の衝撃だ。
星一郎の向上した身体能力と反応速度を上回ったというより、すり抜けたように攻撃を当ててくる手しゆ腕わん。〈聖楔者〉としての能力というより、純粋な技術によるものだろう。
（脳天気な風に見えて……とんだ曲くせ者ものだ）
魅み惑わく的てきな脚きやく線せん美びを見せる足を引っ込め、春雷は肩に担いだ弓を構えた。矢を番つがえる仕草をすると、その手に矢が顕あらわれ、張られていなかった弦げんがリムの間に現れる。
「――駆けろ、〈天狼〉」
放たれる。
だが直線の攻撃は今の星一郎には通じない。
星一郎は余よ裕ゆうを持って横っ飛びに避よけ――
「っ!?」

矢が曲がる。

星一郎の心臓へと鏃やじりを向けて光の矢が迫せまる。

間かんーいつ髪ぱつ、星一郎は拳こぶしで矢を叩き落おとした。

「あたしを選んだのは古今東西の『神弓』の起源ハジマリである《屠と龍りゆうの神弓バン》――」

ハッとして辺りを見回す。

ほんの一瞬の隙すきに、春雷の姿は影かげも形も消えていた。

「――『旧ふるき神々』の首しゆ魁かい、《太母龍ティアマト》の心臓を射い抜ぬいた《屠龍の神弓》……それに連なる天狼星シリウスは、使い手に百発百中の加護を齎もたらす――」

声を頼たよりに気配を探さぐるが、方向も距きよ離りも判然としない。近くな気もするし遠くな気もし、右かと思えば左から聞こえ、かと思えば前後から同時に響いてくる。

「――もっとも、叩き落とされたらどうしようもないけどね。射る前に察するあのお嬢ちゃんも厄介だけど、矢を掴んだり叩き落としたりする星一郎には呆あきれるよ――」

気軽というよりは脳天気な声が、闘とう牛ぎゆう士しのマントのようにひらひらと揺ゆれる。

「――そんな星一郎に敬意を表して、今日はここで退いておくよ。お喋り楽しかったよ、星一郎。またその内に――」

「……」

声が途と切ぎれても、星一郎は緊張を途切れさすことが出来ない。本当に立ち去ったのか、それともまだ近くに潜んでいるのか、判断する材料がなかった。

十分経たち、二十分経ち、三十分経って、ようやく星一郎は警戒を解いた。

「……ふぅ。外見とは違って本当に――」

ザシャ！

安あん堵どの溜ため息いきを吐はいた途と端たん、足元に光の矢が突つき刺さった。

必中の加護があるのに敢あえて外したのは別れの挨あい拶さつ代わりか、それとも単なる悪戯いたずらか。

「……本当に、曲者だ……」

次の瞬しゆん間かんに何をしてくるか分からない掴み所どころの無さに、星一郎は心の底から慄然ゾツとする。

徐じよ々じよに形を霞かすませてゆく矢を見ながら、星一郎は掌てのひらを濡ぬらす冷や汗を握にぎり締めた。

5

「……セイ兄様……」

随ずい獣じゆう〈リオン〉の背の上で、ベルナデットは不安げに背後を振り返った。

人見知りなベルナデットには珍めずらしく、初対面で愛称で呼び合うようになる人間は珍しい。いや、ほぼ初めてと言っていい。それほどに、あの宿儺星一郎という男は彼女にとって衝しよう撃げき的てきな人物だった。

ベルナデットは、星一郎の〝ニオイ〟を『向日葵ひまわりのニオイ』と評した。それは間ま違ちがってもいないが、正確でもない。

ベルナデットの嗅ぐ〝ニオイ〟は、単一で構成されるものではない。花の香りが土と風、水と光の変化によって千せん差さ万ばん別べつであるように、〝心のニオイ〟も咲さき誇ほこる花の下に、それを育て上げた土ど壌じようの〝ニオイ〟が漂ってくる。

宿儺星一郎の心が放つ向日葵の芳ほう香こうは、その背後に屍しかばねの山を想起させた。

地じ獄ごくと言ってもいい。

星一郎の心には夥おびただしい〝死〟がこびり付いている。

悲しみと憎にくしみを抱かかえてのた打ち回り、自分で自分の首にナイフを突き込まんばかりの自己否定を繰くり返す——そんな地獄を抱え込まなければ、あんな〝死のニオイ〟は熟成されない。

どれほどの絶望が、彼かれにあれほどの地獄を抱え込ませたのか？

ベルナデットに判わかるのは〝ニオイ〟だけで、原因までは分かりようがない。

だが、だからこそ、彼がそんな地獄を心に抱えていながら、向日葵の如き陽光の〝ニオイ〟を発しているのが、何よりの驚おどろきだった。

ただ地獄を抱えて陰にこもる人間には、あんな〝ニオイ〟は出だせない。深い絶望を知りながら、それでも光を——正しい力を求めて顔を上げる。

それがどれだけ稀け有うなことなのかを、ベルナデットはよく知っている。

彼の強い〝ニオイ〟を間近に嗅ぎ、ベルナデットは一瞬で惹ひき付つけられた。

ベルナデットは遥はるか後方に遠のいた洛外を振り返り、ぎゅっと胸を押さえた。

『——ぐるぅ』

しゅたりとビルの屋上の看板の陰に降り立つと、〈リオン〉がすりすりとベルナデットに鼻先を擦すり付けてきた。

自分を元気付けようとしてくれる随獣——自分を選んだ神しん獣じゆうの現身うつしみといえる存在に、ベルナデットはうっすらと微笑ほほえんでその頭を撫なでてやる。

「ありがとう、〈リオン〉……そうね、セイ兄様は大丈夫、よね？」

敵を斬きり付ける恐おそるべき尾をフリフリと動かし、獅し子しはベルナデットの言葉を肯こう定ていした。

「……あなたはいつも私の味方ね、〈リオン〉。出会った時から、ずっと……」

この心優しき神獣と出会った日のことをベルナデットは思い返した。

あれは、小さい頃ころからお世話になっていた児童養護施設で本を読んでいた日のことだ。施設長先生の部屋に呼ばれ、そこにいた『国

の偉えらい人』に数名の仲間と一いつ緒しよに連れて行かれた。飾かざり気けがなくておっかない〝ニオイ〟の染しみ付いた建物の一番奥おくに、二つの石版が安置されており、その片方が自分を呼んだ。

——我は、護まもりしモノ也——

その石版に手を触ふれると、優やさしい光とともに雄おお々おしい〝ニオイ〟が強く発せられた。

——汝なんじは、我わが護るに値せし者也……我が主よ、我が名と姿を定めよ——

雄々しく力強いその姿は、自然と一体の獣けものの名と姿をベルナデットに思い起こさせ、そうして彼女は〈獅し子し座ざ〉の〈聖楔者〉となった。

「……そういえば、セイ兄様はあなたと似ているわ、〈リオン〉」

ベルナデットが告げると、〈リオン〉は不ふ機き嫌げんそうにぷいっと顔を背そむけた。

同じにするなと不ふ貞て腐くされる獅子に、ベルナデットはくすりと微び笑しようした。

「機嫌を直して、〈リオン〉……早く戻りましょう」

ベルナデットが首筋を撫でると、〈リオン〉は返事代わりに尾を振って跳躍した。

人目に付かぬよう移動した〈リオン〉は、やがてごく普ふ通つうのマンションの屋上に降り立った。ベルナデットは〈リオン〉を〈第二書版〉へ戻さず、そのまま引き連れて屋上の出入り口を潜くぐる。

このマンションは全すべてが買い上げられ、ベルナデットとその相棒であるマリオンのセーフハウスになっていた。彼女を児童養護施設から引き取った『国の偉い人』——フランス政府の魔ま導どう工学機関が『摩天の夜宴』に備えて用意したものだった。

〈リオン〉をそのままにしても、見み咎とがめる者は誰もいなかった。

与あたえられた部屋に戻ると、すぐにばたばたと足音がし、マリオンが慌あわててベルナデットに駆かけ寄よってきた。

「ベル!?　無事か!?　大丈夫か!?」
「うん……大丈夫よ、マリオン」
「勝手に居なくなるなよ！　お前はあの変態野や郎ろうに狙ねらわれているんだぞ!?　昼間だからって油断できないんだからな!?」
「……」
　その『変態野郎』と会っていたなどとは言えず、ベルナデットは黙だまって頷いた。
「頼たのむぜ、ベル……お前はオレがいないと何も出来ないんだからな！」
「……うん。ごめんね、マリオン」
「ああ、任せろ！　あの変態野郎は、オレが絶対にブチ殺してやるからな！」
　マリオンは整った美しい顔に似合わぬ凶きよう暴ぼうな笑えみを浮うかべた。ベルナデットの肩を掴む手にも自然と力が入り、彼女は顔を顰しかめないよう我が慢まんした。
「……うん。ありがとう、マリオン……」
　ベルナデットは、ただ頷いた。
　彼女とマリオンは、同じ児童養護施設に居たのを国の魔導工学機関に『霊感の素質あり』と引き取られた仲間だった。
　四半世紀前の魔ま力りよく災害遺構の魔術復権に伴ともない、多くの国家で強い霊感を持つ者を探す試みが為なされた。見み出いだされた者の多くが国家に養育され、国益のためにその才を使うことを嘱しよく望ぼうされた。古典魔ま術じゆつ師したちは先祖伝来の技術を伝えてきた為ためにプライドが高く、癖くせの強い者たちばかりであったので、上手うまく使うのにはそれなりの苦労が付き纏まとっていたからだ。
　ベルナデットとマリオンも市し井せいから見出された――口さがない古典魔術師たちが『促そく成せい栽さい培ばい』と呼ぶ即そく席せきの魔術師だった。
　マリオンは児童養護施設にいた時から、ベルナデットを護ってくれ

た一番の友人だった。
　マリオンは少しばかり攻こう撃げき的てきで、それが原因でよく喧けん嘩かになっていた。ベルナデットはそれが意地を張っているが故ゆえのことだと嗅かぎ取っていたので、マリオンの刺とげ々とげしい言葉や見た目の性格に惑まどわされることなく仲良くなれた。
　人見知りして本ばかり読んでいたベルナデットが意地悪な男の子たちにからかわれると、マリオンは「オレの親友に何してやがる！」と暴れて追おい払ったものだ。
　その関係は、児童養護施設から研究機関へ移っても変わらず、マリオンは常にベルナデットを護るように傍そばにいてくれた。
（けれど……今のマリオンは……怖こわい……）
　マリオンの心は、茨いばらの〝ニオイ〟だった。刺々しいが愛らしい花を付ける野草の匂においだ。
　けれど今のマリオンは――新京都にやってきてからのマリオンは、乾燥しきった薪たきぎみたいに素っ気ない〝ニオイ〟しかしなくて、心がどこかに行ってしまったかのようだった。
（……助けて……誰か……）
　瞳ひとみをギラつかせる親友に頷うなずきながら、ベルナデットは心の中で虚むなしい助けを求め続けた。

　一方、ベルナデットと星一郎を狙撃した花春蕾は、洛外を出るとすぐにタクシーを捕まえ、タクシー券を使って悠々自適に帰途に就いた。
「ふいー……さて、なんて言い訳したものかな……」
　座席にだらしなく座すわり、春蕾はあまり考えていない顔で考えているようなセリフを零こぼした。タクシーが渋滞しがちな大通りを抜けて高級ホテルに着いても、彼女はあまり考えた様子もなくぶらぶらとした足取りでタクシーを降りてホテルに入った。
「おかえりなさいませ、花様」

「鍵かぎね。あと、部屋に救急箱を持ってきてくれる？」
「救急箱でございますか？　怪我けがをなされたのなら救急室へご案内いたしますが？」
「いいのいいの。まだ怪我していないからね」
「はあ……」
　疑問符を浮かべたフロント係から鍵を受け取り、春蕾はエレベータに乗り込んで最上階のスイートルームに入った。
　広々としたソファにダイブしようと身構えた春蕾だが、その動きがピタリと止まる。飛び上がりかけの少々間抜けな姿勢のまま顔だけ動かした彼女は、壁の側の椅い子すに座った従業員らしき装いの男を恨めしげに睨んだ。
「……高級ホテルのソファの柔やわらかさを堪能したいから、話は後にしてくれない？」
「……言い訳の方が先ではないのか？」
　鬱々とした声で男が言った。従業員の格好だが、中身はホテルとは無関係らしい。
　ソファにダイブするのを諦めた春蕾は、男に向き直って肩を竦めた。
「失点を取り返そうと思って失点を重ねたバカな女の言い訳を聞きたいって？　もしかして言葉攻めが趣しゆ味みなの？」
「……襲撃するなら、もっと時間と場所を選んでも良かっただろう」
「そりゃあ、ね。あたしもベルナデットお嬢ちゃんを監視してた時にはそう思ったけど、そこにあたしたちが変態野郎の烙印を押した星一郎がやって来たからさ。あそこでお嬢ちゃんを殺やれば、責任は星一郎に押し付けられると思ったら、こう、自然と」
　バーン！　と、春蕾は矢を射るジェスチャーをした。
　男は不気味な無表情をわずかに動かし、不機嫌そうに目を細めて春蕾を睨んだ。
「……なるほど。タイミングとしては極ごく上じようのものだな。成功していれば、だが」

「まぁ、ね」
　春蕾は苦く笑しようした。
「あたしの『神弓』は、暗殺には打って付けの筈はずなんだけど……あそこまで正確に殺気を読むんじゃオハナシにならない。確かにあのお嬢ちゃんベルナデットは『本国』の目的の天敵だね」
「……それが分かっていながら、貴様は昨晩と今回と、二回もしくじったワケだ」
　男は静かに頷くと、二本指を立てた手を目の前に持ち上げた。
「……〝禁〟！」
「ぐっ……!?」
　男が呪を唱えると春蕾の首に禍まが々まがしい呪印が浮かび、彼女は膝ひざを突いて苦しげに呻うめいた。
「ぐっ……く、ううっ……えぐっ……！」
「……畏光で無効化するなよ？　その『禁きん錮こ』を解いたら、その時点で反逆と見做す」
「ぐ、ぐぐ……」
「……〝解〟」
　春蕾が首の禁錮を解除されたのは、たっぷりと五分は経ってからだった。
　精根尽き果てたか、春蕾はどっと床ゆかに倒たおれた。
　男は首を押おさえて空気を貪むさぼる春蕾に近付くと、その腹に革靴の先をめり込ませた。
「げ、ぐっ……」
「……いい気になるな。小日本人シヤオリーベンレンに擦り寄る弱小民族め。貴様らは我々『本国』に従っていればいいのだ」
「ぐ、う……」
「……おかげで大幅な作戦の見直しだ。あの小こ娘むすめは『本国』に命令された隠密任務の為には必ず葬ほうむらねばならない。だが、都合のいい手足も欲しかったからな……昨晩の小僧と小娘たちを使う事にしよう。幸い、交渉材料は豊富のようだからな」

「ぎゃう……う……うがっ……」
　男は話の切れ目切れ目に、句読点を打つように春蕾の腹に蹴りを放った。
　春蕾が弱々しく腹を抱えて震ふるえていると、男は彼女の纏めた髪かみを掴んで顔を上げさせた。
「あうぅ……」
「……いいか？　必ずあの小僧どもと小娘どもを相争わせろ。『天使』と『魔ま王おう』の両グループは拮きつ抗こうしている。《聖王》の神格を得た小娘どもがどちらかに肩入れすればバランスが崩れて共倒れになりにくい。獣使いの小娘どもと争っている隙に後ろから撃て。いいな？」
「ぐっ……ああ……はじめからそのつもりだよ……」
「しくじるなよ？　貴様の一族郎党は我々『本国』の監視下にある。逆らえば、貴様に家族の肉を味見させてやる」
「……文王の真似まね事は遠えん慮りよしたいねぇ……」
「……なら、上手うまくやることだ」
　春蕾を放ほうり出し、男は部屋から去っていった。
　男が部屋から出て行ってしばらくして、春蕾はごろりと仰向けに転がった。
「はぁ……ヤだねぇ、漢民族は……脅し文句ぐらいもう少しスマートにならないかな……」
　春蕾は辟へき易えきしたようにぼやくと、直後に届けられた救急箱で軽く治ち療りようし、今度こそ高級ホテルのソファの柔らかさを堪能した。

三章　　愉快　ナ　確信犯

1

星せいーいち郎ろうは正座させられていた。

正面の椅子には、ディーナと刀と羽う華かが腕うでを組んで腰こしを下ろしている。

顔を合わせれば罵ば詈り雑ぞう言ごんをぶつけ合うディーナと刀羽華だが、星一郎を見やる顔は、まるで双子の姉妹みたいに似通った表情を浮かべていた。

星一郎が自宅に戻ってきてから、すでに二時間以上正座させ続けられている。

洛らく外がいで安心した直後に矢を射られた星一郎は、何時いつ何処どこから射られるか分からない矢を警戒を続けてじっとしていた。誰だれかに見られたら一人で構えたまま動かない自分はさぞかし滑稽に映るだろうと頭の片隅で自じ嘲ちようしたが、春しゆん蕾らいが撤てつ退たいしたのを確認する術すべがないのでは安易に構えを解く事はできなかった。

真夏の日差しにジリジリと炙あぶられ、太陽がまんじりともしない馬ば鹿か一匹を嬲なぶるのも飽あきて山の向こうに沈み、電気の通っていない洛外が真っ暗くら闇やみに覆おおわれて、ようやく星一郎は帰途に就いた。黙って出てきたから怒られるだろうとは覚かく悟ごしていたが、自分を迎え入れた少女たちは何も言わずにリビングの床を指さし、そこからはずっと無言であった。

――これは一番マズいパターンだな……

経験則に従い、星一郎は覚悟をし直した。

怒いかり方は人それぞれだが、怒声を上げて雷かみなりを落とすのは一番マシな部類だ。怒ど鳴なるのは意外に疲れるし、何より人間というのは怒りを吐き出すとすっきりするものだ。嵐あらしが通り過ぎ

るのを待って素す直なおに謝れば上手く収まる公算が高い。
　では何が一番厄介かというと、相手が冷静に怒っている時である。すでに怒鳴り散らして発散し、感情ではなく理性で怒っているからだ。
　誰もが皆みな『怒らせた女性には早めに謝った方が良い』と言うが、本当にその通りだ。
　女性は感情の処理が上手いから、一度冷静にさせると怒りを吟味して強固に積み直してしまう。怒らせるなら早いに限る。
　加えて、今回は勝手に遁とん走そうした星一郎が悪いのだ。
　星一郎がダメージを最小限に抑おさえるには、ただひたすら耐える以外の道はなかった。
「……何でわたしたちが怒っているか分かるか、星一郎？」
　来た、と星一郎は戦いが次のステージに移ったのを悟る。
「……君たちに一言もなかったこと」
　ここで『～かな？』とか『～だろう？』とか問とい掛かけたり窺うかがうような言い方はＮＧだ。断言口調で『自分が悪かった』と認めること。これだ。
　案の定、ディーナは少しだけ表情を緩めて頷き返した。頷いたということは共感を引き出せたということだ。星一郎は心の中でぐっと拳を握った。
「……ダメよ、ディーナ」
　が、顰めっ面つらの刀羽華が釘を刺す。
「星くんを舐なめたらダメよ。女性の口説き文句は苦手とか嘯うそぶいてるけど、女性を言いくるめるのは得意中の大得意なんだから」
　さすがに幼おさな馴な染じみだけあって自分のことをよく知っている。しかしその言い方は如何いかがなものか？　それでは自分が女衒ぜげんかヒモみたいではないか。
　星一郎は胸中で苦言を呈したが、彼女たちの怒りを効率よく受け流そうと画策していたのだから、当たらずとも遠からず、だ。
「……そうだな」

何か思い当たる事でもあったのか、ディーナは再び厳しい顰めっ面を取り戻した。
「人じん畜ちく無害な顔をしつつ腹の中では小こ賢ざかしくいろいろ考えているからな、こいつは」
ふんと鼻を鳴らし、ディーナは足を組み替える。その拍子に、正座している星一郎は彼女の下着をしっかりと目に焼き付けてしまう。
（う……まずい……）
正座如きならいくらでも耐えられる星一郎だが、居い心地ごこち悪く足を動かした。
（……男を正面に座らせてるのに……無防備過ぎる……！）
星一郎は胸中でディーナに悪態を吐ついたが、これは逆さか恨うらみであろう。
なんせ、星一郎はディーナの裸ら体たいをまともに見ても眉まゆ一つ動かさなかったのだ。ディーナにしてみれば、いまさら星一郎が自分の下着を見たところで何とも思わないだろうと諦あきらめているに過ぎない。
――このように盛大なブーメランを、人はまさに天罰と呼ぶ。
「……ごめん、ディーナ……ちょっとトイレに行ってきていい？」
「ほほう？　尿意を催したのか？　なら丁度いい。我慢しろ。それも罰になる」
「それはちょっと……漏らしたらどうするの？」
「別にわたしが漏らすワケではないしな」
ディーナは意地悪くニヤニヤと笑った。これまで自分をいいように扱ってきた男が困る姿は殊ことの外ほかお気に入りらしい。もっと苦しむがいいと、潔癖な彼女には珍しいサディスティックな笑みを浮かべている。
「ほら、漏もらせるなら漏らしてみろ。ちゃんと見守っていてやる」
くくくと嗤わらうディーナの蔑さげすみを含ふくんだ視線を受け、星一郎の背を未知の感覚がゾクリ、と駆け上った。

（い、いや……まってくれ……ほ、本当に見て欲ほしいワケじゃ……）

まさか自分は本当に『変態野郎』なのかと自負心が揺らぎかけるが、これは肉体の過か剰じよう反応なのだと自分を勇気付けた。

何とかこの場を一時離はなれて白はく明めいの薬を飲まなければ。

星一郎は一いち縷るの望みをかけ、幼馴染みへと救いの眼めを向けた。

「……刀羽華、お願いだからトイレに……」

必死に懇こん願がんしようとした星一郎だったが、刀羽華の様子を見て口を噤つぐんだ。

さっきは冷静にディーナに釘を差した刀羽華だが、今の彼女は頬ほおに手を当てて顔を上気させていた。忘我したように半開きの唇くちびるから「ほぅ……」と生なま温ぬるい吐と息いきを漏らし、しかし両目はしっかり見開いて星一郎を見み据すえている。

「せ、星くんのお漏らし……！」

「……刀羽華……？」

「あ、安心して、星くん！　私、星くんが漏らしたなんて、絶対に誰にも言わないから！」

それは言い換えれば、誰にも言わないから安心して漏らしてくれ、と云う事だろうか？

（……まさか、刀羽華ってＳだったのか……？）

幼馴染みの思わぬ反応に戸と惑まどう星一郎だったが、刀羽華の瞳は怒りが吹ふき消えて、純じゆん粋すいな好こう奇き心しんでキラキラと輝いていた。

しっかり者で弱みや苦手を見せなかった幼馴染みが、ようやく見せてくれた弱々しい姿。強いだけでなく弱い所も見せて欲しいという刀羽華の保護欲を、今の星一郎が大いに刺し激げきしてしまったのである。

結論――すべて星一郎が悪い。

「大だい丈じよう夫ぶよ、星くん？　ちゃんとキレイキレイしてあげ

ますからね～？」
「……」
　それは、つまり、刀羽華が直接洗ってくれると言っているのだろうか？
　汚れた星一郎の下半身を、刀羽華の白魚のような指が……
（うっ……ぐ、ぐぐ……）
　余計な想像――妄想をしてしまったせいで、ただでさえ高まった性欲を刺激してしまう。
　いよいよ辛抱たまらなくなってきて、星一郎はもぞもぞと足を動かした。
「ほう？　本当に我慢しているようだな」
　――はい、我慢してます。
「ああ、星くん……そんなに苦しいのね……」
　――はい、苦しいです。
　まるで言葉攻めだが、ディーナと刀羽華は単純に尿意を我慢しているだけと思っているようだ。女性には男性の生理反応がいまひとつピンとこないのだろう。星一郎に限って男の生理反応を我慢して苦しんでいるなどとは想像の埒らち外がいに違ちがいない。
「ふふ……まさかこんなに切せつ羽ぱ詰つまった星一郎が見られるとは」
「……反省しました……しましたから、どうか……」
「いやいや、まだまだ足りない……そう思うよな、刀羽華」
「ええ、ディーナ」
　いつも睨み合あうばかりの二人は、まるで十年来の親友の如き固い握手を交わし合った。
「――先と後と、どっちで楽しむ？」
「――選び難がたい選択ね……」
　何やら意味深な相談をし始める。
　二人の少女は小声で真しん剣けんな討議を重ね、慎しん重ちような顔付きでじゃんけんをはじめた。

「ほいっ！　……よし、わたしが先だ」
「私は後ね……ふふ、楽しみを残しておくのもそれはそれで」
　謎の役割分担を終えた二人は、再び固い握手を交わした。
　そして『先』になったディーナが、ゆっくりもったいぶった、見せつけるような足取りで星一郎に近付いた。
「……ディ、ディーナ……？」
「ふふ……星一郎。わたしは決して、人を甚いた振ぶるのが好きではない」
「うん……ディーナはとっても高潔な人ひと柄がらだからね……」
「そう言って貰えると光栄だ。だがな、星一郎。わたしも人間なのだ。人間、なのだよ」
「……うん……」
「人間である以上、わたしにも善の面と悪の面がある。わたしは常に善たらんと欲しているが……それでもやはり、不意に悪の誘ゆう惑わくに駆られるのだ」
「……ディーナは、そんな誘惑に負けたりしないよね……？」
「負けたくない、負けたくないとも。だがな、星一郎……とても悲しいことだが、今だけは、わたしは悪の誘惑に屈しようと思うのだ」
「悪の面ダークサイドに負けちゃダメだ！　某ＳＦ映画でも言ってるし!?」
「あの映画、わたしはあまり好きではないのだ」
　人間だもの、しょうがない――悟りを開いたシッダールタの如き穏やかな笑顔アルカイツクスマイルを浮かべ、ディーナは星一郎にこれ以上なく優しげに頷きかけた。
「安心しろ、星一郎……汚れる時はわたしも一緒だ」
　まったく安心できない星一郎へ向かい、ディーナはすっ、と右足を持ち上げた。
「さぁ……この足で今からお仕置きだ……」
　とっさに顔を下げようとする星一郎だったが、ディーナの膝が顎あごを持ち上げさせた。おかげで背けようとしてた彼女の足の付け根

を、はっきりと目に焼き付けることとなった。
（ぴ……ピンク……？）
「ふふ……恐きよう怖ふしているな？　いいな、その顔……ふふ、これは拙まずいな。気を付けなければクセになってしまいそうだ……！」
　ディーナが熱に浮かされた吐息を漏らす。妙みようなスイッチが入ったらしく、ゾクゾクしながら自分の身体を抱く仕草は常の堅物な彼女とは真逆の嫣えん然ぜんさである。
　けして、けしてマゾではない筈の星一郎ですら、ゴクリと息を呑のむ色香が醸されていた。
「ふふ、ふ……さぁ、星一郎……コレは罰だ……無様な姿を晒すがいい……」
　ディーナの足が星一郎の股間に伸びる。存分に弄り倒して漏らさせてやろうというのだろうが……たぶんいまそれをされたら、彼女が想定しているものとは別のものが漏れる。
「や、やめ……ディーナ、後生だから……」
　逃げ出したいが、いま立ち上がったら、ある意味漏らすよりもみっともない姿を晒す事になる。
（だ、誰か……助けて……）
　今この場から助けてくれたなら、迷いなくその救い主の足を舐めるだろう。
　宿すく儺な星一郎は生しよう涯がいで初めて、一〇〇パーセント他力本願な救いの祈いのりを捧ささげた。
　運命の女め神がみなどといったものは、イヤホンを着けて自転車運転する学生並みに耳が遠いと相場が決まっているが――ごくごく偶たまに気き紛まぐれを起こすらしい。
　ディーナの爪つま先さきが、星一郎の股間に触れるその間際、
　――ピンポーン……
　来訪者を告げる無遠慮なチャイムが、息を呑んだ室内に高々と響ひびき渡わたった。

「む……」
　無機質なチャイムが、冷静に自分を見返す理性を引き摺り出したらしい。ディーナはバツの悪い顔になって、星一郎の股間に伸のばしていた足をそろそろと引き戻もどした。
「……こほん。少々悪ノリが過ぎたな」
　咳払いして誤ご魔ま化かそうとするディーナだが、星一郎はもちろん喜んで誤魔化される。
「ええ？　止めちゃうの？」
　不満げな者もいたが、さすがに来訪者が来ているのにコトを進める気はないらしい。残念そうな吐息を漏らすと、刀羽華はお邪魔虫の正体を確かめにインカムへと向かった。
　一生ものの危機から脱し、星一郎は心の底から安堵した。
「……星一郎。お前、何か変ではないか？」
　落ち着きを取とり戻したディーナが小首を傾かしげる。
　星一郎は、下半身を落ち着かせるのに全力を尽つくしているのをおくびにも出さず、素知らぬ顔で微笑み返した。
「ううん？　何が変だと思うの？」
「いや、何がと言われると……」
　ディーナはまじまじと星一郎の顔を見回すが、これといった確信を得られずに難しい顔をする。長年鍛きたえてきた澄まし顔はいまだ霊れい験げんあらたからしい。
　無理やり落ち着いた星一郎が立ち上がると、刀羽華が疑問符を浮かべながら戻ってくる。
「ねぇ、星くん……お客様なんだけど、『星一郎に会いたい』って……」
「そう？　誰かな？」
　誰であれ、星一郎にとっては人生の救世主だ。礼を尽くして相対しようと決意してインカムの画面を覗き込む。
『やっほ、元気ぃ？」
「……花か春蕾……」

画面の向こうでひらひら手を振る少女の無邪気な笑みを見て、星一郎は一いつ瞬しゆんで表情を引き締めた。

「へぇ？　けっこうイイ部屋だね？」
リビングに上がり込んだ春蕾は、警けい戒かいする様子もなく用意したお茶を啜ったが、すぐに顔を顰めて湯ゆ呑のみを突き返した。
「ごめん、苦いの苦手なんだ。牛乳をたっぷり使ったカフェオレか、ロイヤルミルクティーにしてくれない？」
いけしゃあしゃあという表現がこれほどピッタリな要求もそうそうないだろう。
星一郎は湯呑みを突き返し、ついでに目を細めて睨にらみ返す。
「……悪いけれど、粗茶の他には雑ぞう巾きんの絞しぼり水と風ふ呂ろの残り湯しかない」
「飲み物には毒を入れなくても、言葉にはたっぷり投入してくるねぇ」
星一郎の返答に、春蕾はけらけらと笑った。
星一郎の両サイドに座るディーナと刀羽華は感情の定まらない複雑な表情をしていた。彼かの女じよたちには昼間の顛てん末まつを簡単に説明していたが、底そこ抜ぬけに陽気な春蕾への対応を決めかねているようだった。
「……星一郎。彼女が昨晩……そろそろ一昨日おとといの晩か……の〝襲しゆう撃げき犯〟なのか？」
「本人の言葉を信じるならね」
「その本人は『あたしと星一郎は友達だ』って言ってるけど？」
「友達になった覚えはないね」
「ヒドイっ！」
傷付いたと言いたげに胸を押さえ、春蕾はよよよと床に崩れ落ちた。
「あたしのコトはお遊びだったのね!?　もうお嫁に行けない！」

「ここから北に三ブロック行けば結けつ婚こん式場があるから、三千円でお嫁さんになれるよ。写真代も込みだ」
「格好だけなんてイヤ！」
「男性に食わせてもらいたいなら、お嫁さんにならなくても色々手段はあると思うけど？」
「愛人とか情婦なんてイヤなの！　あたしが欲しいのは真実の愛よ!?」
「愛だけの結婚はお金だけの結婚と同じくらい不幸だからオススメしないね」
「……よくもそうポンポンと言葉が出てくるわね」
　ひらりと椅子に座り直し、春蕾はニマニマ笑って星一郎を眺ながめる。
「星一郎、あんたってよく『女ったらしの才能がある』なんて言われない？」
「言葉が巧うまいだけで女を垂らし込めるなら世話はないね」
　星一郎は辟へき易えきして否定するのだが、何故なぜか両サイドからじとりとした視線が突つき刺ささる。
「……お喋しやべりをするために来たの？」
「正直、あんたと話すのは楽しいからね。それが目的の一つであることは否定しないよ」
　肩かたを竦すくめ、春蕾はやれやれと首を振った。
「お喋りだけだったら、とても楽しい時間だったんだけどねぇ。残念ながら、あまり楽しくない話もしないといけないんだよね、コレが」
「なら、さっさと本題に入ってくれると嬉しいんだけど？」
「あんたたち三人、あたしの下げ僕ぼくになってくれない？」
　あっけらかんと口にされた要求に、星一郎をはじめとする三人は一いつ瞬しゆん呆あつ気けに取られたが、三人とも徐じよ々じよにその表情が険しくなってゆく。
「……下僕、とは？」
「そのままの意味だよ、ディーナ。今後あんたたちはあたしの為に

『摩天の夜宴バビロン・ナイト』を戦って、神格をあたしに譲渡して欲しい。頑張ってあたしを勝ち残らせてね？」
　春蕾が笑ったまま言うと、ディーナの表情はますます険しく、今すぐにでも戦いを始めんばかりに鋭するどくなっていった。
「……そんな要求が通ると思っているのか？」
「思ってるよ？　あんたみたいに守るものが多いのは特にね。あんたの槍やりがどれだけ疾はやくても、いますぐお兄さんを助けには行けないでしょ？」
「ッ！　貴様ァ!!」
　分かりやすい脅迫に、ディーナはテーブルを叩たたいて立ち上がる。湯呑みやカップが床に落ち、ガシャンと割れて音を立てる。
「兄に……クリス兄様に何をするつもりだっ!?」
「何もするつもりはないよ？　あんたがあたしの為に戦ってくれればね？　でも従ってくれないなら見せしめは必要だよね？　例えば栄養剤にこっそり殺虫剤を混ぜたり……」
「キサマァアアアッッ!!」
　最愛の兄を害すると仄ほのめかされたディーナが春蕾に跳びかかる。星一郎と刀羽華が慌てたが、彼女はすんでの所で自制心を取り戻し、春蕾の首に触れる直前で両手を押し留とどめた。
「ぐ……」
「そうそう。あたしに何かあったら、何が起こるか分からないからね」
「……卑ひ怯きよう者め……！」
「そりゃ今いま更さらでしょ？　この前の『夜宴』で奇襲したのが誰だと思ってるの？　卑怯上等じゃなきゃ、あんな真似はしないでしょ？」
「……」
「あたしもねぇ、ホントはこんなコトしたくないのよ？　したくないんだけど、勝つ為には手段を選んでられないでしょ？　ほら、『勝てばよかろうなのだァ！』ってヤツよ」

特徴的な効果音が付きそうな体勢をしながら春蕾が言う。
ディーナはギリッと奥歯を噛かみならし、掌てのひらを突き破らんばかりに拳こぶしを握にぎった。
「星一郎と、そっちの彼女もオーケー？」
「……私はあくまでディーナと星くんの協力者よ。あなたに協力する謂いわれはないわ」
「そう言わずにさ？　有名神社にお住まいのご家族のご健康の為にもさ？」
「……あなた、私の家族にまで手を出だすつもり？」
「別にあたしがどうこうするわけじゃないよ。けど、近ちか頃ごろは変質者も多いしさ。妹さんは中学生でしょ？　しかもリアル巫女みこさんでしょ？　お持ち帰りして萌え萌えキュン！　して欲しい大きなオトモダチはたくさんいると思うけどなぁ？」
「……」
激高するディーナと違い、刀羽華は終始静かであった。しかし彼女の笑顔が友好的でないのは、どれほど空気の読めない人間でも分かっただろう。
「そんでもって星一郎は……文句ないよね？　あんたはこのディーナの騎き士しとして『夜宴』に参加してるんでしょ？　ディーナが従うなら、あんたも従うよね？」
「……どうせ僕の叔母おばの勤め先も知っているんだろう？」
「御門工業の研究部門にお勤めなんでしょ？　超有名なコングロマリットじゃない！　エリートってやつだね」
友達の家族を褒ほめるように言う春蕾。家族を人質に脅迫する人物とは思えぬ、あまりに気軽な態度だ。
星一郎はじっと春蕾を睨むが、彼女はにこにこと明るく笑い返すだけであった。
「……それで？　最初に何を命令するつもり？」
「もちろん、この前仕留め損ねたお嬢じようちゃんよ」
すでに昨日となってしまった日中の騒動から予想していたが、春蕾

は殊ことの外ほかベルナデットを付け狙っているようだ。
「……理由を訊いても？」
「説明の必要はない、って言いたいところだけどそうもいかないよね？　お互たがいの相そう互ご理解は大事だしね」
　脅迫した舌の根が乾かない内のこのセリフに、ディーナと刀羽華が射殺さんばかりに春蕾を睨んだ。
「やっぱりさ、あのお嬢さんの〝鼻〟は厄やつ介かいなのよ。特にこっそりとしたい人間にとって、あの鼻の良さは邪魔だと思わない？」
「……後ろめたい事をした人間がいたら、ベルはすぐに嗅ぎ分けるだろうね」
「でしょ？　だからさ、あまりおおっぴらに出来ない手段で『夜宴』を勝ち抜ぬきたい人間には、あのお嬢さんはお邪魔虫なのよ。消えて欲しいと考えるのは当然だと思わない？」
「だから、どさくさに紛まぎれて排はい除じよしようとした？」
「そ。あのお嬢さんがまだどのグループにも所属してない内にね。暗殺や奇襲は相手の油断を突いてやるものでしょ？　『天使』か『魔王』か、どちらかのグループに吸収されて複数の〈聖楔者ヒエロス〉が警戒したらやりにくくなるからね」
「だから、ベルたちに手紙を送って、僕たちと戦わせた、と」
「あんたたちも厄介だから、一いつ緒しよに片すか、さもなくば疑いをかけようと思ったのよ。神格を回収して力を増す《聖王》と、他者の権能を強化する《人間》、この二者がカルディア委員会に睨まれて動けない間に、睨み合っている『天使』と『魔王』たちを上手く焚たき付つけて共倒れを狙ねらう――ま、そんな感じの計画だったのよ」
「それが上手くいかなかったから、脅迫材料が豊富そうな僕たちを矢面に立たせようと？」
「そんな感じ。いやぁ、カルディア委員会に知れたら激怒しそうだよねぇ？」
「何を他人事みたいに！」

お気楽な春蕾の物言いに、ディーナが再びテーブルを叩く。
「盗ぬすっ人と猛たけ々だけしいにもほどがある！　悪事を働いている自覚もないのか!?」
「あー、はいはい。全部あたしのせいでござんす。申し訳ございません」
「キサマ……！」
ディーナが底冷えのする声を漏らす。今にも畏光メランムを発して攻こう撃げきせんばかりだった。
「――ディーナ」
「止めるな！　よくよく考えれば、こいつにそんな大それたことが出来るワケがない！　兄様が収容されているのはカルディア委員会直ちよつ轄かつの施設だ！　そうそう手出しは……」
「止めるんだ、ディーナ」
ディーナが〈第二書版セカンダリイ〉を取り出そうとした手を掴つかみ、星一郎は静かに首を振った。
「確かに、ディーナの言う通りかもしれない。けど、そうじゃ無いかもしれない。もし春蕾に実行力があったら、きっと君は自分を許せなくなる」
「だが……」
「それに、君のお兄さんは大丈夫かもしれない。けれど、僕や刀羽華は……」
「う……」
ディーナは悔やむように眉をひそめ、懐ふところに伸ばした手から力を抜いた。
「……すまない。自分の事しか考えられなくなっていた……」
「脅迫されたんだから当然だよ……刀羽華も、安易な行動はしないで欲しい」
「でも、星くん……」
「頼たのむ、刀羽華」
星一郎は深々と頭を下げる。

　何か言いたそうにしていた刀羽華だが、星一郎が頭を下げたのを見て、静かに頷うなずいた。
「……分かったわ、星くん」
「ありがとう、刀羽華」
「いやぁ、一時はどうなるかと思ったけど、上手うまく収まって良かった良かった」
　ぱちぱちと場ば違ちがいな拍はく手しゆをする春蕾を、春蕾以外の人間が殺意混じりにきつく睨む。春蕾は態わざとらしく項うな垂だれてみせた。
「場を和なごまそうと思っただけなのに……」
「それで？　卑怯で恥知らずな脅迫犯様は、具体的にこれからどうして欲しいのかな？」
「酷ひどい言い方……まぁ、まずは近い内にベルナデット・リエーヴルとマリオン・ルシェールの二人に『夜宴』を申し込んで欲しい。それで彼女たちを排除できれば良し。それが無理なら、何とかしてベルナデットお嬢ちゃんだけでも亡き者にしてね」
「……殺せ、と言うことかな？」
「あのお嬢ちゃんの〝嗅きゆう覚かく〟は自前だからね。『夜宴』から抜けるだけじゃ安心できない。カルディア委員会に保護される前に確実に命を奪わないと安心できないなぁ。卑怯で恥知らずで人にん非ぴ人にんな脅迫犯としては」
「……」
　昼間見たベルの恥ずかしそうな笑顔を思い出し、星一郎は怒りに震えそうになるのを必死で我が慢まんしなければならなかった。
「……中国は仁義と礼儀を重んじる儒教コンフーシヤンの国だと思っていたが、こんな様では孔子コーシも草葉の陰かげで泣いているだろうな」
「残念、あたしは台湾生まれの本省人だからノーカンよ。実家の家族も仏教と道教のちゃんぽんだし、クリスマスにはしっかりツリーを飾るしね」

　黙だまり込んでしまった星一郎に変わってディーナがつばを吐くように罵倒するが、春蕾は肩を竦めるだけだった。
「それじゃあ、これからよろしく。それで？　あたしはどこに寝ればいいの？」
「……は？」
「余計な事しないように見張らなきゃならないしね。いやぁ、お泊り会なんて久しぶり！」
『……』
　散々脅しておいてから「お泊り会」などと言い出す春蕾のセリフに、星一郎もディーナも刀羽華も、しばらく言葉もなく、唖然と口を開きっぱなしにしてしまった。

2

「ねぇねぇ、夕ご飯は何？　お腹なかすいちゃった～」
　お泊り会などと言い出して居着いた春蕾を、ディーナは何回殺しても足りないくらいの殺意を込めて睨み据えた。
　遅めの夕食を用意しだした星一郎の周囲を、春蕾は待つことの出来ない子供のようにうろうろしている。
「ねぇねぇ、まだ？」
「……待ちきれないなら手伝うとかしたら？」
「それもそうね。エプロンはどこ？」
「戸と棚だなの一番下、雑巾の奥おく」
「りょうか～い」
　指示された場所からエプロンを取り出すと、何を思ったのか、春蕾はいきなり衣服を脱ぎだした。
「な、何をしているのだ！」
　ぎょっとしたディーナが慌あわてて詰きつ問もんすると、春蕾はちっちっちっと指を振った。
「決まってるでしょ？　ラブコメの正装よ！」

　自信満々に言い放った春蕾は下着一丁になると、いそいそとエプロンを身に着けた。料理の手を止めて目を丸くする星一郎に向けてくねっとポーズを取ってみせる。
「ふっふっふ。どう、星一郎？　全男の夢、裸エプロンの威い力りよくは!?」
「……裸じゃないようだけど？」
「分かってないわね。このパンツが微び妙みような生活感を与あたえてフェチ度が増すのよ！」
「フェチは求めてないんだけど……」
　星一郎は頭かぶりを振ると、手にした包丁を春蕾に放った。
　勢いよく向かってくる凶きよう器きを、春蕾は危なげなく二本の指で挟んで受け止める。
「危ないわね」
「玉ねぎを切っておいて。君が手伝ってくれるなら、今のうちに風呂のお湯を溜ためてくる」
　春蕾の抗議をスルーし、星一郎はさっさとリビングから出て行った。
　素っ気ない星一郎を見送ると、春蕾は肩を竦めてまな板に向かい合った。
「やれやれだわ。あんなに素っ気ないとはねぇ」
　春蕾は手早く玉ねぎを切り終えると、ふと思い立ったようにディーナと刀羽華の方へと振り向むいた。
「もしかして、あんたたちも裸エプロンをしてるの？　もしかしてあたし、二番煎じ？」
「そんなワケあるか！」
　すでに裸を晒さらしているのだが、裸エプロンなどという倒とう錯さく的てきな格好はディーナの許容外であった。
「そんな不ふ埒らちな格好などとんでもない！　そうだろう、刀羽華!?」
　同意を求めて刀羽華に振り向くが、彼女はディーナの視線からさっ

と顔を逸らした。
「……刀羽華？　お前、まさか……」
「い、妹に騙だまされたの！『イマドキこれくらいジョーシキよ！』とか言われて……」
「……まさかパンツまでは……？」
「……」
　再び視線をそらす刀羽華。
　仲間と思っていた少女の思いもかけぬ裏切りに、ディーナはあんぐりと口を開けた。
「いいねぇ、その妹ちゃん！　あたし、その娘ことはとっても仲良く慣れる気がするよ！」
　よほどツボだったらしく、春蕾は腹を抱かかえて床ゆかを笑い転げ回った。
「……騒そう々ぞうしいな」
　リビングに戻ってきた星一郎が、床を転げ回る春蕾を見て額を押さえる。
「……裸エプロンで床を転がるのはどうかと思うけど？」
「そんなこと言って、横乳に夢中なんじゃないの？」
　エプロンの胸むな元もとを摘つまんだ春蕾が艶つやっぽく星一郎に笑い掛ける。
　ディーナの額に青筋が浮うかぶ。
　イライラするディーナをちらりと見やり、星一郎は半眼になって春蕾を見下ろした。
「……さっさと料理するよ」
　怠なまける子供を窘なだめるようにして食事を用意する。
　すげなくされて大人しくした春蕾だが、夕食を食べ始めるとまた悪ノリを始めた。
「はい、あーん」
「……」
　裸エプロンから着き替がえることもせず、春蕾は星一郎の膝ひざの

上に乗っかった。疲れの見える星一郎に構わずに、用意した食事を口に運んで食べさせようとする。
「ほらほら、口を開けてよ星一郎。あーん」
「……」
　仕方なく星一郎が口を開けると、春蕾は箸はしで摘んだ野菜炒めを突っ込んだ。
「美味おいしい？」
「……よく分からない」
「ノリ悪いなぁ。星一郎らしくないぞぅ？　それともアレかな？　コッチの方が気になって味が分からない？　それならコッチの味見をしちゃう？」
「味のするものが出るようになってから出直してくれ」
「……」
　対面で行われる寸劇のせいで、ディーナこそ味がよく分からなかった。
　春蕾という少女はやたら星一郎に絡んでいるが、自分の優位さを見せつけようというのだろうか？
　黙って食事を進めていると、隣が静かなのが気になった。
　刀羽華もディーナと同じように黙々と食事を進めているが、その動作が測ったように正確で、単純なカラクリ人形かリピート映像じみた機械的動作になっていた。
「……刀羽華？」
「話しかけないで、ディーナ」
　合成されたみたいに無機質な声である。
　苦心惨さん愴たんして感情を封印したらしい刀羽華であったが、
「星一郎、あたしが先にお風呂に行くから、五分経たったら入ってきてね」
「何を考えているの!?」
「何って、そりゃもちろん『ドッキリエッチ』の実践よ！」
「仕込んでやることじゃないでしょうが！」

　脳みそが沸いているとしか思えない春蕾の回答に、刀羽華もさすがにキレた。
「図ずう々ずうしいにも程ほどがあるわ！」
「いいじゃない。若い男と女だもの。危険な火遊びは青春のスパイスよ。短い青春、今しかできないイベントはちゃんと消化しなきゃ！」
　星一郎の腕うでに抱き着きながら、春蕾は妙な使命感を燃え上がらせていた。
「どうせならあたしも仲良くハーレムに加えて欲しいんだけど？　ずっと憧れてたのよ、ハーレムイチャコラ！」
　ゲヘヘと下品に笑う春蕾から飛び出たとんでもない言葉に、額を押おさえていたディーナも慌てて顔を上げた。
「ハ、ハ、ハーレムだとっ？　いったいなんでそんな話になるのだ!?」
「えー？　だってそういう事なんじゃないの？　星一郎ってば一見真人間そうに見えて性欲強そうな顔してるし、どんと来いハーレム展開！　ってカンジじゃない？」
「……僕って、本当はどんな顔してるんだろ……」
　自分の顔に触ふれながら悩なやみ始める星一郎を見やって、ディーナはぶんぶんと顔を横に振った。
「ハーレムなどと!?　わたしと星一郎はただの戦友だ！」
「はぁ？　ただの戦友？　あんた、本気で言ってるの？」
　春蕾はおどけるのも忘れてまじまじとディーナを観察する。あまりに真剣に見詰められ、ディーナの方が気け圧おされるほどだった。
「……はぁ……その顔でイマサラそんなセリフとか……ツンデレ拗こじらせ過ぎでしょ」
「どんな顔だというのだ」
　ムッと表情を硬くして睨み返すが、春蕾はひょいと肩を竦めるだけだった。
「んで？　刀羽華の方はどうなの？　昨今は改善されつつあるけど、それでも幼おさな馴な染じみは負けフラグ筆頭だけど？」

「……『夜宴』が終わったら、ちゃんと返事を貰もらうことになっているわ」
「そうなの？」
　春蕾が興きよう味み津しん々しんな顔を向けると、星一郎は不承不承頷いた。
「……吊つり橋ばし効果とかそういうノイズを引いてからじゃないと、刀羽華に失礼でしょ？」
「ノイズのない色恋沙汰なんてこの世にあるのかしらねぇ？」
「なら君好みに言い直そうか？　僕は死亡フラグを立てるなんて真っ平御ご免めんだ」
「星一郎は死亡フラグも恋愛フラグもバッキバキにへし折っちゃいそうだけどねぇ」
　星一郎の返しに気分よく笑う春蕾であったが、ふと何かを考えるように天てん井じように顔を向け、しばらくすると何かに納なつ得とくしたのかうんうんと一人頷いた。
「ふぅむ……よし、なら星一郎。ドッキリエッチは諦あきらめることにするよ」
「それは重ちよう畳じよう」
「面めん倒どうなのはすっ飛ばして、エロＣＧの回収を優先しましょう」
　春蕾は星一郎を引っ張って風ふ呂ろ場ばへ向かおうとする。
　無論、それを許すディーナや刀羽華ではない。
「待て！　何をするつもりだ！」
「もちろん裸はだかのお・付・き・合・い」
　春蕾はニヤニヤと下世話な笑えみを浮かべてディーナに答える。
「やっぱり今の時代、焦じらしプレイは個別ルートに入ってからにすべきだと思うのよ。最初に焦らすと、堪こらえ性しようのない昨今のプレイヤーはスキップしちゃうしね。せっかく書かれたシナリオが読まれないのは悲しいことだわ」
「何の話だ!?」

ディーナが叫さけぶが、春蕾は真ま面じ目めくさった顔で一人うんうんと頷くばかりだ。
刀羽華はすでに怒いかりが一周回ってしまったらしく、空恐おそろしい笑みでニコニコしていた。
「……春蕾さん？　あなた、どんな理由で星くんを引っ張り込もうとしているのかしら？」
「それはもちろん、星一郎を誘惑する為ために決まってるじゃない？」
春蕾は音が聞こえそうなウインクをし、人事のように目を逸そらしていた星一郎の頬ほおにわざとらしくキスしてみせた。
「星一郎とのお喋りは楽しいからね。結婚するならこういう男が良いと思うのよ」
「……気のせいか、結婚って言葉と一緒に『マンガ』とか『アニメ』って副音声が聴こえたんだけど？」
「海賊版を視聴するのはクリエイターに悪いしねぇ。ピザの申請も面倒だし」
趣しゆ味みの為に星一郎を捕まえようと言い出す春蕾に、星一郎が大好きな幼馴染みの髪かみがぶわりと逆立った。比喩ではなく、抑おさえきれなくなった殺気が権能を呼び起こしたのだ。身に纏まとった風で黒くろ髪かみをゆらゆらと揺らめかせる刀羽華が、慈じ母ぼの如き笑顔で、
「――殺る」
「やめろ！　刀羽華！」
「放してディーナ！　そいつを殺せない！」
本物の殺意を持って飛とび掛かかろうとした刀羽華をディーナが羽は交がい締じめにする。
「あなただって頭にキているでしょう!?　あの女を殺さないと！」
確かにディーナも憤ふん然ぜんとしていたが、すぐ側そばに見境をなくした人間が出てくれば自然と落ち着かざるを得ないのが世の常である。

「放して！　あの泥どろ棒ぼう猫ねこを殺さないと！」
「おおっ!?　まさか『泥棒猫』と呼ばれるなんて!?」
　春蕾は叩きつけられる殺気を軽く受け流し、それどころか何やら感動していた。
「その言葉を聞けただけで、日本に来た甲か斐いがあるねぇ。けれど、忘れてない？　あたしの身に何かがあれば……」
　思わせぶりにニタリと笑われ、ディーナの腕の中で暴れていた刀羽華がようやく大人しくなる。
「ぐぅ……」
「はっはっは！　あたしが酒池肉林の宴うたげをするのを指を咥くわえて見ていると良いわ！　おーーほっほっほっほっほ！」
　実にテンプレな高笑いを響かせ、春蕾は星一郎を引きずってリビングを出て行った。
　親の仇かたきでもここまで憎まないだろうという顔で睨んでいた刀羽華だったが、春蕾の姿が消えると、彼女はディーナに抱だき着ついた。
「うわぁあああああああん！　星くんが！　星くんがあんな女に！　あんな軽けい薄はくで胡う散さん臭くさくて調子の良いだけの女にぃぃいいいいいいいっっ!!」
「……そうだな……」
　おいおいと泣きつく刀羽華の頭を撫ぜながら、ディーナはすさまじい疲労感に襲われた。
　なんで自分が刀羽華を慰めねばいけないのだろう？　むしろ慰なぐさめて欲ほしいのはこっちなのにと、馬ば鹿か正直に怒おこって泣いて暴れる刀羽華が心底羨うらやましくなった。
　刀羽華を見ていると、怒りに我を忘れることが出来なかった自分が、ひどく小さな人間に思えてくる。理性と誇ほこりを信条として自分に厳しく生きてきたが、そんな自分が今はとても間ま違ちがっている気分にさせられた。
　そんなこんなで、ディーナは座すわり込みたくなるのを必死に堪え

なければならなかった。
「うう……ぐすっ、ごべんなざい、ディーナ……あなたも腹立たしいでしょうに……」
「まあ……そうだな……」
「けれど、ディーナ。お願いだから『自分が居なくなった方がいい』とか言わないでね？」
「ん？」
「あなたの事だから、『脅迫されるのはわたし一人で十分だ』とか言いそうだから……」
　言われて初めて、ディーナはその事に思い至ってガンと頭を殴られたみたいにショックを受けた。
　植物状態の兄という、三人の中で一番差さし迫せまった脅迫材料を持っているのがディーナなのだ。普ふ段だんの彼女なら、身動きの難しい自分が犠ぎ牲せいになって星一郎と刀羽華を解放しようと思っても良いはずだ。それが可能か不可能かはさておき、ディーナ・チャレンジャーとはそういう風に考える人間であった筈はずなのだ。
　なのに、何で自分は、欠片かけらもそんな事を思わなかったのだろう？
　生き真ま面じ目めで堅物で自分に厳しい。そんな自分のいつもと違ちがう思考と行動に、ディーナは内心で激しく動揺した。
「お願いだから、犠牲になるとか考えないでね……いまはあの女に対たい抗こうするのに、猫の手だって欲しいんだから……」
　怒りを燃え上がらせる刀羽華に適当に頷きつつ、ディーナはぐるぐると苦悩していた。

「あっはっは！　いやー、星一郎と一緒にいると楽しいねぇ」
　自分を引き摺る春蕾に、星一郎はじとっとした視線を注いだが、彼女は何食わぬ顔でけらけらと笑うばかりだった。
「星一郎って、周りに面白可笑おかしい人がいっぱいだよねぇ。類は

友を呼ぶってやつ？」
「……僕はちょっと我が慢まん強づよい以外は普ふ通つうの人間だと思うけどね」
「こんな状じよう況きようでも普通な人間は、普通の人間とは呼べないんじゃない？」
　星一郎の反論に、春蕾は物知り顔で反論し返す。
「確かに、星一郎は一見普通っぽいね。言動も真面目で人並みな事しか言わないし。けどさ――異常な状況に放ほうり込まれても〝普通〟でいられる人間がどれだけ居るのかな？　〝普通の人間〟ってヤツは、異常な状況に放り込まれたら異常になると思うけどねぇ？」
「……」
「〝普通の人間〟の〝普通〟ってのは、そんなに強度があるもんじゃないでしょ。異常な状況でも〝普通〟でいられる強度を持った人間は、〝普通の人間〟と呼べないんじゃないかなぁ？」
　陽気で脳天気なばかりと思えば、妙みように含がん蓄ちくのある言葉を放ったりする。相対すればするほど、不思議な魅み力りよくを持った少女である。
　春蕾は星一郎を風呂場まで引っ張ってくると、さっそく衣服を脱ぬいだ。とはいえ裸エプロンのままだから、裸になるのはすぐである。
　顔を向けつつ視線を逸らした星一郎は、これ見よがしに深々と嘆たん息そくした。
「それじゃ、ごゆっくりどうぞ」
「なに言ってるの？　星一郎も一緒に入るんだよ？」
「……さっきのはからかってただけじゃないの？」
「もちろん、それが第一の目的だったけど、折角だしさ。裸の付き合いをしましょうよぉ」
「……随ずい分ぶんと明けっ広げだね。お兄さんたちともよく一緒に入ってたワケ？」
「まぁね。それどころか、家族でもないたくさんの男たちと入ったこともあるけど？」

春蕾は挑ちよう発はつするように笑ってぺろりと唇くちびるを舐め上げる。
「うふふ……星一郎もたっぷり可愛がってあげるよぉ？」
クスリと笑う春蕾。
中学生並みに性欲が不安定になっている星一郎としては勘かん弁べん願いたいが、ここで断って弱みを見せるのはよろしくない。どう見ても、この少女はからかうネタを掴んだら嬉き々きとして調子に乗りまくるタイプだ。
毅き然ぜんとした態度で臨まねばならない。
幸い、白明にもらった薬もたっぷり服用した直後だ。しばらくは何とかなるだろう。
星一郎は覚かく悟ごを決めてごそごそと衣服を脱ぎ始めた。
「おお……けっこうイイ身体してるわねぇ」
ペタペタと触りながら、春蕾はしきりに感心していた。
「おーおー、よく引ひき締しまってる。見た目細いけど密度がパない感じだねぇ」
「……オタクだとは思ってたけど、筋肉フェチも患わずらってるの？」
「そこら辺は門前の小こ僧ぞうもなんとやら、かなぁ？　さぁさぁ、もっとよく見せて」
風呂場に引き摺り込むと、春蕾はさらにマジマジと星一郎の身体を見分した。時折掌を当て、「ふむぅ」と唸うなったりする。
「……気の巡りがすっごく速い。成長期の子供もびっくりだね。もしかして成長痛みたいなのを感じてるんじゃない？」
この指摘には星一郎も驚おどろく。
確かに星一郎は膝や肩などの関節に痛みともいえない違い和わ感かんを覚えていた。身体が作り変えられているのなら、成長痛と言われればなるほどしっくり来る表現だ。
「けっこう辛いんじゃない？　よし、あたしが撫で撫でしてあげよう」

むりやり身体を洗おうとする春蕾に、星一郎は外見は冷ややかに首を横に振ふった。
「遠えん慮りよしておくよ。それより、僕が洗ってあげるよ。何と言っても脅迫されてるからね。ご機き嫌げん取りくらいしなきゃ」
「えー？　でも星一郎に身体を委ねるのはイロイロ危険そうなんだよねぇ」
星一郎は舌打ちしたくなるのを必死にこらえる。面倒事からさっさと撤てつ退たいする為に鍛えた洗髪テクをあっさり見破られた。
恐るべき危機回避能力である。
「それに脅迫してる側としては、無理やり命令するって手もあるのだけど？」
そんな事はさせないでくれと笑って宣のたまう春蕾に、星一郎は渋々とバスチェアーに座った。
「はいはーい。それじゃキレイキレイしましょうねぇ？」
春蕾が触れてくる寸前、星一郎は心を無にした。お手軽な悟りを開くべく、心の中で般はん若にや心しん経ぎようを唱えはじめる。
「お客さん、どこか痒いところはありませんかぁ？」
背筋をつつ……と軽いタッチの指先が擽くすぐってくる。
――色不異空、空不異色、色即是空、空即是色――
「うふふん。寡黙なお方ですねぇ？　男らしくてス・テ・キ。サービスしちゃいますよ」
フニョン、と背中に柔やわらかいものが押し付けられた。ニュルニュルと、その柔らかいものが背中で蠢うごめきまわる。
――是諸法空相、不生不滅、不垢不浄、不増不減――
「むぅ……強情だなぁ。でも、こうしたらどうなっちゃうかなぁ？」
無反応ぶりに呆あきれた声だったが、じわじわと思い知らせるように腰こしの周りを両側から回り込んできた指先が、足の付根へと伸のびていって――
――羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶――
「むぅ……もしかしてすんごい特とく殊しゆな趣味なの？　ノーマル

じゃ反応もしないの？」
「……そう思うんだったら試めしてみたら？　悲しいことに僕は脅迫されてる身だからね。命令されるがままだ」
「……生意気だねぇ」
　調子を外されたらしい春蕾は、それからしばらくは静かにしていた。
　しかし風ふ呂ろを終えて就寝の段になると、またもや無理難題をけしかけて来る。
「じゃ、あたしは星一郎と一緒に寝るってことで」
「……君も懲こりないね」
「あたしにもプライドがあるからねぇ。星一郎の澄まし顔を盛大に崩くずしてみたいじゃない」
　そう言った春蕾は、ディーナと刀羽華の一〇〇パーセント殺気の視線を背中に受けつつ、星一郎の自室に付いてくる。
「へぇ？　ここが星一郎の部屋？」
　招かれざる客は無遠慮に部屋を見回すと、ベッドの下をごそごそと漁あさり出した。
「ふっふっふ……やっぱり野や郎ろうの部屋に来たらお宝探しよねぇ！」
　お約束を外さない春蕾の行動に、星一郎は何も言わなかった。何か言っても無む駄だだと思ったし、何より目の前の毒に対抗しなければならなかった。

　犬みたいに鼻先をベッドの下に突っ込んで宝探しをしている春蕾は、タンクトップに短パンという無防備な格好だった。柔らかさと円味を帯び、その内側に瑞みずみずしい生命力をいっぱいに詰め込んだ魅み力りよく的てきなお尻しりが、目の前で誘うようにふりふりと揺ゆれている。
　――もし計算してやっているなら大した策士だ。
　すでに風呂場で我慢の限界にあった星一郎は、机の上の瓶びんを掴み、中の錠じよう剤ざいをざらざらと嚥えん下かした。
「うーん、ベッドの下ってのはさすがにありきたり過ぎるかぁ……？　何を飲んでるの？」
「……睡眠導入剤」
「不眠症なんだ？　まぁ、あんな女の子二人と一つ屋根の下なら、そりゃ睡眠薬がないと眠れないわよねぇ」
「そう思ってくれるんなら、僕ぼくの安眠の為、君もこの部屋から出て行ってくれない？」
「そうはいかないわ。あたしには使命があるからね」
「へぇ？　どんな？」
「そりゃもちろん、ムッツリスケベな星一郎を素す直なおにさせることよ」
　春蕾は、本ほん棚だなの本を抜き出してカバーを片かたっ端ぱしから剥がしながら言った。
「うぬぅ……真面目なカバーで誤ご魔ま化かしているかと思ったのに……どうにも、星一郎とあの二人を見てると、もどかしくていけないのよねぇ」
「……大阪辺りの世話焼きなおばさんみたいだ」
「水道橋にも一度行ってみたいわよねぇ」
　本棚の裏に手を突っ込みながら春蕾は続ける。
「星一郎が素っ気無い態度だから、彼かの女じよたち――とくにディーナなんかは苦しんでるように見えるけど？」
「ディーナが？」

「星一郎はどうなの？　刀羽華には返事をするって約束したみたいだけど、ディーナとはどうするの？」
「どうって……僕は彼女を守って『夜宴』を勝かち抜くだけだ」
「守る、ねぇ。星一郎は本当に彼女を守るつもりがあるのかしらねぇ？」
「……どういう意味？」
「星一郎は、なんでディーナを守ろうと思ったワケ？」
「……彼女が、僕の姉さんと似ていたからだ。性格はぜんぜん違うけど、自分以外の誰だれかの為に自分を犠牲に出来る……そんなところがそっくりだ」
「自分以外の誰かの為、ねぇ。それって星一郎のコトじゃない？」
「……」
「表面上はともかく、二人は似た者同士に見えるけど？　んでもって、似た者同士ということは、気持ちも似通ってくるんじゃない？」
「……つまり？」
「だから、少しくらい隙すきを作ってあげないと。何があっても平常運転って態度じゃ、あっちも隙を作れないでしょ？　頑張る人間を見たら頑張っちゃうタイプでしょ？　星一郎もディーナも。そんでもってこういう場合、先に折れてあげるのが男の甲斐性じゃない？」
「……脅迫犯とは思えない物言いだね」
　星一郎は春蕾を軽く揶や揄ゆした。
「こういうのを説教強盗って言うんだろうね」
「まだ何も盗んでないよ」
「宝探しを続行中で説得力はないね」
「それはそれ、これはこれ……って、本当に見つからないねぇ？　どこに隠かくしてるの？」
「それは言えない」
「ほほう？　言えない、ってことは何処どこかにはある、ってことね」
　――鋭するどい。

「ま。あることは分かったから、楽しみは後に取っておきましょうか。それじゃ――」
　ベッドに飛び乗ると、春蕾はぽんぽんとマットレスを叩たたいた。
「それじゃ、寝ましょうか？」
「……床に寝たいと言ってもダメなんだろうね？」
「一応、あたしは脅迫犯だからねぇ」
　星一郎は諦め、電気を消してベッドに横になる。もちろん、春蕾に背を向けてだ。
「おやすみ、星一郎」
　春蕾は素直に就寝の挨あい拶さつをしたが、その後しきりに「はぁ」とか「ううん」とか言いながら、しきりに衣きぬ擦ずれの音を立てた。
「……」
　安っぽい挑発だと分かっているが、妄想が刺し激げきされるのは避さけられなかった。
　白明の薬で幾いく分ぶん抑おさえられていたが、春蕾が飽あきて熟睡するまで、星一郎は多大な精神力で自分自身と闘たたかい続けるのだった。

3

「ああ、朝ごはんも美味しいねぇ。やっぱりお米は日本に限る！」
「……」
　満面の笑みで白米を頬張る春蕾を、ディーナはそれと正反対の憮ぶ然ぜんとした表情で睨にらんだ。刀羽華に至っては言わずもがなだ。
「はい、星一郎。あーん」
　おまけに、春蕾はしきりに星一郎に絡んでは甘ったれた声を垂れ流す。その度に、ディーナと刀羽華の手の中で割り箸が音を立てて折れ砕けた。
「いやーん、怖こわいよぅ、星一郎～」

　春蕾がひらりと星一郎の背後に隠れる。もちろんワザとやっているのだが、高純度の殺気が混じった視線に晒された星一郎が眩まぶしそうに目を細める。
「……分かってやってるんから自分で受け止めて欲しいんだけど？」
「これは星一郎の為にやってるんだよ？　男子たるもの、女の子の嫉妬くらい笑え顔がおで受け止められるようにならなきゃ」
「『偽』って字は『人の為』って書くんだよ。昔の人は上手いこと言うよね？」
「『やらない善より、やる偽善』とも言うよねぇ」
「偽善は認めるんだ？」
「説教強盗だからねぇ」
「説教強盗の自覚もあるんだ？」
「押しかけ女によう房ぼうの自覚もあるけど？」
「自分を客観視するのは難しいね」
「うわぁ、それを星一郎が言う？　鏡持ってきてあげようか？」
　星一郎の皮肉に春蕾が笑顔で返し、春蕾の切り返しを星一郎がかるく打ち返す。
　妙に息の合う掛け合いもディーナを苛立たせる一因だった。
「そいつは破は廉れん恥ちな脅迫犯なのだぞ!?」
　と怒鳴り散らしたかったが、言ったところで面白がらせるだけなのが目に見えているのでぐっと堪えた。
　が、
「でも、そんな星一郎も可愛かわいいねぇ。ちゅっ」
「何をしているかぁあああっ！」
　春蕾が星一郎の頬にキスをするのを見てさすがに声が出てしまう。
　すると春蕾が、『その言葉を待っていた』と言わんばかりのムダにいい笑顔を浮かべる。
「何って、キッスよキッス」
「こ、こ、この破廉恥漢め！　人目のあるところでそんな事を……！」

「えー？　欧おう米べい人じんにはこれくらい挨拶でしょー？」
「乱暴にまとめるな！　それは『日本人はみんなニンジャ』と言っているに等しい暴論だ！」
「なら、イタリア式ってことで」
「チャイニーズがイタリア式などと言い出だすな！」
「あ、そこは訂てい正せい。あたしは台湾の本省人だから」
「どっちでもいい！」
「よくないよ？　これは大事な事なんだから」
「どうでもいい！」
　飄ひょう々ひょうとする春蕾に、ディーナの声がどんどん大きくなる。
　しかも、春蕾がタンクトップのみの上半身をぴったりと星一郎に張り付かせているのが尚の事不快で、苛立ちは指数関数的に増大中であった。
「さっさと離はなれろ！」
「それはちょっと無理だねぇ」
　にんまりと笑うと、春蕾は星一郎の耳を咥くわえ、これ見よがしにもぐもぐと甘噛みした。
「……生温かくて気持ち悪い……」
「むほひひまひゃいウソ言いなさい。ひふふぁひほひひひふへみ実は気持ちいいクセに」
「っ……！」
　あまりの光景に、ディーナは拳こぶしを握にぎってぶるぶると震ふるえ出した。
　これ見よがしに星一郎に絡む春蕾は、星一郎をからかっているのと同じくらいディーナたちもからかっているのだ。自分の優位さを見せつけようと言うのだろう。盗っ人猛々しいというに相応ふさわしい態度である。
　ディーナは無視しようとするのだが、潔けつ癖ぺきな嫌きらいのある性格の彼女はいちいち反応しては歯軋りするばかりであった。

　一方、刀羽華の方は……にこにこと笑っているのが逆に怖い。光を失った底なし沼を思わせる瞳ひとみはまるでガラス球。感情というものがまったく窺うかがえない。
「……ごちそうさま」
　食事を終えた刀羽華はにっこり笑ってリビングを出て行くと、寝室に使っている部屋に引っ込んだ。続いて、何かを殴ったり蹴けったり破ったり砕くだいたりする音が部屋の中から漏もれ出してくるが、彼女の胸中に同情するディーナは聞こえない振りをした。
「うふふっ。刀羽華は可愛いよねぇ」
　星一郎にベッタリくっついたままの春蕾が、悪戯いたずらを成功させた子供そのものな笑みを浮かべる。彼女に舐められた耳を拭きながら、星一郎は苦い顔をして春蕾を睨んだ。
「……いろいろやり過ぎだ」
「悪戯って、やり過ぎなくらいが面白いのよねぇ」
「僕の耳、このところ掃そう除じしてなかったんだけどね」
「……口濯ゆすいでこなきゃ」
　微び妙みような顔になった春蕾が洗面所へ向かうと、星一郎は長々と溜ため息いきを吐ついた。
「はぁ……僕も後で洗わなきゃ……耳の奥おくがぬめぬめする」
「随分と落ち着いているな」
　星一郎の、憤懣やるかたない自分と真逆の冷静な態度に、ディーナはちくりと嫌いや味みを言った。
「もう少し、毅然としたらどうなのだ？　あんな女の言いなりになって!?」
「……」
「？　なんだ？」
　星一郎がじっと無言で見つめてくるので眉まゆを顰ひそめると、彼かれは何故なぜか首を振った。
「……いや、いまは不安定だから……」
「？　何か言ったか？」

「ううん、何も」
　空耳じゃない？　と言う星一郎に若じやつ干かん疑問を覚えたが、彼が朝食の後片付けを始めたので疑問は言葉にならずに霧む散さんした。
　星一郎が、どこか硬かたい動きで片付けをするのを――やはりそれなりにストレスが溜まっているのだろう――眺ながめ、ディーナは食後のお茶を飲まずにリビングを出た。まだ破壊音が漏れる刀羽華の飛び込んだ寝室を通り過ぎ、洗面所に入ると、春蕾は念入りに口を濯いでいた。
「がらがらがら……ぺっ。うーん、妙に甘酸っぱいと思ったけど……これからはちゃんと耳掃除をしてからにしないと」
「またやる気か」
　冷たい声を掛けると、春蕾はくるりと振り向むいた。
「そのつもりだけど……星一郎はあんまり反応してくれないからね。同じ事をしても効果は薄そうだから、やるにしても色々工夫しないとねぇ」
　うむむと唸る春蕾を見て、ディーナは少しだけ胸がすっとした。星一郎の澄まし顔には時々憎らしくなるが、この女の不ふ埒らちな悪戯が空振りに終わる様を見れば、今はとても強い味方に思えてくる。
「けど、ディーナと刀羽華は面白い反応してくれるから、それはそれで有りかな？」
「馴なれ馴なれしく呼ぶな！」
　許しもなくファーストネームを呼ぶ春蕾に敵意をぶつけるが、彼女はまったく気にした様子もなく手をひらひらさせた。
「お固いなぁ。そんなんじゃあ彼氏は出来ないぞぅ？」
「余計なお世話だ！」
「うん、余計なお世話だよね。ディーナは美人さんだから、ほとんどの男はイチコロだろうしねぇ」
　面と向かって美人と言われ、ディーナはわずかに鼻白む。
　どうにもこの春蕾という少女の言葉には陰かげがなく、美人と言っ

たのにも皮肉めいた響ひびきはない。目の前の少女が陰湿な脅迫者なのを忘れてしまうほど、素直な賞賛であった。
「けど――何故か美人ほど厄やつ介かいな男に惚れるんだよねぇ。男なんていっぱい居るのに」
「……何の話だ？」
「それはもちろん、星一郎の事だけど？」
　ぎょっとして、ディーナは思わず洗面所の出入り口を振り返かえってしまう。
「ダイジョブダイジョブ。星一郎には聞こえてないって。まだうるさい音が響いてるしね」
　けらけらと笑う春蕾に、ディーナは自分の迂う闊かつさを呪のろった。
「……星一郎が、何だというのだ？」
「好きなんでしょ？　星一郎が？」
「くだらん！」
　ディーナは鼻息も荒く笑い飛ばした。
「星一郎はわたしの騎き士しで、大事な戦友だ！　なんでも色恋沙汰に絡めるのは、ゲスの勘かんぐりというものだ！」
「そう？　星一郎ってカッコいいじゃん？」
「冗じよう談だん！　あいつはわたしの好みとはまったく合わん！　いつも澄まし顔で何を考えているのか分からないし、他人のあしらい方ばかり上手うまくて！」
「けど星一郎の方はディーナのことが大好きらしいよ？」
「え？」
　ドキリとして呼吸が止まりそうになる。
　――星一郎が？
　――わたしを？
　思わぬ言葉に頬が赤らめかけるが、春蕾がニヤニヤと笑うのを見て、ディーナは別の意味で顔を赤くした。
「貴様……カマかけか!?」

「嘘うそを吐ついたのはそっちが先でしょ？　そんなに分かりやすい顔をしてちゃ……くくく、どんな言い訳もひと目で嘘って分かるよねぇ？」
「……」
「いや、分かるよ。確かに星一郎は涼しい顔をして何を考えているのか今ひとつ分からないけど、一度決めたら絶対にやり遂げるって強い意志があるしね。ギャップ効果ってやつ？　普段は飄々としてるけど、いざとなるとワイルドで熱くて……弱いよねぇ、ああいうの」
　分かる分かるとうんうん頷うなずく春蕾。顔がどんどん険しくなるのを抑えきれず、ディーナは恨うらみがましい瞳で彼女を睨んだ。
「……貴様は……」
「うん？」
「貴様は、何を考えているのだ？」
「何って？」
「仮に……仮に、わたしが星一郎を好きだとしよう」
「仮に、ねぇ？」
「仮に！　わたしが星一郎を好きだとして、それが何だ？　貴様に何の関係があるというのだ!?　脅すネタがまだ足らないか!?」
「いやいやいや。あたしはただ、どっち付かずが良くないと思っただけだよ？」
「……良くない、だと？」
「みんな、もっと素直になってもイイと思うのよねぇ」
「……」
「それこそ、刀羽華くらいに素直に好き好き光線出すくらいで丁度いいでしょ。ツンデレはあたしも食傷気味だしねぇ」
　一体何を言っているんだコイツは、というのがディーナの素直な感想だった。
　奇き襲しゆうに脅迫と卑ひ怯きような手段を散々使っておいて、この少女は今さら何を言っているのか？
　まるで友達の恋コイ話バナに夢中な普通の学生みたいな事を？

　ディーナにはこの花春蕾という少女の思考回路が理解できなかった。
「星一郎にも同じことを言ったけど……あっちもあっちで頑かたくなだしねぇ。ほんとに似た者同士だよ、あんたたち」
「……似た者だと？　わたしと、星一郎が、か？」
　これもまた、ディーナには想像の埒らち外がいの意見だった。
　あまり声を大きくしては言えないが、自分はかなり感情的な性格をしているとディーナは思っている。対して、星一郎はいつも冷静で涼しい顔をしている。まるっきり正反対、水と油だ。
　それが何をどうすれば、自分と彼が似た者同士という事になるのか？
「似てるでしょ？　理由を付けないと感情を実行に移せないところが、さ」
　分からず屋の子供でも眺めるみたいに苦く笑しようし、春蕾はやれやれと肩かたを竦すくめた。
「ディーナはあたしが星一郎に絡むと怒るけど、いつも『不埒』とか『破廉恥』って理由をつけてる。でも、怒るのは本当にそんな理由かな？　そんなのは後付なんじゃないの？」
「……」
「ディーナも星一郎も、感情に理由を探してる。たぶん、二人とも情が深いって知ってるんだろね。一度感情的になったら、それが強すぎてどうなるか分からない。それを知ってるから注意深くなるし……とても怖がりになる。我が慢まん強く、頑なになる」
「……」
「けど、さ。情が深いなら、なおさら内に籠こめずに出してあげた方がイイと思うよ？　情が深いだけに、後悔もきっと根深く残っちゃうだろうからねぇ。後悔で人生が決まっちゃうのは、あんまりよろしく無いでしょ？」
「……余計なお世話だ」
　否定の言葉は、ディーナの意図したものより遥はるかに弱々しいも

のだった。
「ま、平へい凡ぼんな言葉になっちゃうけど、後悔だけはしないようにね。なんと言ったって、いまは『夜宴』の――戦いの真っ最中なんだから、ね」
　そう言って、春蕾は洗面所を出て行く。
　敵の筈の少女の背中を、ディーナは無言で見送った。

　この直すぐ後、マリオンとベルナデットとの『夜宴』が明後日あさつての夜に決められた。

四章　　狂乱　ト　共演

1

　深夜の新京都は、昼間と打って変わって静かになる。特に『摩天の夜宴バビロン・ナイト』が開始されてからは、その傾向が顕けん著ちよであった。
　市内各所の再現史し跡せきの人ひと避よけの結界のせいもあるが、何よりも集った〈聖楔者ヒエロス〉たちの放つ気配のせいだ。神秘の陰が濃こくなった新京都は、さながら平安の都がそうであったように、夜は魑ち魅み魍もう魎りようの百ひやつ鬼き夜や行こうを恐れるように息を潜ひそめていた。
　そんな静かな新京都の建物の陰かげから陰へ、二つの獣けものが音もなく移動していた。
　ひとつは、鋭利な鬼気を撒き散らす巨きよ狼ろう。
　いまひとつは、端たん然ぜんたる威い厳げんを纏まとった獅し子し。
　獣たちはそれぞれの背に小さな人ひと影かげを乗せている。
　巨狼の随ずい獣じゆう〈ジェウォーダン〉の背にはマリオン・ルシェールが。
　獅子の随獣〈リオン〉の背にはベルナデット・リエーヴルが。
「……」
　ベルナデットは、胸中の不安を紛まぎらわすように〈リオン〉へぎゅっと抱だき着ついていた。
　主の心細さを感じ取った守護獣は、背に乗る少女を労いたわってわずかに速度を落とした。
「どうした、ベル!?」
　巨狼を獅子に寄せ、マリオンがベルナデットに問とい掛かけるが、いささか語気が荒く、脅しているように聞こえてしまう。

ベルナデットはマリオンへ顔を向けると、不安に強こわ張ばった顔になんとか笑みめいた表情を浮うかべた。
「……ううん。なんでもないわ、マリオン」
「しっかりしろよ！　これからあのクソ野郎に引導を渡わたしてやるんだからな！」
「……」
「くくっ……ああ、そうさ……みんなみんな、ブチのめしてやる……〈ジェウォーダン〉と〈リオン〉がいれば、どんな奴やつだって……」
マリオンはくくっと暗い笑えみを見せた。
薔薇ばらの如ごとき熱く甘あまい怒いかりの芳ほう香こうとともに漂う鉄てつ錆さびめいた血の〝ニオイ〟に、ベルナデットは思わず胸を押おさえた。
（……マリオン……どうしちゃったの、マリオン……）
マリオンは、確かに昔から直情的で喧けん嘩かっ早い部分があった。気に入らない大人に噛かみ付ついて、狂犬のように扱われた事もあった。
だが、こんな風に暗く濁にごった、嗜し虐ぎやく的てきな笑みを浮かべたことなどなかった。
マリオンが怒りっぽいのは、臆おく病びようさの裏返しだ。薔薇の蕾つぼみは柔らかく傷付きやすいから、鋭い棘とげで自らを守るのだ。マリオンの芯にある柔らかく傷付きやすい優やさしさを、ベルナデットは〝ニオイ〟で、そして長い付き合いでよく知っていた。
なのに、この新京都に来てからというもの、マリオンはどんどん刺とげ々とげしく、攻こう撃げき的てきになっていった。
（……誰か……）
才能を見み出いだされて『摩天の夜宴』に送り出された時は不安で堪らなかった。それでも新京都にやって来たのは、これから先の生活の保護という餌えさ以上に、親友が側そばに居てくれる心強さがあったればこそだ。

だが、その親友はまるで血に酔ったみたいに酷ひどい〝ニオイ〟を発するようになった。

しかも最近では、自分に向けられる嫌な〝ニオイ〟を複数嗅かぎ取とっていた。それも、これまでに向けられてきた嫌悪とはまったく違ちがう、強烈な殺意の危険な〝ニオイ〟だった。

見知らぬ地、見知らぬ親友、見知らぬ〝ニオイ〟……ベルナデットは孤独に震えていた。唯ゆいーいつの味方である〈リオン〉にしがみつくが、不安も孤独も去ってはくれない。鋭敏な感覚を持つベルナデットには、自分とその随獣では決定的な解決が出来ないのだと感じ取れてしまうのだ。単純な戦せん闘とう力りよくでは、いまの自分たちを取り巻く〝ニオイ〟は去ってはくれない。

（……誰か……助けて……マリオンを、助けて……）

不安に震えるベルナデットを乗せた〈リオン〉は、やがて今こ宵よいの『夜宴』の舞ぶ台たいへと到着してしまった。

再現史跡、平安神宮。

実体幻げん像ぞうで造られた外拝殿の緑りよく釉ゆう瓦がわらを飛び越え、二体の随獣は砂じや利りを踏ふみしめて着地した。其そ処こにはすでに三人の人影が待ち構えていた。

「セ――」

「今夜こそブチ殺してやる！」

思わず星せいーいち郎ろうに呼よび掛けようとしたベルナデットより早く、マリオンが歯を剥むいて三人を威い嚇かくした。

威嚇された星一郎は、獣のように唸るマリオンへ冷ややかな視線を向ける。

「……いい加減、その汚い言葉遣いを直してあげないとね」

「ホザケ！　腐くさった変態野郎が人並みな言葉を言うな！」

「……これじゃ、子供の躾しつけじゃなくて、動物の調教だな」

「キサマァ！」

星一郎の分かりやすい挑ちよう発はつに、マリオンは声を荒らげて気き炎えんを吐いた。

その様子を見て、ベルナデットは眼めを瞬かせた。
（セイ……兄様……なんで？）
星一郎からは、やっぱり生命力にあふれた〝ニオイ〟がする。他人を悪あし様ざまに言う時に放たれる嫌な〝ニオイ〟は、まったくなかった。彼の言葉に心が籠もっていないのを、ベルナデットはすぐに嗅ぎ取っていた。
（兄様……？）
まじまじと星一郎を見つめていると、彼がちらりとベルナデットに視線を向けた。
力強く、透明な視線だ。
いつも〝ニオイ〟で判断してきたベルナデットだが、その瞳に籠められたものを読み取るのはとても容易だった。
――任せておけ。
それはすべてを請うけ負おって守り切るという、強い意志に裏打ちされた瞳であった。
「……」
星一郎の視線が、ベルナデットの視線と絡み合ったのは一いつ瞬しゆんにも満たない僅わずかな時間だった。けれどその僅かな時間で、さっきまで不安ばかりだったベルナデットの心に、勇気の芽が顔を出していた。
「……」
ベルナデットは小さく頷いた。
マリオンはベルナデットのすぐ隣に立っていたが、彼女と星一郎のやり取りに気付く様子もなく、ひたすら顔を歪ゆがめて気炎を吐いていた。
「三人だけか!?　矢を射掛けてきたクソ射撃手はどこだ!?」
「それを素直に言ったら、変態野郎って言葉を撤回してくれる？」
「するか！」
「なら、自分で捜さがすんだね」
「ああ、そうかよ！」

　マリオンの怒声に呼応し、巨狼が早くも牙きばを剥いて唸うなり声ごえを漏らす。
「なら、追い立てて駆り立てて、噛み千切ってやるぁ!!」
『ギャルォォォオオオオオオ――――――ッッッ!!』
　仕切り直しの『夜宴』が、巨狼の咆ほう哮こうとともに再開された。

2

「星一郎!?　何故あんな挑発を？」
　権能武装を顕けん現げんさせたディーナが、似合わぬ挑発を繰り返した星一郎に問い掛けた。
　今回、星一郎はマリオンとベルナデットとの『夜宴』の申し込みや場所の設定、相手との受け答えまでを一いつ切さい引き受けていた。これまでは『餅は餅屋』だとディーナに任せていたのと打って変わった状じよう況きようである。
　刀と羽う華かも疑問に思っていたが、星一郎は「後で説明する」とだけしか言わなかった。
　そして、今も、
「後で説明する！　それよりも、今は！」
　飛び出してきた巨狼に、星一郎が白砂利を蹴散らして挑みかかってゆく。すでにその肌はだには楔形の刻印が浮かび、凝ぎよう縮しゆくされた畏光メランムを纏っている。
　――ギィィイイイイイイッッ！
　星一郎の拳と巨狼の身体が激突し、極彩色の火花と異音が平安神宮に響き渡る。
　互たがいに弾はじかれ合うと、体勢を立て直した巨狼が牙を剥いて噛み付かんとしてくる。
　畏光の神聖不ふ可か侵しんの守護を犯す牙を躱かわし、星一郎は巨狼に瞬発力で翻弄し始めた。

「何だというのだ！」
「落ち着いて、ディーナ」
　舌打ちするディーナに、刀羽華が静かに大たい剣けんを構えつつ声をかける。
「今は、星くんが言った通りに動いておきましょう」
「……随ずい分ぶんと冷静だな、刀羽華」
　常つね日ひ頃ごろから星一郎のこととなると騒がしい少女の落ち着いた態度に疑念を呈すと、刀羽華は諦てい念ねん混じりの苦笑を返した。
「一度ああいう風に言い出した星くんに何言っても無駄だもの。彼、一度こうと決めたらすごく頑がん固こなの」
「それは知っている」
「不安はあるけれど、今は言われた通りにしておきましょう」
「……しょうがないか……」
　迷いつつも、ディーナは事前に星一郎に頼たのまれた通りの行動に移った。即すなわち――
「『真しん剣けんに戦っている振ふりをしておけ』か……難しい注文をしてくれる！」
　前回の戦いを模も倣ほうするように、巨狼と星一郎を迂う回かいして、ディーナと刀羽華はマリオンとベルナデットへと向かった。
　無論、子供たちの前には獅子の随獣〈リオン〉が城じよう壁へきの如く睨みを利かせている。
『――轟ごうッ！』
　獅子の咆哮が純じゆん粋すいな振しん動どう波はとなって襲おそい掛かる。
　弾かれたようにふた手に分かれて咆哮を躱かわすと、刀羽華は随ずい騎きのトリフネを召しよう喚かんして空中へ飛翔し、ディーナは〈ブリューナク〉に雷かみなりを纏わせて突撃する。
　ひゅんっ！
　獅子の尾おが分割しながら伸しん長ちようし、鋭い鞭むち剣けんと

なって振るわれる。虹にじ色いろの火花を散らして獅子の尾を弾き、ディーナは口の中で悪態を吐はいた。
「振り、か……最大火力の〈輝ける神槍〉を放てばいくらか有利になるのだがな！」
　前回の戦せん闘とうで、個体戦闘能力に秀ひいでた随獣には、初撃で間かん髪はつ容いれずに最大火力を叩き込むのが有効だと分かっている。下手に白兵戦闘を長引かせるのは得策ではない。
「こうしてる間にも、あの女が何処からか狙ねらっているというのに……！」
　あの脅迫犯に背中を撃たれる可能性も考えれば、そうそう隙を見せてもいられない。短期決戦が望ましいのは、星一郎も当然分かっている筈はずだ。
「どういう意図が……っ!?」
　獅子の尾を躱していると、背後で産毛を逆立たせる悪お寒かんを伴う、不吉な咆哮が響き渡った。

　首を噛み千切らんと迫せまる随獣〈ジェウォーダン〉の牙を躱し、星一郎はお返しとばかりに拳を巨狼の胴どうに叩き込んだ。
　――ギィィィィイイイイイイイイイッッ!!
　畏光の護まもりがぶつかり合って互いが弾かれる。だが、すぐに体勢を整える星一郎と違い、巨狼はわずかに足元をふらつかせた。
「瞬しゆん間かん的な攻こう撃げき力は、こっちが上か……」
　神格を直接その身に宿した星一郎は、〈聖楔者〉と神格の間の経路パスの出力上限がそもそも存在しない。神格から発せられる神性の加護は最大限発揮できる。
　だが、その見返りというべきか、最大出力の持続時間はさほどではない。
　神格も、畏光の恩おん恵けいを無制限に供給できるワケではないのだ。

故ゆえに、戦いの長期化は望ましくはない。
「あっちが、その辺りを冷静に判断したらそれで終わりだけど……」
だが、その心配は必要なさそうだった。
体勢を立て直した巨狼が、憎にく々にくしい眼光を放つとともに、天高く雄お叫たけびを上げた。
『ギャルォォォォオオオ

に牙を噛み鳴らしているのが目に入った。
　だがその視界も、新たな猫の津つ波なみによって隠されてしまう。
「く、う……」
　口にすれば笑い話のようだが、野良猫たちの狂騒スタンピードはかなり厄介だった。巨狼の咆哮によって狂乱した小動物はキリがなく、畏光の加護で傷付くことはないのだが、対応が追いつかない。
　そうして出来た僅かな隙を、巨狼と、今は姿を隠かくした脅迫犯が虎こ視し眈たん々たんと狙っている。
「……さ、て……彼かの女じよはどこで狙っているのや、らっ！」
　迫ってくる巨狼の牙を勘で躱しながら、星一郎はぼやきとも悪態ともつかない呟つぶやきを漏らした。

「あー……ニャンコ派もドン引きだねぇ、あれは」
　動きやすさと趣しゆ味みで改造されたチャイナ服もどきを着て、春しゆん蕾らいは猫の海になった平安神宮を見下ろして渋い顔をした。
　現在彼女が陣じん取どっているのは、平安神宮のシンボルにもなっている大鳥居の上だった。これもまた実体幻像であるが、十分に彼女の体重を支えている。
「おーおー、みんな頑張ってるねぇ……ぐっ」
　首元に呪じゆ印いんが浮かび、春蕾は苦しげに呻うめいた。
『……いつまで呑のん気きにしている。早く始末をつけろ』
　呪印はさらに明滅し、骨伝導のように春蕾だけに声を伝える。
「へいへい……分かりましたよ」
　未だ微弱に明滅する呪印に、春蕾は皮肉げに唇くちびるを歪め、〈第二書版〉を手に立ち上がった。
「……〝神デインギルの威い光こうよ！　神の門バベルの鍵かぎよ！　原型なる神話を刻みし《天命の書版トウプシマテイ》よ！　太母を射抜きし《屠と龍りゆうの神しん弓きゆうバン》よ！　花か春蕾が其その末まつ裔えいたる〈天てん狼ろう星せい〉の輝きを以もつて

訴うつたえ奉たてまつる！　天頂に在りて地を見通す蒼あおき瞳よ！　我わが矢に森羅万象を射抜く加護を与え給たまえ!!〟」

春蕾の〈第二書版〉が変形を開始する。

すぐに春蕾の左ひだり腕うでには、巨きよ大だいな弓――権能武装〈天狼〉が顕現した。

夜空で一際強い蒼い輝きを放つシリウスは、バビロニア時代から重要な星とされてきた。英語では『犬の星ドツグ・スター』と呼ばれるし、ギリシャ神話における『おおいぬ座』は弓の名手オリオンの猟犬であった。そして創世叙事詩『エヌマ・エリシュ』においては、《太たい母ぼ竜りゆうティアマト》の心臓を射い抜ぬいた《屠龍の神弓バン》が、天頂に奉納されて構築されたのがシリウスであるとされる。

シリウスはいつの世も、弓と狩かりを象しよう徴ちようする星として、一際明るく君臨してきた。

花春蕾の手にする大弓型の権能武装〈天狼〉は、放たれる攻撃に必中の加護を与あたえる、遠えん距きよ離り攻こう撃げきに特化した武装として顕現していた。

「星の力を秘めし鍵よ……なんてね」

春蕾は顕現した大弓を軽々と構え、弦げんの張られている場所へ右手を翳かざした。するとリムの両端に光の弦が張られ、その弦を引くや春蕾の右手には魔ま力りよくの矢が自然と形成された。

『……よいか、必ず仕留めろ』

首元の呪印が陰気な響きで要求する。

春蕾はへいへいと頷きながら、平安神宮へ向けていた弓を上空へと向けた。

「――降り撃て、〈天狼〉」

大弓の、しなりというにはあまりにごついリム部がガシャリと音を立てて変形し、ずらりと無数の銃口を露あらわにした。

春蕾が魔力の矢から手を離す。

魔力の矢がリム部へと吸収されると、無数の銃口から雨あめ霰あられと夥おびただしい魔力の矢が上空へと放たれた。地から天へ昇った

無数の流星は、やがて放物線を描えがいて大地へ鏃やじりを向ける。
　文字通り、矢の雨が平安神宮の敷地に雨霰と降り注ぐ。
　夥しい魔力の矢が、狂乱した野良猫に覆おおわれていた敷地をさらに覆い隠していた。
「……よくやった」
　陰気な声が喉のどの呪印からでなく背後から掛かった。
　春蕾が振り向くと、影そのもののような黒尽ずくめの男がゆらりと姿を現した。
「……上空の監視の使い魔まも始末したな？　委員会が確かく認にんに来る前に、手早く神格を回収しろ」

「へいへい」
　春蕾が大鳥居から飛び降りると、黒尽くめの男もそれに続いた。
『夜宴』の舞台に降り注いだ魔力の矢は、役割を終えてその形を崩くずし始めていた。魔力の矢で隠されていた光景を見て、黒尽くめの男が訝しげな声を漏らした。
「……猫が……」
　狂乱していた野良猫たちだが、矢に貫つらぬかれていたものの死んではいなかった。矢が消えるとまん丸に見開いた眼でキョロキョロと周りを見回し、一目散に逃げ出し始めた。
「ニャー！」
「ニャァアアアッ！」
　正気に戻もどった野良猫たちが敷地から去ってゆくと、猫まみれになって隠れていた者たちの姿も露わになる。
　星一郎も、ディーナも、刀羽華も、二体の随獣とその主たちも、目立った外傷もなく立ち上がった。
「……どういう事だ？」
「こういう事」
　言うや、春蕾は男へと〈天狼〉を向けた。
　男はハッとして飛とび退ずさるが、春蕾は構わずに魔力の矢を矢継ぎ早に撃ち放った。敷地外へ飛び出してゆく矢を見送り、男はギリッと歯を鳴らした。春蕾の矢が飛んでいったのは、すべて男の仲間たちが潜ひそんでいる方角だった。
「……どういうつもりだ、花春蕾!?」
「いい加減、うんざりだったのよねぇ」
「キサマ……家族がどうなっても良いのか!?」
「その家族があたしに言ったのよねぇ。『我慢できなくなったら好きにしろ』って。で、あたしもいよいよ我慢の限界だったってワケ」
「この……外地の劣等民族め！」
「その外地に頼らなきゃ〈聖楔者〉を確保できないのはどちら様かしらね？　中華人民軍魔ま導どう連隊所属の虎フー少佐？」

春蕾が声高々に呼び掛けると、男――虎は顔を歪めた。
「だいたい、王が変わる度に書物を燃やして回る野や蛮ばん人じんから、大切な書版おたからを抱かかえて外へ逃げてくのは当然でしょうが。おまけに文化大革命で、どれだけの道士と術師が台湾に逃げたと思っているのさ？　全部自じ業ごう自じ得とくでしょ」
春蕾はこれまでの鬱うつ憤ぷんを晴らすように、心底馬ば鹿かにした口調を虎に浴びせた。
魔導工学全盛の時代にあって、中国は魔導後進国として日本や欧州の後こう塵じんを拝していた。その理由はいま春蕾が言ったように、歴代王朝の革命政策と、近代の共産主義の名の下に行われた締め付けが原因であった。
共産化の名の下に行われた宗教や伝承の弾だん圧あつにより、近世において多くの古典魔ま術じゆつ師しが中国本土から脱だつ出しゆつしていた。おかげでこの四半世紀の魔導工学の発展に、中国は極きよく端たんなリソース不足となっていた。
それは、歴史の陰で受うけ継つがれてきた《天命の書版》の欠片かけらも同じだった。
中国本土で神格の確保が出来なかったかの国は、彼かれらが外地と呼ぶ台湾などに現れた〈聖楔者〉を強制的に自分たちの支配下に置き、特とく殊しゆ部隊と共に新京都に送り込んだ。
自分たちの息の掛かった者を『摩天の夜宴』の勝者とし、今後百年の世界におけるアドバンテージを得る為ために。
強欲といえばそれまでだが、カルディア委員会に真向から喧嘩を売る『本土』のやり方に、春蕾は渇かわいた笑いが止まらなかった。
「ああ、もうアンタたちの動きはカルディア委員会に伝わってるから――だよね、星一郎？」
「昨日の内にね」
春蕾に話を振られ、星一郎はごく当然のごとく頷いた。
「キサマ……いつの間にリークを!?」
「そんな事してないって。それは、ずっとあたしを監視してたあんた

が一番良く知ってるでしょ？　あ、そうだ――」
　春蕾は首元に手を伸のばすと、畏光を放って首に巻き付く呪印を一呼吸の間もなく無効化した。遍あまねく魔力を支配する神性の担にない手てたる〈聖楔者〉には容易なことだった。
「ああ、すっきりした……あたしもさ、なるべくなら博打ばくちは打ちたくなかったのよ。家族が『気にするな』って言っても、やっぱ心配だしね。だから、こそこそと神格を集めるだけなら我慢しても良かったけど……あんな小さな女の子を殺せとか、あたしもさすがに堪かん忍にん袋ぶくろの緒が切れるってもんよ」
　ちらりとベルナデットを見やり、春蕾は肩を竦めた。
「とはいえ、あたしは監視されてるから、自分で直接委員会に陳情できないからね。だから、ずっと待ってたのさ。あたしの何気ない言葉から背後関係を察してくれる、勘のいい協力者を、ね」
　春蕾はぱちりと星一郎にウインクした。
　星一郎は肩を竦める。
「あれで察しろなんて、無む茶ちやぶりもいい所だ」
「けど、ちゃんと気付いてくれたでしょ？　あ、そうだ。あたしの『人生で使ってみたいセリフ』を今こそ開帳する時かな――――なんで分かった？　どこが怪あやしいと思った？」
「『夜宴』の次の日の奇襲の時から」と、星一郎は言った。「君には必中の加護があるんだろ？　なのにあんなに外してたら『何か変だ』って気付くよ。確信したのは、君が本省人って強調したところかな？」
「星一郎を選んで正解だったよ」
　春蕾はにっこりと笑った。
　ただカルディア委員会に通報しても、自分に首輪をつけた連中が上手く隠れてしまったらそれまでだ。彼らを『夜宴』の舞台に引きずり出した上で委員会に存在を知らせないと、春蕾の意い趣しゆ返がえしにならない。
　その点、星一郎は春蕾の意図をしっかりと読んで行動してくれた。

巻き込んでしまって恐縮ではあるが、彼にして良かったと春蕾は心底ホッとしていた。
「いやぁ、惚ほれちゃいそうだよ」
「それはどうも」
　星一郎が苦笑を返していると、ディーナが複雑な表情で星一郎へ口を開いた。
「……なんで、わたしに教えてくれなかったのだ？」
「ディーナは隠し事ごとには向かないし……刀羽華は刀羽華でうっかり屋だし」
「星くん、ひどい！」
　星一郎の少女たちへの説明を背中に聞きながら、春蕾は散々自分の首を締め付けてくれた男へ挑発的な笑みを向けた。
「さぁ、覚かく悟ごを決めてもらいましょうか、虎少佐？」
「……小こ娘むすめがっ」
　罵声とともに虎が手を振る。彼の手元から伸びた暗あん器きを弾こうと〈天狼〉を掲かかげると、
　――ギィィイイイイイインッッ!!
「んんっ？」
　虹色の火花と、甲かん高だかい異音が撒まき散ちらされた。
「……何が〈聖楔者〉だ」
　陰いん気きな声で悪態を吐つき、虎は戻ってきた暗器を手に掴つかんだ。一見、それはただの煉れん瓦がのようだったが、うっすらと虹色の光――畏光を纏っている。
「餓が鬼きどもめ……もういい。こうなれば私自身で、すべてを抹消するまで」
　虎がそう宣言すると、彼を覆っていたゆったりとした黒衣が内側から弾け飛び、その下の異様な姿が曝さらされる。
　足元には車輪、手には複数の腕輪、腰こしには鞭むち、他ほかにも様々な武器や道具が身に着けられていた。
「……何故なぜ、私が貴様の監視を命じられていたと思う？　いざと

なれば、私自身が貴様を制圧する為だ。軍で一番の『宝貝パオペエ使い』である、この私がな」
「あー……発掘した遺物のてんこ盛りかぁ」
　まだ世界に魔力が満ち満ちていた時代の強力な呪具や魔道具は、現在の魔導工学で再現できない遺失技術の産物として強力な力を持っている。中には聖人の域にまで達し、神性を付与した宝具も有る。中華世界風に言えば『宝貝』と呼ぶべきか。
　知識を持つ術師たちに嫌きらわれた代わりに、多くの遺物をかき集めていたらしい。
「……魔導化師団に匹ひつ敵てきする宝貝の群れ。いかに〈聖楔者〉でもひとたまりもあるまい」
　陰気な声で、自信ありげに虎が言い放つ。
　たった一つでも現在の魔導工学で再現できない強力な宝貝である。それが両手両足で追いつかないほどに身に着けているとなれば、彼の自信も分からないではなかった。
「ふぅん……？」
「気乗りしないなら、僕ぼくがやってもいいけど？」
「まさか」
　星一郎の提案に、春蕾は好戦的な笑みで答えた。
「これまでの鬱憤があるからねぇ。あたしの楽しみを取らないでよ」
「ほざけ、小娘！」
　虎が手にした煉瓦を投げ放った。
「なた太たい子しの使う金きん磚せん系統の宝貝かな？　けど――」
　――ギィィイイイイイイイイイイイイイイイイイイインンンッッ!!
　春蕾は身み動じろぎもせずに恐おそるべき煉瓦に打たれる。激しい火花と異音の後、哀れにも傷付き崩れたのは、宝貝の方であった。
「何っ？」
「そんなだから、魔導後進国なんて言われるんだよ」
「疾ちっ！」

虎は次に、背に背せ負おったチャクラムに似た輪、乾けん坤こん圏けんを投げはなった。

これも春蕾は躱す素そ振ぶりもなく受け止め、乾坤圏は敢あえ無なく砕けた。

「な、ぁ……」

「確かに、その宝貝には神性が籠められてる。強力な武器だろうさ。けど――」

「っ！　疾っ！　疾――――っ！」

立ち尽つくす春蕾に、次々に宝貝が投げ放たれる。

鞭、炎ほのお、槍、光、鎖……どれも淡あわい虹色の畏光を帯びていたが、春蕾の身体に触ふれるやいなや、泥どろ団だん子ごのようにぼろぼろと崩れてしまう。

「あたしが我が慢まんしてたから、勘かん違ちがいしちゃったみたいだね？〈聖楔者〉に対たい抗こうできるのは〈聖楔者〉だけ……忘れちゃってた？」

焦りと恐きよう怖ふが募つのってゆく虎の顔を見て、春蕾はこれ見よがしに冷笑してやった。

「外地の劣等民族に見下される気分は？　本土中央のエリート殿？」

「キサマァァアアッ！」

「はいはい。それじゃそろそろお仕置きタイムに――」

「避よけろ、春蕾！」

切せつ羽ぱ詰つまった声を聞いた瞬間、春蕾はその場をすぐに飛とび退のいた。

一瞬前まで彼女が立っていた場所に鋭するどい爪が振り下ろされ、彼女が飛び退いたのに気付くや鋭い牙を剥いてきた。

「こい、つ――！」

突如襲い掛かってきた巨狼を〈天狼〉で殴なぐりつけて躱した春蕾だが、至近の巨狼が放つ野放図で禍々しい殺気、狂気に口角が引ひき攣つった。

「マリオン!?　何をして――」

「うるせぇ！」
　巨狼をけしかけたマリオンが、ベルナデットに興奮した怒声を浴びせ返していた。
「あいつがこの前矢を射かけたんだろうが!?　だったらあいつも敵だ！　あの変態野や郎ろうも、あの弓女も、どいつもこいつも敵だ！」
「落ち着いて、マリオン……セイ兄様は敵じゃ……」
「敵だ！　全部敵だ！　ベル、お前を守ってやれるのはオレだけなんだ！　お前はオレが守ってやる！　敵を全部、ぜんぶ……ゼンブぶっ殺して！」
「マ、マリオン……」
　小さい身体に似合わぬ怒声を放つマリオンに、この場の誰だれもが唖然として見入っていた。
　マリオンは、まるでとり憑かれたように怒りをぶち撒け、端たん整せいな顔は凶悪に歪んでいた。
　異様な気配に――いや、異様だからこそ、優れた霊れい的てき感覚を持つ〈聖楔者〉たちはマリオンに見入っていたのだ。
　――だからそれに気付かぬ者は、この状況を好機と捉えた。
「疾ッ！」
　追い詰められていた虎が、注意を逸らした〈聖楔者〉たちに、残った宝貝をありったけ撃ち放った。
　春蕾も、星一郎たちも、その行こう為いにさしたる何かを見出だせなかった。彼を放ってマリオンに見入っていたのは、彼の持つ宝貝の神気程度では自分たちを傷付けることが出来ないからだった。
　事実、いくつも飛来した様々な宝貝は、〈聖楔者〉たちが権能武装を振るう必要もなく触れた瞬間に崩れ落ちた。
　――が、
「マリオン！」
　独自の嗅きゆう覚かくでこの場の誰よりも早く虎の愚ぐ行こうに気付いたベルナデットが、マリオンを庇って飛び出した。

――ギィ――――――ィィィィイイイイインンッッ!!
「あうっ……!!」
宝貝は崩れたが、ベルナデットの小さな身体も大きく吹ふき飛ばされた。
随ずい獣じゆう使いである彼女はこの場の誰よりも低出力の畏光しか纏まとっていなかった。宝貝に籠められた神気と彼女の畏光が相そう殺さいし合い、その破壊力が護りを突破してベルナデットを打ち据すえる。
「ベルっ!?」
星一郎が飛び出し、地面を転がるベルナデットに駆かけ寄よった。
「この野郎！」
口くち汚ぎたなく罵り、春蕾は虎に近づき苦もなく無力化した。
「くそ……本当にロクな事しねぇな！」
地面に倒たおれ伏す虎に悪態を吐く。
勘違いした馬鹿が悪いのか、勘違いさせた馬鹿が悪いのか……邪魔が入ったとはいえ、春蕾はさっさと片付けなかったことを今更ながらに後悔した。
……が。
「あ……？」
吹き飛ばされ、地に伏したまま動かなくなったベルナデットを見て、マリオンが呆ほうけた声を漏もらした。
「あ、ぅう……べ、ベル……？」
呆けた声は徐じよ々じよに震ふるえを帯び、真夏にもかかわらず、マリオンは裸はだかで真冬の空気に晒さらされたみたいに激しく身体を震わせはじめた。
「あ、あ、あ……ベル……オレ……オレ、お前を守って……だから全部、ぜんぶ……あ、う、あ……」
マリオンの言葉が意味を失い、声からも理性が掠かすれてゆく。表情を失った顔の中、大きな瞳ひとみの瞳どう孔こうがきゅうと引き絞られる。

「あ、あ、あぁっぁあああああああああああああぐぎゅるぅぅううううううるぁあぁあああああああああぁぁぁぁぁぁおおおおおおオオオォォォオオ――――――ッッ!!」

およそ人間が、子供の声帯が発せられるものではない。

混乱し、錯さく乱らんし、狂きよう乱らんした精神が、目の前の現実を否定する理性なき怒いかりが、華きや奢しやな身体を破裂させんとばかりに響ひびき渡る。

同時に。

『ギュルォォォオオオオオオオォォォオオオオオオォォォオオオオオォォォぉぉぉおおおおるぅぅぅぅぅあああああああああ――――――っっ!!』

およそ人工の、魔ま術じゆつと機械の仕掛かけで駆動する巨きよ狼ろうとは思えぬ生々しい咆哮だった。

昏くらくドス黒い邪悪な悦よろこびに震える精神が、幼き魂たましいの叫びを言こと祝ほぐように甲高い咆哮を解き放つ。

巨狼は、鋭い牙も露わに愉悦ニタリと嗤わらい、発狂したように泣き叫ぶマリオンの元に跳ちよう躍やくした。そして、髪かみを振り乱す自らの主に向かい、後ろ脚で立ち上がると、

「――え……」

巨狼の腹が裂け、その巨大な腹の口が「ばくり」とマリオンを飲み込んだ。

あまりのことに〈聖楔者〉たちも言葉を忘れ呆ぼう然ぜんと眺ながめる以外の行動を忘れた。

〝――――――旨シ。怯エ、震エ、怒リ、乱レシ魂。甘かん露ろ也なり！〟

空気ではない。

魔力を震わす重々しい念話が響くと同時に、巨狼はさらなる変へん貌ぼうを開始した。

事態の異様な変化の連続に、春蕾は顔を歪めて息苦しそうに呻く。

「……なんてこった……」

春蕾の後悔は、まだ始まったばかりだった。

3

倒れたまま動かないベルナデットの元に駆け寄った星一郎は、すぐに彼女を仰向けにしてその呼吸と鼓動を確認した。擦り傷のような小さなものを除けばダメージもほとんどなく、衝撃で気絶しただけのようだ。

直すぐ側で主を気遣う獅し子しに、星一郎は安心させるように頷うなずいた。

「ベルは大だい丈じよう夫ぶだ……けど……」

顔を上げた星一郎の視線の先には、立ち上がった巨狼が剣けん呑のんな気配を発している。

マリオンを飲み込んだ巨狼は、機械仕掛けの身体を歪ませてその姿を変えていった。

地を駆けるための四し肢しは、前まえ肢あしがミシミシとその太さを増して力強い肩かたを形作り、鋭い爪はそのままに指が伸びて霊れい長類の如き『手』となる。後肢は、腰と股の可動域が完全に二足歩行のものへと移り変わり、その巨きよ体たいを二本の『足』でがっしりと支えた。

やがて、巨狼は古今東西においてもっとも有名な魔ま物ものの姿を月下に晒した。吸きゆう血け鬼つきと双璧をなす、夜の闇やみとともに畏おそれられたおぞましき化け生しよう。

人じん狼ろう。

ウェアウルフ、ルー・ガルー、あるいは狂戦士ベルセルクと呼ばれる、狂気の化身。

マリオンを取り込んだ巨狼は、全長二メートルを超こえる巨きよ躯くの人狼へと変化した。

「う、ぅん……あ……セイ、兄様……？」

「ベル？」

眼めを覚ましたベルを見下ろすと、彼女はすぐに星一郎に抱だき着ついてぶるぶると震えはじめた。彼女の瞳は、巨躯の人狼を慄きとともに見つめていた。

ベルナデットの視線に気付いたのか？

人狼が、太い首を巡めぐらしてベルナデットへと双そう眸ぼうを向けた。

ベルナデットとともにその瞳を真正面から目まの当あたりにした星一郎は、ぎょっと声を漏らしそうになった。

人狼の向ける瞳には、理性の光があった。

冷たく、鋭い、危険な理性の光が。

〝……ソナタニ感謝シヨウ、ベルナデット・リエーヴル。獅子ノ担イ手ヨ。ソナタノ存在ガ、マリオン・ルシェールヲ最上ノ供物ニ仕立テアゲタ〟

周囲の実体幻げん像ぞうさえ震わす高出力の念話が、びりびりとこの場全員の意識を震わせた。

〝ソナタヲ守ロウト思エバコソ、マリオン・ルシェールハ我ノモタラス怒リヲ受ケ入レタ。強キ想イコソ、芳かぐわワシキ狂乱ノ揺よう籃らんナレバ〟

「……あなたは、誰……？　いえ……あなたは『何』、なの？」

ベルナデットの怯おびえた問い掛けに、人狼はニタリと牙きばを剥むいた。

〝我ハ《狂くるえる巨狼ウルディンム》！　狂気ヲ撒クモノ！　狂乱ヘ誘ウモノ！　森羅万象ヲ狂奔ニ駆リ立テルモノ！　我ガ妣ははガ定メ、汝なんじラガ望ンダガ故ニ!!〟

巨狼〈ジェウォーダン〉……否、《狂える巨狼ウルディンム》が咆ほう哮こうした。

「ぐっ……！」

ベルナデットを取り落としそうになり、星一郎は何とか膝ひざを突いて崩れそうになる身体を支えた。

「セイ兄様!?」

心配するベルナデットに返事する余よ裕ゆうもなく、星一郎はぎりぎりと奥おく歯を噛かみ締めた。

自分の内側の凶暴性を引きずり出そうとする巨狼の咆哮。気を抜けば理性も感情も吹き飛ばしそうな巨大な獣じゆう性せいに、星一郎は必死に堪えねばならなかった。

「星一郎！」

誰の警告だったのか。

気付けば、人狼が目の前に立っていた。

「きゃあっ!?」

獅子が受け取ってくれることを信じてベルナデットを投げ放った直後、人狼ががしりと星一郎の身体を掴んだ。

「ぐっ……」

〝感ジルゾ、ソナタノ裡うちノ獣ヲ……渦うず巻ク混沌ヲ……〟

とかく社会では理性が重要視されるが、理性が必ずしも善なるものでない事を、人狼の瞳が無言の内に、しかも雄弁に語っていた。

〝我ハ《狂える巨狼ウルデインム》！　妣ガ定メ人間アメールガ望ンダガ故ニ、我ハ世界ヲ狂気デ満タサン！〟

ぐばりと顎あごが開かれ、星一郎の肩に牙が突つき立てられる。

「が、あ……ぁぁぁあああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁあああああああああアアアアアアアアァァァァアアアアァァ————————————————————ッッッ!!」

「星一郎!?」

自分の知らないところでこそこそ動かれた不満はあるが、春蕾を縛っていた真の卑ひ怯きよう者が炙あぶり出だされてこれで一段落か……そんな風に思ったディーナであったが、事態は誰も想像の出来ない方向へと急転直下で転がり落ちていった。

「ガァァァァアアアアアルォォオオオ

　随獣である巨狼が、主であるはずの〈聖楔者〉の少年を取り込むと、伝承にある人狼の如き姿となり、自らを《狂える巨狼ウルディンム》と名乗った。
　神格に選ばれた〈聖楔者〉などと言っても、ディーナや他の術者たちも、『神の意識』などというものを信じている者など一人もいない。神というものは『力』だ。魔力を制御する巨大な『力』。巨大な『力』が、『神話』という物語プログラムによって架空の人格を与えられたもの――それが魔術師たちの認識する『神格』だ。
　神格の器である《天命の書版》に選ばれたのは、意識ある霊れい魂こんに選ばれたのではなく、鍵が鍵穴に反応したにすぎない――筈だった。
「ギ、イ、ルゥゥウウウウウアアアアアアア――――ッ！」
　いや、いまはそれよりも星一郎のことだ。
　狼男に噛まれた人間は狼男になる――そんな迷信が現実になったかのように、星一郎までが変身を始めていた。
「ガァァァアァグルォォォオオオオオオオッ！」
　黒くろ髪かみが恐ろしい速度で伸び、振ふり乱された挑ちよう発はつが身体に絡からまって毛皮を被かぶったかのようだった。手の爪が鉤かぎ爪づめめいた長さになり、足もスニーカーを突き破った爪が地面に突き刺さらんばかりだ。
　そして、黒髪の間から垣かい間ま見みえる双眸は、ギラギラと赤く輝かがやいている。
　人とは思えない。
　もはや一匹の獣と化した星一郎が、人狼の束縛を解かれ、ゆらりと身体を傾がせた。
「星くん！」
　我に返った刀羽華が駆け寄ろうとするが、その足はすぐに止まる。
　よろめいたと思われた星一郎が、へばりついていたスニーカの残骸を弾け飛ばす勢いで跳躍し、恐ろしい速さで刀羽華に襲おそいかかった。

「星くんっ!?」
　とっさに掲げた大たい剣けんによって振り抜かれた拳こぶしが防がれるが、そこから撒き散らされる火花と異音は完全に本気の畏光のぶつかり合いだった。
　獣と化した星一郎は、本気で刀羽華に攻こう撃げきを加えたのだ。
「ほ、星く――」
「ガルォォオオオオオオォォァァァアアアアアアッ！」
　刀羽華の呼びかけに、獣は狂った咆哮で応えた。
　不吉な赫かつ々かくとした眼光を灯し、狂乱した星一郎は矢継ぎ早に眼前の幼おさな馴な染じみへ攻撃を仕掛ける。
　自身に襲い掛かる星一郎に、刀羽華は反はん撃げきするのを躊躇ためらって防ぼう御ぎよするばかりだ。
「星くん！　しっかりし――」
　そして、防御に徹してどうにかなるほど、星一郎の身体能力は生易しくない。いや、あらゆる枷かせが外されたように遮二無二襲い掛かる今の星一郎は、彼女の知る動きを容易たやすく上回った。
　腕を振るう慣性を力づくで押おし留とどめるや、星一郎は爆ばく発はつしたような踏ふみ込みで刀羽華の背後に回り込んだ。力任せのフェントに、刀羽華の反応が一いつ瞬しゆん遅れる。
　――ギィィイイイイイイイイ――――ィィィイイイイイイインンッッ！
「きゃ、あ――」
　刀羽華の畏光が弾け飛び、強力な衝しよう撃げきを受けて吹っ飛ぶ。それでも何とか自分から飛んで素す早ばやく受け身を取って起き上がろうとするが、すでに彼女の至近には腕を振り上あげた獣がいた。
「星く――」
「やめろ、星一郎――っ！」
　すんでのところで、ディーナのフォローが間に合った。
　大おお槍やりに攻撃を防がれた星一郎は苛立たしげな唸うなりを残

して大きく飛び退いた。
「大だい丈じよう夫ぶか、刀羽華!?」
「え、ええ……私は、だいじょうぶ……」
　身体のダメージよりも精神的なショックからよろめく刀羽華。その背後に、いつの間にか人狼が迫せまっていた。
「刀羽――」
「だっしゃぁぁあああああああっ！」
　噛みつかんとしていた《ウルディンム》だが、大弓を鈍器として振り回して突とつ進しんしてきた春蕾に邪魔されて距きよ離りを取った。春蕾は必中の射撃による弾幕で追つい撃げきするが、鋭い爪つめによって迎げい撃げきされる。
「ちぃ……弾幕はパワーじゃなかったの!?」
「花、春蕾……」
「言いたい事は色々あるだろうけど、いまは目の前のあれこれだよ！」
　人狼へ弓を向けつつ、春蕾は口惜しげに言った。
「……巻き込んで悪いと思ってる……挙句に星一郎まであんなになって……これが終わったら、出来る限りのフォローをする」
「……終わったら、な……」
　ディーナは〈ブリューナク〉を構え直して皮肉げに呟いた。彼かの女じよの槍が向けられる先には、獣のように四つん這いになって隙すきを窺うかがう星一郎がいる。
「……前門の星一郎、後門の人狼、か……」
「それ、笑えないねぇ……」
　強烈な危機を放ちながら屹きつ立りつする人狼を睨にらみ、春蕾が乾かわいた笑いを漏らした。
　なんとかショックから立ち直った刀羽華が、ディーナの横に立って緊きん張ちようの面持ちで耳打ちした。
「ディーナ……」
「いまは信じるしかあるまい。手は多いに越したことはないから

な……」
「それはそうだけど……星くんは……」
「殴って正気に戻るのなら話は楽なのだが……」
　唸りながら飛び掛かる隙を窺う星一郎を見て、ディーナは苦々しい顔になる。
　あっさり我を失って情けないと苛立ちながらも、罪悪感めいた感情で心がささくれ立っていた。
「……何とか、取り押さえないことには……」
「ええ……」
「取り押さえられるかなぁ……」
　三人の少女たちは、自然と背を合わせて二体の獣を警けい戒かいした。
　円を描くように彼女らに飛び掛かる機を窺う星一郎と《ウルディンム》だが、やがて一斉に飛び掛かるべく四肢に力を込めはじめる。
「来るか……！」
　危うい緊張状態。それを崩したのは、ディーナたちでも、獣たちでもなかった。
「マリオンを返、して！」
　獅子の背に乗ったベルナデットが、人狼へ向かって突撃していった。
《ウルディンム》は獅子に気付くや『狂乱の咆哮』を浴びせかけるが、〈リオン〉もまた自身の咆哮でそれに対抗した。
「ギャルォォオオオオオオオッ！」
『グオオオオオオオ――――ッ！』
　人狼と獅子が、爪と牙で互たがいを牽けん制せいする。
　それを見て、春蕾が人狼と巨狼の闘たたかいへと飛び出していく。
「あっちは何とか押し留める！　あんたらは星一郎を！」
　必中の加護で獅子を避さける矢を射かけながら春蕾が言う。
　ディーナと刀羽華は頷き合うと、歯を剥き唸る星一郎へと駆け出した。

「刀羽華！　風で奴やつを拘束できるか!?」
「やってみる！」
　刀羽華はトリフネに飛び乗ると上空へ舞まい上がり、〈クサナギ〉を掲げて風を喚よんだ。
　ディーナはそのまま星一郎に接敵し、時間かせぎの為に打ち掛かった。
「許せ、星一郎！」
　下手な手加減など出来ないと本気で打ち掛かったディーナだが、獣と化した星一郎は彼女の予想を上回った。
　突き込まれた槍の刀身をガチリと歯で咥くわえ込むや、ぐいっとディーナを引き寄せた。
「な――」
　畏光の護まもりがあるとはいえ、あまりの対応にディーナは思考に一瞬の空白を作ってしまう。野人とも獣人ともつかぬ姿になった星一郎は、槍を咥えたまま思い切り首を振った。首筋から背中の筋肉がみちりと音を立て、大地に突き立たてた四肢が一回り近く膨らむ。
　冗じよう談だんみたいな膂りよ力りよくにより、ディーナは大槍ごと投げ飛ばされた。
「ば、かな……！」
　大きく弧こを描えがいて放ほうり出され、ディーナは顔を引き攣らせた。何とか体勢を立て直そうとするが、それよりも早く彼女を追って星一郎が跳躍してくる。
「な――」
「ガァァアアアアアッ！」
　大きく回転しながら振り下ろされた踵かかとを受け止めると、それだけでディーナを守る畏光が砕け散った。加護のないまま地面に叩たたきつけられ、肺の空気が衝撃で押し出される。
「が、はっ……」
　腕うでを振り上げ落下してくる黒い影かげを、喘ぐディーナは絶望的な気分で見上げた。

「ディーナ！」
　刀羽華が慌あわてて喚び寄せた風を星一郎へ放つ。濃のう密みつな風圧が大だい蛇じやのように巻き付き、星一郎を空中に縫い止めた――かに見えた。
「ガルァアアアアアアアアアアッ！」
　全身に楔形の刻印を輝かせ、星一郎が畏光チカラ任せに風の拘束を引き千切る。
「そんなっ!?」
　刀羽華が驚おどろきの声を上げるが、それでもディーナに躱すだけの時間は与あたえていた。
　呼吸を整えて一度距きよ離りを取るディーナだったが、目に入った光景がその足を引き止める。
「……馬鹿な……」
　砂じや利りを蹴散らし着地した星一郎は、さらに拳を大地に振り下ろした。癇かん癪しやくを起こした子供みたいな行動だったが、引き起こされた結果は到底笑えない。
　星一郎の拳を中心に一瞬でヒビ割れが入るや、地面が噴火したように粉ふん塵じんを噴き上げた。
　濃密な土つち煙けむりで、ディーナの視界が茶色に染まる。
「きゃあっ！」
「刀羽華!?」
　土煙は刀羽華の風が僅わずかな時間で吹き散らしたが、その僅かな時間で星一郎は先の先を取っていた。
　土煙に紛まぎれて飛び上がったのだろう。トリフネに手を掛けた星一郎は、力任せに刀羽華の随ずい騎を引き千切った。随騎が魔ま力りよく光に還かん元げんされて霧む散さんし、刀羽華の身体が落下する。
　それでも、刀羽華は風を身に纏って落下を緩和しようとするが、落下地点には着地と同時に跳躍した星一郎が迫っていた。
「くっ！」

ディーナはすぐさま〈ブリューナク〉を三さん叉さ戟げきへと変化させて雷らい撃げきを準備するが、ほんの一瞬だけ間に合わなかった。

刀羽華が地面に接すると同時に、星一郎の振り回した腕が彼女を捉えた。

――ギィィイイイイ――――ィインッッ!!

風の盾たてと畏光の守りを打ち破り、星一郎の攻撃が刀羽華を掠めた。まるでトラックに突っかけられたみたいに刀羽華の身体が地面を転がる。

さらに追撃しようとする星一郎だが、それを許すわけにはいかない。

「穿け、〈輝ける神槍〉！」

紫し電でんが星一郎を打ち据える。刀羽華の畏光とぶつかり合った直後で、わずかだが雷撃が星一郎の防御力を上回った。

異音とともに罅ひびが走った畏光の隙すき間まから電光が侵入し、獣の咆哮が響き渡わたった。

「ガ、ギ、ィグ、ルアァァ……」

身体に獣毛のように絡み付いた髪の毛けが焼き焦げ、煙とともに鼻を突く臭においが漂う。

罪悪感もあって鼻っ面をしかめるディーナだが、星一郎はダメージなどあってないが如く飛び掛かかってくる。

ディーナは今度こそ気絶させようと雷撃を撃ち放つが、星一郎は黒い残像だけを残して電光を回避した。

「冗談じみてるにも程ほどが……！」

発射とほぼ同時に着ちやく弾だんする雷撃を読みだけであんな完かん璧ぺきに躱せるはずがない。獣じみた勘かん――否、獣を超えた第六感の為なせる業だ。

「くっ……来い、ドライグ！」

接近戦では身体能力で圧倒されると、ディーナは随騎を召しよう喚かんしてすぐに距離を取った。

獣の俊敏性でも二輪駆動の乗機にはさすがに追い付くことは出来ず、ディーナは星一郎と距離を取ることに成功する。成功するが、事態の解決には一ミリたりとも近付いていていない。

おまけに、刀羽華が起き上がる気配がない。身動ぎはしているから息はあるのだろうが気絶しているらしい。

「……どうする……？」

刀羽華が起き上がるまで注意を引きつつあしらっておく……そんな風にも考えたが、星一郎の姿を見るとすぐに却下する。

あんな……あんな星一郎の姿は許せない。

我を失って獣同然に猛たけり狂くるう……そんな星一郎を見ていたくない。

「……バカな！」

そんな理屈にもなっていない理由で無茶を犯せるものか。

ここは刀羽華が起き上がるのを待って仕切り直す。それが当然の対応である。

それは分かっている。とても良く分かっている。

「……」

ディーナはドライグから降り、〈ブリューナク〉を構えて星一郎を待ち構えた。

足を止めた獲え物ものへ、獣が一心不乱に襲い掛かる。

「ガァァアアアアアアアアアッッ！」

「あああああああああああっ!!」

――ギィィイイイイイイイイ――――――ィィィイイイイイイッッ！

極彩色の火花が舞い散る。

空が捻じれる異音が響き渡る。

槍と拳が凄すさまじい速さで打つかり合い、弾はじけ合い、そしてまたぶつかり合う。

伸びきった長ちよう髪はつが絡み付いた獣そのものの星一郎は、時に四肢で跳躍し、時に牙を剥き、野獣の凶きよう暴ぼう性を全開にし

て咆哮する。
　対して、ディーナもまた獣じみた咆哮を放ち始めていた。
　怒り。
　怒りだ。
　徐々に畏光の護りを削られながら、ディーナは恐るべき獣へ怯ひるむことなく、止とめ処ど無く溢あふれる怒りに突き動かされて一歩を踏み出す。
「何だ、その様ざまは！」
　我知らず、ディーナは叫んだ。
「貴様ともあろう者が！　その様は何だ!?」
　この声は誰の声だ？
　ディーナは自分の声が自分のものとは思えなかった。
「しゃんとしろ！　星一郎！」
　こんなぐしゃぐしゃに濡れた声で泣なき喚わめくことが自分にも出来たのか。
　休みなく槍を振るいながら、ディーナは新しん鮮せんな驚きを感じていた。
「お前なんて……お前なんか！」
　くそっ、くそっ、ちくしょう。
　口汚い罵りの言葉が溢れてきて言葉にならなかった。
　何を偉えらそうに宣のたまっている？
　こうなったのはお前のせいじゃないか？
「わたしは……わたしはぁ！」
　そう、宿すく儺な星一郎を『摩天の夜宴』に引き込んだのはわたし自身だ。
　ディーナ・チャレンジャーが、彼かれを戦いの舞ぶ台たいに引っ張りあげた。
　だから、自分には偉そうに宣う権利などない。
　だから、自分は彼を――
「わたし、は……！」

だから、自分が彼を好きになるワケにはいかないじゃないか？

彼を巻き込んだ自分が、そんな図々しい真似まねなんて――

「わた、し、はっ！」

嫌きらいだ。

こんな男嫌いだ。

紳士面して狡賢いし、何を考えているのか分からないし、こっちの必死さを嘲笑うみたいな澄まし顔をして。

嫌い。嫌いだ。大っ嫌いだ。

こんな男。

こんな……本当は臆おく病びようで、そのくせ格好付けで、なのに傷付くことを恐れなくて……

「星一郎……っ！」

こんな男、大嫌いだ。

こんな男、こんな男、こんな男……戦いに巻き込んだ自分に優やさしいこんな男！

くそっ、くそっ、こんちくしょう。

わたしは、星一郎なんて何とも思ってない。何とも思ってなきゃ、いけないのに……！

「わたし、は……っぐ！」

とうとう、星一郎の動きがディーナのスタミナを上回った。

ほんのわずかに遅おくれた槍の戻もどしに合わせ、星一郎が腕を振る。〈ブリューナク〉はあっけなくディーナの手からすっぽ抜ぬけていった。

「あっ――ぐっ！」

そして、力任せに押し倒された。

地面に縫い付けられたディーナを、爛らん々らんと輝く凶眼が見下ろす。眼に入ったものを傷付けずにはいられない、凶気に満ち満ちた攻こう撃げき的てきな瞳が。

「あ……ああ……」

そうだ。本来なら、こんな目が向けられて然しかるべきだったの

だ。
　突とつ然ぜん戦いに巻き込まれ、それでその巻き込んだ当の本人を守る？
　悪い冗談だ。
　この男は、自分を憎む資格がある。
「……」
　だというのに。
「グル、ァア……」
　星一郎が力任せに服を引き千切り、こちらの喉のど元もとを空気に晒した。無防備な喉に、大きく開いた口を近づけてくる。獣がそうするように、喉を食い千切る気なのか。
「ぁ……」
　熱い吐と息いきが首筋を擽くすぐる。状じよう況きようさえ違ちがえば恋人の逢瀬のようだと、ディーナは柄がらにもなく自分で自分を皮肉った。もし星一郎の瞳に浮うかぶのが、こんな狂気でなかったのなら……
（……わたし、は……）
　見て欲ほしいのか？
　親愛の篭こもった瞳で？
　そんな事が許されるのか？
　そんな欲深い事が……
（わたし、は！）
　ああ、なんということだ。
　自分は、こんなにも欲張りだったのか？
「……わたしを喰いたいのか？　星一郎？」
　いまにも喉元に喰い付かんとする獣に、ディーナは優しさすら滲にじませた穏おだやかな声で問い掛ける。
「……いいだろう。わたしを喰え。その代わり――」
　お前はわたしのものだ。
「わたしの血肉を啜すするが良い。そうすれば、お前はわたしのもの

になる――！」
　わたしは、こいつが欲しい。
　誰だれのためでもない。
　わたしはわたしだけのために、この男が欲しい。
　自分の命でこの男が自分のものになるのなら安いものだ――追い詰められたが故ゆえの困惑か倒錯か、この時のディーナは本気でそう思っていた。
「っあ……！」
　そして、星一郎の歯がディーナの首元に突き立てられた。滲み出した彼女の血を、獣が本能的に啜り上げる。
「ぁ、あぁ、あ……」
　びくんっ、と身体が強こわ張ばった。
　自分がこの男のものになり、この男が自分のものになる――自分の血を啜られることが、生々しい実感となってディーナの脳髄を酔わせた。
「ぁあ……お、まえは……わたしの……ものだ……星一郎――っ！」
「……ガ、ア……」
　びくりと、星一郎もまた身体を強張らせた。
　いや、それだけではない。ディーナの喉元から口を離すと、よろよろと立ち上がって頭を抱かかえた。
「ガ、アァ……グ、グルァァァァァァアアアアああああああぁぁぁぁ――――――つっ！」
　咆哮、ではない。
　絶叫が、高く高く響き渡った。

※　※　※

〝……まったく。女は怖こわいよなぁ……〟
　どこかで聞いたような声を、星一郎の意識は夢現に聴いた。
〝ほんと、女は怖い……お前さんも可哀想に。女難は俺の系けい譜ふ

の宿命だからなぁ……〟

　顔を上げれば、いつか見たことのあるような光景だった。

　果ても知れない暗い空間。底も見えぬ黒い水面。

　水面に立つ星一郎の正面には、濃い瑠璃色の石版が水面から突き出し、その上にローブともマントとも知れぬ布切れに身を包つつんだ男が腰こし掛かけていた。

〝だが、今回はあの女に感謝することだな。偶ぐう然ぜんとはいえ儀ぎ式しきが成立したのは、あの女の強欲さが故の事なんだからな〟

「……いったい何を……？」

〝聞いたことくらいあるんじゃないか？　吸血鬼が血を啜るのは性交の暗あん喩ゆだって〟

　男は肩を竦すくめてから両手を万ばん歳ざいした。

〝巫女シヤムハトの真似事さ。もっともあの巫女も、あの生意気な餓が鬼きが充あてがったんだがな。あの餓鬼、神様に祀られても変わりやしないんだからな、まったく〟

　男はやれやれと首を振ると、すっと腕を持ち上げて星一郎を指差した。

〝……気を付けろよ？　あの餓鬼が選んだだけあって、あの女も相当に強欲だ。気を付けなきゃ、骨の髄までしゃぶり尽つくされるぜ？〟

「……それは構わないんですよ」

〝んあ？〟

「僕ぼくが心配してるのは、彼女より僕の方が強欲なんじゃないか、ってことで」

〝はぁ？〟

「ディーナは好きなんですけど、刀羽華も好きなんですよね……あまりよろしくないですよね、そういうの？」

〝……〟

　男の顔はよく分からなかったが、雰ふん囲い気きからして呆然としていたらしい。

　しばらくして、男は堰せきを切ったようにゲラゲラと笑い始めた。

〝ははっ！　成程、お前さんも間ま違ちがいなく『人間』だ！　清々しいくらいに欲深だ！〟
「……良くないとは思っているんですよ？」
〝くく、ハーレムは男の夢だろう？　俺が契けい約やくした中には妻と愛人合わせて一〇〇〇人も侍はべらしたヤツがいたぜ？　それに比べりゃ可愛かわいいもんだ〟
「うへぇ……」
〝まぁ、お前さんはこれから更に力が強くなるだろうからな。安定剤代わりに確保しとけ。何しろ狼おおかみのせいで完全に引き摺り出されたからな。俺もそろそろ消えるし、暴走の危険性がぐっと高まる〟
　よくみれば、男の足元が幽ゆう霊れいみたいにうっすらと霞んでいた。ぼんやりと霞んでゆくのは話をしている間にも進み、男はどんどん存在感を薄れさせてゆく。
〝これからは自分の手綱は自分で握れ。ステゴロ哲学者も『精神とは二頭立ての馬車である』って言ってるだろ？　我が慢まんを強いれば、馬は暴走する。大事なのは、いなし方さ〟
「……この会話を、僕は覚えていないんでしたよね？」
〝そうだ〟
「だとしても、最後に聞いておきたい。あなたは、何者です？」
　星一郎の問いに、男は笑いの気配を滲ませて言った。
〝俺の名前をお前さんは既に知っているよ。我わが息子、《深淵の主に造られしモノエンキ＝ドウ》の担にない手てよ――〟

※　※　※

「……う、うぐっ、ああ……」
　水の底から引き上げられたみたいに覚かく醒せいし、星一郎は空気を貪るように大きく喘あえいだ。奇き妙みような夢を見ていた気もするが、急速に戻ってくる肉体の感覚に薄れていった。
「う、ううぅ……いったい、僕は……」

「.....星一郎？」
　自分を呼ぶ声が下から掛かかった。
　.....下？
　何度か瞬まばたきして視界を取り戻すや、ほんのすぐ近くにディーナがいた。まるで押し倒たおしたように、彼女に伸のし掛かっていた。
「え、あ.....ディーナ？　何が.....」
「.....正気に戻ったのか？」
「正気？」
「覚えていないのか？　お前は大暴れしたのだぞ？」
　記き憶おくをまさぐるが、星一郎が思い出せるのは人狼の牙が突き立てられるところまでだった。
「おまけに.....噛まれてこんな痕あとを残された」
　そう言って、ディーナは首元を指差した。
　彼女の白い喉元には、噛まれた痕がくっきり刻まれて血が流れ出していた。
「僕、が.....」
「そうだ」
　ふんっ、と鼻を鳴らし、組み敷かれた状態にもかかわらず、ディーナは見下ろすように見上げてきた。
「この責任は取ってもらうが.....その前に.....」
　ディーナが視線を動かす。星一郎も視線を移動させると、そこでは人狼と戦うベルナデットと春蕾の姿があった。
「あれを何とかしてこい。生あい憎にくと、わたしと刀羽華はしばらく動けそうにない」
「わかった」
　話の流れから察するに、ディーナと刀羽華を消耗させたのは自分らしい。忸じく怩じたる思いを懐いだき、星一郎は汚名返上のために立ち上がろうとする。
「――星一郎」

「なに――っ!?」
　呼よび掛けと同時に頭を掴まれ、ぐいっと引き寄せられる。間近に迫ったディーナの顔と、唇くちびるに押し付けられた熱く柔やわらかな感かん触しよくに、星一郎の頭が真っ白になった。
「……星一郎。お前は、わたしのものだ」
「……」
　唇を離はなしたディーナが、刻み込むように言った。
「お前には、責任を取ってもらう。わたしを傷物にしたのだからな」
　ディーナは喉元の傷を突き付つけ、桃色に染まった唇で緩やかな弧を描いた。
「あ、う、あ……？」
「宿儺星一郎。お前は、わたしのものだ」
　――ディーナ？
　目の前で自分を見上げる少女は、ディーナ・チャレンジャーの筈はずだ。その筈だったが、星一郎は何度も瞬きをして目の前の少女を確かく認にんした。
　――彼女はこんなに色っぽかっただろうか……？
　強気で凛りんとした面持ちはそのままに、磁力とも引力とも付かない何かに惹ひき付けられてしまう。生まれ変わったような彼女の魅み力りよくに、星一郎はくらくらと目眩めまいがするようだった。
「忘れるな……お前はわたしのものだ。だから――無様な真似は許さない」
「……はい」
「分かったなら――行って来い！」
「はい！」
　まるで尻しりを蹴られたように星一郎は走り出した。
　――お前はわたしのものだ。
「……参ったな……」
　甘あまい言葉であると同時に、厳しい言葉でもあった。
　わたしのものである事を示せ――甘いが、甘えを許さない言葉だっ

た。
　そんな言葉で止とめ処どなく溢れてくる戦意に、星一郎は苦く笑しようした。
「……なら、これ以上は！」
　これ以上無様を見せはすまい。
　戦意を活力に変えて全身に漲みなぎらせ、星一郎は拳を握にぎり締しめた。

4

〝ぐるぉぉぉおおおおおおおおお――――――っっ！〟
　人狼が吼ほえる。
　鋭するどい鉤かぎ爪づめを閃かせ、不吉な輝きを放つ牙きばを剥き、聴くものを狂気へ誘う咆ほう哮こうを上げる。
「く、う……」
　ベルナデットは思わず鼻を摘んだ。独特の霊れい感かんを持つ彼女には、咆哮以上に、人狼の撒き散らす〝ニオイ〟の方が強烈であった。
　触ふれるものを尽くを焼き払う、焦げ付いた焦土の〝ニオイ〟。
「なろっ！」
　弓使いが矢を射掛ける。必中の加護が与えられた筈の攻撃だが、人狼の禍々しい畏光に曝されると狙ねらいが振れ、人狼の爪で容易く振ふり払われる。
「やろ……矢まで〝狂〟わされてる、ってか！」
　弓使い――春蕾が舌打ちした。
《狂くるえる巨狼》の名が示す通り、人狼は自らの畏光に照らされたものを歪ゆがませてゆく。その証しよう拠こに、周囲の平安神宮を再現した実体幻げん像ぞうが歪んで捻じくれ、精神を疑うようなおどろおどろしい造形へと変わってしまっている。
　そしてそれは、マリオンを取り戻そうとするベルナデットの獅し子

しも同様だった。
〝ぎゅるぁぁぁあああああああっ!!〟
「〈リオン〉ッ!?」
　随ずい獣じゆうがよろめき、その背に乗るベルナデットが気遣わしい声で呼び掛ける。
「ごめんな、さい……〈リオン〉、お願い、頑張って！」
『グルゥ……ゥルアアアッ！』
　少女の呼び掛けに応え、獅子が人狼に向き直る。
　――轟ッ！
　獅子の咆哮が放たれるが、人狼が纏まとう狂きよう乱らんの畏光は僅かに揺ゆれただけだった。
　人狼――《ウルディンム》がゲタゲタと嗤う。
〝ハハハハハハハハハッ！　ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！〟
　邪悪な嗤い声だった。狂った獣けものよりもおぞましい、邪悪な魂たましいが発する哄笑であった。
〝我ハ《狂える巨狼ウルディンム》！　妣ガ定メ人間アメールガ望ンダガ故ニ！〟
　狂った哄笑を撒き散らして人狼が跳ちよう躍やくする。
　春蕾が矢を撃ち放つが、狂乱の波動に晒さらされて容易く迎撃されてしまう。
「スマートじゃない、こんなの！」
〝ハハハハハハハハハハハハッ！〟
　矢を打ち払った人狼は、狂乱の波動に堪たえる獅子へと襲おそい掛かった。
『グルォオオオッ！』
〈リオン〉は果敢にも爪を振るうが、同じように振るわれた人狼の腕によって弾はじき飛とばされる。
「きゃあああああっ!?」
　獅子の背にしがみつき、ベルナデットは悲鳴を上げる。

悲鳴を聴き、《ウルディンム》がさも愉たのしげに嗤う。
〝ハハハハハッ！　ヨイゾ！　ヨイゾ！　モット叫べ！　モット鳴ケ！　ソナタノ悲鳴ガ我ガ贄ニサラナル狂乱ヲ与エル！　ソレガ我ノ力トナル！〟
「っ……！」
狂い嗤う人狼の邪気に対し、ベルナデットは悲鳴を飲み込んだ。
自分の悲鳴が人狼を喜ばせ、マリオンを苦しめるのなら、悲鳴なんて出してやらない。
「わたし、は！」
ベルナデットは、いつもマリオンに守ってもらってきた。だから今こそ、ベルナデットがマリオンを守らなければならなかった。
「マリオンを、助、ける！」
ベルナデットの願いを受け、〈リオン〉の躯く体たいに力が戻る。雄お叫たけびとともに躍りかかり、人狼の首に噛かみ付いた。
――ギィィイイイイイ――――――ッッッ!!
獅子の牙が人狼の首に突つき立てられるが、畏光がぶつかり合って薄皮一枚で届かない。
〝効カヌ！　所詮ハ《深淵の主の息子マルドウーク》ニ降サレ、『新しき神々アヌンナキ』ニ阿おもねッタ汝なんじノ牙ナド！〟
《ウルディンム》が畏光を発すると、その圧力に〈リオン〉が弾かれた。さらに人狼の腕が振るわれ、獅子の巨きよ体たいを激しく打ち据すえる。
「きゃ、あ――」
「お嬢じようちゃん!?」
ベルナデットが〈リオン〉の背から放り出だされた。
目を閉じ身体を硬くするが、彼かの女じよの身体はふわりと優しく受け止められる。
「……あ」
眼めを開けると、そこには瑞みず々みずしい〝生命のニオイ〟を発する男の、優しくも力強い瞳ひとみがあった。

「セイ、兄様……」
「大だい丈じよう夫ぶかい、ベル？」
「は、はい……でも、マリオンが……」
　牽制する獅子と春蕾を狂乱の畏光で圧倒する《ウルディンム》を見て、ベルナデットはギュッと拳こぶしを握った。
「……セイ、兄様……お願いです……マリオンを助けて……」
「うん、いいよ」
　星一郎はふたつ返事で了りよう承しようしたが、彼がそういう人間だと知っていて頼たのんだベルナデットは自じ己こ嫌けん悪おに陥った。
　ベルナデットの霊れい的てき嗅きゆう覚かくは、相手がどういう人間なのかを初見で嗅かぎ分けてしまう。人にない嗅覚で予あらかじめ相手の反応を知りながら付き合うのは、少女の精神に少なくない負担を強いていた。
　ベルナデットが引っ込み思案なのは、自分の嗅覚への後ろめたさだった。
　だが、
「僕は手伝うけど……ベル、君の友だちは、君が助けるんだ」
　優しくも厳しい声で告げられ、ベルは俯うつむきかけていた顔を上げた。
「わたしは……わたし、なんて……」
「言っただろう？　手伝うって――――ベル、君の『神デインギル』の刻印を見せて」
　星一郎に言われ、ベルナデットはおずおずとスカートをたくし上げた。彼女の白いお腹なかに、〈聖楔者〉の証あかしである八はち芒ぼう星せいの『神』の刻印が刻まれている。
「〝英えい雄ゆうの天敵《全き人間エンキドゥ》よ！　宿儺星一郎が汝の意志を代行する！〟」
　眩まばゆい八芒星の刻印が浮き上あがる星一郎の右手が腹の刻印に重ね合わされると、ベルナデットはびくんと身体を震ふるわせた。

「〝英雄の天敵にして並び立つ友！　我もまた友を助け導く力とならん！〟」
「う、あ、あ――――――――――っ！」
　刻印の経路を通して伝わってくる熱い波動――火傷やけどするほど濃密な生命の熱が、ベルナデットの体の隅々に駆け巡り、後ろ向きになりつつあった彼女の精神に強烈な喝かつを入れた。
　――大切な人を守りたいなら、
　――戦え。
　――闘え。
　――躰からだで敵かなわないなら智ち慧えで、
　――智慧で敵わないなら心で、
　――闘え。
　――戦え。
　――戦意を以もつて立ち向かえ！
　愚直なまでの叱咤に、ベルナデットは涙した。
　流れ込んでくる戦意の裏に、ベルナデットは深い悲しみの〝ニオイ〟を嗅いだ。
　猛々しく、荒々しく、けれどなんて必死な〝ニオイ〟なのだろう。
　赫かつと眼を見開いたベルナデットは、自分と繋がる随獣へ、経路を通じてありったけの力を注ぎ込んだ。
「――吠ほえなさい、〈獅子の王リオン〉！」
　ベルナデットの声に応え、獅子が『轟ッ』と吠えた。その身に纏う畏光の輝かがやきが増し、さらにその首元から炎ほのおが吹ふき上がる。

『ゴォアアアアアアアアアア――――――ッッ！』
　豪ごう奢しやな宝冠の如き鬣たてがみを顕けん現げんさせた〈リオン〉は、これまでに倍する疾はやさと力強さで人狼に向かっていく。
〝ヌ、ウッ!?　《大いなる獅子ウガルル》！　アクマデ人間アメールニ従ウカ！〟
　狂乱の畏光によって有利に戦っていた《ウルディンム》が、初めてその動きに必死さを滲ませた。太陽の紅火コロナを思わせる真紅の鬣を棚たな引びかせて襲い掛かってくる獅子の豪ごう腕わんに打たれて大きく後退する。
〝……ヨカロウ！　強きよう靭じんナルモノ、《大いなる獅子》ヨ！　汝ガソノ片へん鱗りんを顕現スルナラ、我モ我ガ狂乱ヲ以テ屠ほふルマデ!!〟
　人狼の眼が不吉なまでに赤く染まり、身に纏う昏くらき畏光が禍々しさを増す。
〝ぎゃるぁぁぁおおお

「君の頑張りを、けして無む駄だにしない」
　全身に楔形の刻印を浮き上がらせ、星一郎が人狼と獅子の戦いへと飛び込んでいく。その力強い背中を見送り、ベルナデットは襲い掛かってくる痛みと熱が緩和されるのを感じていた。

「やあやあ、あたしも手伝うよ」
　疾しつ走そうする星一郎に、春蕾が並んで走りながら声を掛けてくる。
「手伝わないつもりだったの？」
「そんなワケないじゃん。ちゃんと始末は付けるよ。あたしのゴタゴタがこの事態の引き金だからねぇ」
　春蕾は気落ちしたように漏もらした。
「星一郎と出会った時は、これで全部解決だと思ったんだけどねぇ……」
「あんまり評価されても困る」
「ま、こうなったらしょうがない。さっさと何とかしなきゃね。さもなきゃ、埋うめ合わせも出来ない」
「埋め合わせって、何でするつもり？」
「もちろん精神的に――じゃなくて肉体的に」
　春蕾はおどげながら言った。
「……肉体的な埋め合わせは間に合ってるよ」
「別にいいじゃん？　若いんだから二人や三人くらい増えたって」
　下世話な笑えみを浮かべて春蕾が言う。
「だいじょぶダイジョブ。星一郎がディーナのものでも、あたしは星一郎のものになってあげるから」
「精神的なお返しをいまして欲しいね」
　どんな時でもからかうことを忘れない春蕾に、星一郎は辟へき易えきしながらも苦笑した。
「――援えん護ごをよろしく」

「任せて。あたしの〈天狼〉は、どっちかっていうと援護向きだからね」
　頷くと、春蕾は実体幻像が解けて無残な躯を晒す神宮の瓦が礫れきへと身軽に駆け上がった。
　星一郎が背を向けると、その背に無数の矢が浴びせかけられた。矢の雨は髪かみ一筋の絶妙みような間合いで星一郎の横を掠めてゆき、彼の伸のびに伸びた髪の毛けを適度な長さに戻していた。
「……」
　ちらりと高台に構えた春蕾に振り返かえると、彼女はニヤリと笑って肩かたを竦めた。
「……確かに援護向きだ」
　邪じや魔まな髪の切きれ端はしを振り払はらい、星一郎は〈リオン〉と激しく打ち合う人狼へと突貫した。
「おおおお

た。
「ぐっ……がぁぁぁあああああああああああああああああああああああああああ
あっっ！」
　暴れ出しそうになる獣性を、星一郎は雄叫びを上げて威い嚇かくしつけた。
「負け、る、か……！」
　自分は獣おまえのものになんてならない。
　腹の奥おくに染しみこんだ自分以外の熱が、星一郎を褒ほめるようにどくんと脈打った。
〝ぎゃるぁぁぁおおお

ぎじぎじと地盤が擦すれ合うが如き重々しい音が響ひびき、びしびしと両者の足元に罅ひびが入った。二メートルを超す人狼の体たい躯くに、星一郎は一歩も引かずに拮きつ抗こうしていた。

〝ぐ、がぁあぁぁぁああああ……オノレオノレオノレ！《天の牡牛グガランナ》ト渡リ合ッタ剛ごう力りきカ！　忌いまゞいまシイゾ！　妣ははヲ弑ころシタ系譜ニ連ナルモノ!!〟

「ぬ、ぐ、……うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

一際強く、星一郎の身体が光に包まれた。

ぐぐっと、人狼の身体が上に浮かびはじめる。

〝お、お、おお、お、おおおおおおおぉぉおおおおっっっ!?〟

星一郎は渾身の力を籠め、ついに人狼の巨体が持ち上げる。

人狼は空中に振り上げられ、無防備な姿を晒した。

「待ってました！」

廃墟の高台に陣取った春蕾が喝采を上げた。

まさか真っ向からの力勝負とは……やばいやばい、惚れそうだ。くっそう、星一郎はイイ身体してる。今度イラスト描く時にモデルになってもらおう。

「その為ためにも、さっさと終わらせないとねぇ！」

春蕾の声に応えるように、彼女の手にある巨弓〈天狼〉が震えた。

リム部がガシャリと音を立てて前方へ折り畳まれ、弓ではなく銃と呼ぶべき輪りん郭かくへと変形した。

変形した権能武装は、春蕾から凄まじい勢いで魔ま力りよくと神気を吸い上げ、その銃口に眩い光を生み出す。天頂の極光――シリウスが顕現したかの如き、蒼き烈光。

「――射砕け、〈天狼〉！」

蒼い流星が流れた。

最大出力で放たれた魔力の矢は『必中必滅』の加護の下、《ウルディンム》の昏い畏光を貫いてその土手っ腹を貫いた。

〝ぎゅるぉおおおおおおおぉぉぉぉぉぁぁぁっぁあああっっ!!〟

人狼の悲鳴に会心の一いち撃げきを放ったことを確信し、春蕾はがくりと跪いた。

「……後は任せるよ……」

春蕾は最後の決着を見届けるべく、気力体力を根こそぎ吸い出された事で襲ってくる強烈な眠気に対たい抗こうして瞳を見開いた。

〝ぎゃるぉぉおおおおおおおおおおおおおおっっ!?　オノレェェエエエエエッ!!　妣ヲ弑シタ《深淵の神の息子マルドウーク》ノ弓カァァァアアアアッ!?〟

腹を貫つらぬかれ悲鳴を上げる人狼を、星一郎は地面に叩たたき付けた。人狼のぶち抜ぬかれた腹の傷がその衝しよう撃げきでさらに広がり、血の代わりとばかりに魔力光が撒まき散ちらされる。

〝ぎゅ、るぁあ……〟

《ウルディンム》に開けられた大穴の中にはぐったりと気を失っているマリオンの顔が見えた。春蕾の〈天狼〉は人狼の巨体を貫通していたが、端たん整せいな顔には擦り傷もない。狙ったもの以外は傷付けない――『必中』の加護の面目躍如であった。

〝ぎゅ、るぉおお……〟

起き上がろうとする人狼を、星一郎は首を掴つかんで押さえ付ける。

「ベル！」

星一郎の声が上がるや、〈リオン〉も《ウルディンム》に飛び掛かった。

獅子は人狼の腹に爪を立てると、その傷を大きく開く。

〝ぎゅおぉぉおおおおおおお――――っ!?〟

人狼の苦鳴に一いつ切さい躊ちゆう躇ちよせず、〈リオン〉はさらに伸しん縮しゆく自在の尾おを傷口に突っ込んだ。尾鞭剣は《ウルディンム》の体内をかき回し、引き抜かれた時にはマリオンの身体をがっちりと掴んでいた。

〝ぎゅ、るぁぁああ……あああっ！〟

「ぐっ！」

力を発揮するための供物を奪われ、《ウルディンム》が必死の抵てい抗こうをする。ここまで無理をしたツケか、畏光を消耗した星一郎は人狼の腕うでに弾かれて地面を転がった。

〝ぐるぉおお……返セ……我ガ贄ヲ……〟

マリオンを回収した〈リオン〉へ掴みかかる《ウルディンム》だが――その腕は音もなく吹き抜けた風の刃はによって両断される。

〝ごぁぁあああああ!?〟

「薙なぎ払え、〈戦神の剣クサナギ〉！」

七支刀形態となった大剣を掲かかげた刀羽華が、豪ごう々と唸る颶ぐ風ふうを解き放った。

風の刃が嵐あらしの如く襲いかかり、人狼のもう一本の腕を撫で斬りにする。

〝ご、あぁ……〟

「穿つらぬけ、〈輝ける神槍ブリューナク〉！」

ダメ押しに、ディーナの構える三さん叉さ戟げきから放たれた紫し電でんが人狼の残骸を飲み込んだ。

雷らい撃げきが収まると、そこは黒焦げになった〈第二書版〉がぶすぶすと煙けむりを上げていた。

「……終わった」

誰だれが呟つぶやいたのかは定かではないが、誰もが同じ思いを抱

いだいた。

二転三転した混乱の『夜宴』は、こうして終わりを告げた。

終章　　宣告　ト　宣言

1

「現地の部隊からの連れん絡らくが途と切ぎれた？」
「はい。いかが致いたしましょう、少将シヤオジヤン」
　部下からの問い掛けに、少将と呼ばれた初老の男は顎に手をやって物思いに耽った。
「……予備部隊を新京都に潜入させろ。リストに上げた〈聖楔者ヒエロス〉から適当な者を見繕い、我らの傀かい儡らいとせよ」
「他国の〈聖楔者〉を使うのは、後々問題となりませんか？」
「構うものか」
　部下の問い掛けに、男――人民軍の対魔ま導どう部隊責任者は鼻を鳴らした。
「無限の魔力……それを手に入れる事は、次の世界の盟主の座を握るに等しい。多少の危険は覚かく悟ごの上だ。〈ＢＡＢＥＬ〉さえ掌しよう握あくすれば、あとはいくらでも誤ご魔ま化かしが利く」
　各国の〈聖楔者〉が送り込まれた『摩天の夜宴バビロン・ナイト』であるが、カルディア委員会は『全人類の利益』を謳うたい、『夜宴』の監督も、〈ＢＡＢＥＬ〉の管理もすべて担っている。
　各国が〈聖楔者〉を送り出した後は静観に徹しているのを、少将はなんと愚かで甘い連中であるかと嘲笑った。
　魔ま力りよく湧ゆう出しゆつ炉ろ〈ＢＡＢＥＬ〉を確保すれば、今後一〇〇〇年の世界の覇権を手に入れたに等しい。自分たちの紐付きの〈聖楔者〉を勝ち残らせるべくエージェントを派遣して暗躍する――それくらいしないでどうするのだ。
　カルディア委員会は、最後の〈聖楔者〉に勝ち残った褒美として最初の〈ＢＡＢＥＬ〉の使用権を与あたえるとしている。その使用権を使い、〈ＢＡＢＥＬ〉の機能のすべてを我が国が握る。それが少将

と、彼かれに連なる権力者たちの考えであった。
「この世界は食うか食われるかだ。指を咥くわえているなど、愚か者のすることだ」
「了解いたしました……ところで、裏切ったと思しき花か春しゆん蕾らいの処分はいかが致しますか？」
「人質は一人以外無用だ。『夜宴』が終わった後、その一人で釣り出して始末すればいい」
「はっ。それと……カルディア委員会の関係者が少将殿どのに面会を求めていますが？」
「このタイミングなら、連絡を受けただけの使いっ走りだろう。留守だといえ。儂は休きゆう暇か中だと……」
「あら、謙遜しなくてもよろしいのですよ？」
　突如響いた艶あでやかな声に、少将も部下もぎょっとして声のした方へ顔を向けた。
「勤勉でらっしゃるのに休暇中だなんて……少将閣下は恥ずかしがり屋さんなのですね」
　くすくすと笑うのは、ヴェール付きの帽ぼう子しを被かぶった、ドレス姿の少女だった。
　唐とう突とつに現れた少女は、腰こし掛かけていた高価な大壺の上からひらりと飛び降りると、完かん璧ぺきな仕草でスカートを摘んで腰こしを折った。
「初めてお目にかかります。妾わらわはアスタ……カルディア委員会の実行部隊の長を務めております。まぁ、言ってしまえば、使いっ走りの纏め役ですね」
　口元に手を当ててクスリと笑うアスタ。帽子の端から溢あふれる銀ぎん髪ぱつが軽やかに揺れた。
　少将も部下も突とつ然ぜん現れた彼女に呆ぼう然ぜんとしていたが、我に返った部下が荒らげた声を出す。
「キサマ、いったいいつの間に……いや、許しもなく少将閣下の部屋に――」

「黙だまりなさい」
　アスタがぱちりと指を鳴らすと、男は糸の切れた人形のようにばたりと崩れ落ちた。
　少将はぎょっとした。
　部下の男は、叫び声をあげた表情のまま倒れ伏している。まるでスイッチを切った如く、一いつ瞬しゆんで意識が刈り取られていた。
「さて、少将閣下」と、倒れた男を路ろ傍ぼうの石の如く放置し、アスタは静かに少将へ語り掛けた。「各国の合意の元、『摩天の夜宴』の一いつ切さいはカルディア委員会の監督下に置かれると定まっているはず。〈聖楔者〉以外の方々が新京都を騒さわがすことは禁止されています」
「……いったい、何のことか……証拠はあるのですか？」
「我々が歓待している虎少佐は、貴方あなたのことをとても詳くわしく話して下さいましたわ」
「虎？　誰ですかな、その者は？　ああ、熱烈な愛国者でしょうか？　いやはや、委員会の方々には迷めい惑わくを――」
「口を閉じなさい」
　アスタが命じた瞬しゆん間かん、少将の唇は接着されたように動かなくなった。
「っ!?　――っ!!」
「妾は言い訳を聞きに来たのではありません。これは最後通告です。『摩天の夜宴』を邪魔するな――それがカルディア委員会代表、物ものの部べ昴こう造ぞうの言葉です。〈聖楔者〉たちには、全ぜん身しん全ぜん霊れいで戦ってもらわねばならないのです。雑音で彼らを邪魔しないで欲ほしいですね」
「……っ！　……っ！」
「貴方たちが傀儡にしようとした――花春蕾さんでしたね――彼女の家族を狙う貴方たちの手の者は、すでに我々が排はい除じよしました。彼女も、これで心置きなく『夜宴』に集中できるでしょう……ああ、もう喋ってもいいですよ。ただし、喚わめかないで

くださいね？」
　アスタの許しがあって、ようやく少将の唇が再び動き出した。
「ぐ、ぐぐ……キ、キサマ……こんな事をしてタダで済むと……」
　少将は机の下のスイッチを押した。これで、すぐに完全武装の警備兵が駆け付ける。
　目の前の少女はカルディア委員会の者だというが、知った事か。散々いたぶった後で豚ぶたの餌にすれば証拠など残らない。
　昏い期待に満ちた眼で少女を睨にらむ少将の耳に、部屋をノックする音が届く。非常事態に何を呑のん気きな――そう思って舌打ちしかけた少将だったが、ドアを開けて入ってきた者たちを見てヒクリと喉のどが痙攣した。
「我らが主ミ・ロード、施設全体の無力化を完了いたしました」
「なるべく静かに叩きのめしたつもりですが……お耳汚しいたしましたか？」
「大丈夫よ。よくやってくれました、グリム、ブリュン」
『もったいないお言葉です、我らが主』
　部屋に入ってきたのは、二人組の若い女だった。黒くろ髪かみの女は鞭むちを持ち、金きん髪ぱつの女は戦せん槌ついを担かついでいる。そして二人とも、身体の線も顕あらわな薄衣の衣服を纏っていた。太古の神しん殿でんの巫女みこのように、ゆったりした衣服から魅み惑わく的てきな体躯が大胆に晒されている。
　普ふ段だんの少将なら好色を隠かくしもせずに見入るのだろうが、彼女たちが開け放ったドアの向こうの景色が目に入るや青褪めて凍り付いた。
　死し屍し累るい々るい――生きているのか死んでいるのか、大勢の兵士たちが倒たおれ伏していた。
　まさか、この施設すべての兵隊を無力化したのか？
　それもまったく物音を立てず？
　少将はアスタに視線を戻すと、我知らずごくりと唾つばを呑のんだ。

「こ、こ、こ、こんな、無法を……軍施設でこんな真似まねをされて、我わが国の上層部が黙っていると……」
「最初に無法を犯したのは貴方方でしょう？《陽光の法神シヤマシユ》に捧げられた法典にも『目には目を、歯には歯を』と書いてあったわ。それとも……まだ脅しが足りなかったかしら？」
　困ったものだわと呟くと、アスタは再度ぱちりと指を鳴らした。
　また口が閉ざされるのかと思った少将だったが、とくにそういう事はなかった。その代わりに数秒後、机の上の通信機が激しく鳴り響いた。
「どうぞ、お出になって」
　ホットラインの通信を聞かせて良いものかと思ったものの、少将はアスタに従って通信機を手に取った。そして告げられた情報に、顔から血の気が音を立てて引いていった。
「な……国内の核融合炉ろの制御結界が消失しただと!?」
　魔導工学の最大の恩おん恵けいといえる、結界式の核融合発電施設。その制御結界が機能を停止して、術式が破綻寸前であるとの連絡であった。
　少将はぶるぶると震えながら、アスタと、彼女に従う二人の若い女たちを見やった。
「分かっていただきましたか？　少将閣下？」
　悪戯いたずらっぽくくすりと笑うアスタに、少将は悲鳴を上げて頭を机に押し付つけた。
「わ、分かった！　我々はもう『夜宴』に干かん渉しようしない！〈聖楔者〉にも手を出さない！　潜入部隊も全すべて引き上げる。だから早く結界を戻もどしてくれ！　このままでは――」
「大地に大きな穴が空いてしまいますわね」
　アスタがぱちりと指を鳴らした。
　通信機の向こうからがなり立てていた報告が次し第だいに沈静化し、発電所の制御結界が復旧したことを知らせてきた。
　少将はどっと椅い子すに座すわり直した。一気に一〇年は年を取っ

たように疲労しきっていた。
「それでは、失礼いたしました。どうぞ、『摩天の夜宴』の成功をお祈いのり下さい」
　アスタは優雅に一礼すると、グリムゲルデとブリュンヒルデを伴って部屋を出て行った。部屋のドアがぱたんとしまって、少将は心の底からの安あん堵どの吐と息いきを漏らした。
「……日本では、触らぬ神に祟りなし、だったか……我々はいったい何に……」
　ぶるぶると首を振った少将は、息苦しさを覚えて部屋の窓を開けた。夜明けが近く、東の空が薄っすらと明るくなっている。はるか遠くの山の稜線には、珍めずらしく星の光が瞬まばたいていた。その星の光が眼に入った瞬間、少将の脳裏にアスタの姿がフラッシュバックし、彼は再び激しく震え出した。

2

　起き抜けに外を見ると、東の空で星が瞬いていた。
「金星……明けの明星か……」
　ベッド脇わきの窓からカーテンをずらして外を見ていた星せいーいち郎ろうは、珍しいこともあるものだと独りごちた。
「……起きないと」
　昨晩の『夜宴』は二転三転して酷ひどい混乱と混沌のただ中にあったが、終わった後は驚おどろくほどあっさりしたものだった。
『夜宴』の開始前にひっそり星一郎から通報されていたカルディア委員会は、春蕾を脅していた連中を残らず捕縛し、残った虎少佐も拘束して移送していった。
『物部代表もたいへんお怒いかりです。彼らの上司たちにはしっかりとお灸きゆうを据えましょう』
　実働部隊を纏まとめるアスタはそう言うと、星一郎たちに今後の干渉の排除を確約した。

『もっと早く相談していただければよかったのに』
『委員会がどこまで信用できるか分からなかったんでね』
　アスタは春蕾に苦言を呈したが、春蕾は肩を竦すくめた。
　そして、春蕾は星一郎たちに向かって深々と土下座した。
『煮るなり焼くなり好きにしてくれ』
　殊しゆ勝しような態度の春蕾に、星一郎はともかく、ディーナと刀と羽う華かは顔を見合わせていたが、致し方なしと彼女を許した。
『これから、あたしはあんたたちに協力する。いくらでもこき使ってくれ。あ、ただし三食昼寝は完備でよろ』
　殊勝な態度をしつつ抜け抜けと言い放つ春蕾に、ディーナも刀羽華も諦あきらめたような顔になっていた。彼女たちなりに、春蕾のメンタリティをある程度理解したようだった。
　そして、ベルナデットとマリオンだが、
『目が覚めるまで……マリオンと一いつ緒しよにいます』
　マリオンを選定した――いや、取り憑いていたと言った方がいい《狂くるえる巨狼》は、すでにディーナの〈第二書版セカンダリイ〉に回収されていた。
　目を覚まさないマリオンを抱いて、ベルナデットははっきりと首を横に振ふった。
『では、マリオン・ルシェールの身み柄がらはあなた方にお任せしましょう。それにしても神格が意思を持って〈聖楔者〉に取り憑くとは……ふふふ、興味深い事例ですね。これからそういう事例が出てきたら……妾たち委員会も新しい対応を取らなければ』
　アスタは優雅に笑い、カルディア委員会の者たちを取とり纏まとめて去っていった。
　そして、星一郎の一行は疲労困こん憊ぱいの体で宿すく儺な家に辿り着き、そのまま言葉もそこそこにベッドに倒れこんだのだった。
「……身体がベトベトする……」
　上半身裸はだかで、しかも素足で立ち回っていたせいで、星一郎の身体は埃塗れの土塗れだった。ベッドのシーツに、茶色い人型がくっ

きりと残っている。
「……シャワーを浴びないと」
　シーツを丸めて小脇に抱かかえながら自室を出る。どうやら、他の者たちはまだ寝入っているらしい。無理もあるまい。昨晩はひどい騒動だったし、いまはまだ午前四時そこそこだ。
　汚よごれたシーツを洗濯機へ突っ込んで、星一郎は浴室に入った。シャワーを浴びると、すぐに黒ずんだ水が流れ落ちる。
「……また、刻印が増えたか……」
　泥汚れの落ちた肌はだには、浮うき上がったままの楔形文字の刻印が確かく認にんできた。
　いまだに、星一郎の身体は変化――成長を続けているようだった。最終的にどうなるのか、見当もつかない。
　あるいは、我を失った獣けもの同然の姿が、《全き人間》の終着点なのだろうか？
「……そんなのはごめんだ」
　十分に汚れを洗い流すと、湯船に身を沈めた。
　騒動に次ぐ騒動を終え、ようやく星一郎は安堵の吐息を吐ついた。
　だがひと心地ごこちつくと、今度は別の問題が意識に上がってくる。
「……困った……」
「何が困ったの？」
　ぎょっとして顔を向ければ、いつの間にか浴室の中に春蕾が立っていた。
　無論、裸だ。
「……どうやって……」
「気配を消すのは基本です」
　春蕾は、ものすごくイイ笑え顔がおで親指を立てた。
　そして、浴室の床ゆかに正座し、三つ指を立てて深々と土下座した。
「……今回は、本当にお世話になりました。全部、貴方のお陰かげで

す」
「……似合わない丁てい寧ねい語はやめたら？」
「言うに事欠いて、それ？」
　顔を上げた春蕾はふくれっ面になったが、すぐに陽気な笑みを浮かべた。
「けど、ほんとに助かったよ。だから、あたしはあんたに恩返ししないといけない……それで？　星一郎は何が困るのかな？」
「……別に」
「一人を選ばきゃ、なんて悩なやみは止めてね？」
　春蕾は重々しい仕草で頷きながら、言い聞かせるように言った。
「せっかくのハーレム展開！　どうせだからあたしも交じって、作品に活かしたいし！」
「作品て……」
「あたし、壁かべサークルになって稼ぎまくるのが夢なのよねー」
　どうやら、春蕾は星一郎の予想以上に骨の入ったオタクだったらしい。
「だからほら、この前の続きしましょうよう」
　わきわきと両手を動かしながら、ハァハァと熱に浮かされたように春蕾が目を輝かせた。
「ぐふふ……星一郎ってイイ身体してるよねぇ……たっぷり愛で――じゃない、たっぷり参考にさせてもらうわよぉ……」
　――あ、こいつはダメな人だ。
「さぁさぁ！　お宝開帳！」
　おりゃあと、春蕾は自分も湯船に勢い良く飛び込んだ。お湯が流れ出して水位が下がると、星一郎の身体のほどんどが顕わになってしまう。
「ぐふふ、さぁさぁ……って、何よこれぇ!?」
　ぎょっとした春蕾は、悲鳴を上げて両目を掌で遮さえぎった。
「ちょ、え、ええ？　ま、前の時と全然……な、何よそれはぁ!?」
「……朝の生理現象だね」

「う、うそ……え、だってこんなに差が……」
　ごくりと唾を飲む春蕾に、星一郎は小首を傾かしげた。
「……『家族でもない男たちと』？」
「うぐっ」
「……『たっぷり可愛がってあげる』？」
「ぐぐっ」
「……それで、ほんとうは？」
「……あたしの実家、道場で……水行なんかを……」
　家族ではないが、家族同然だったわけだ。
　さっぱりお湯のなくなった湯船から立ち上がると、春蕾はビクリと首を竦めた。
「……なにか言うことは？」
「す、すみませんでしたぁぁぁあああああっ！」
　ぴゅうと漫画みたいな音を立て、春蕾は風のように風ふ呂ろ場ばから逃げ去った。
「……ある意味、一番女の子らしいかも」
　しばらくしてから着き替がえてリビングに入ると、そこにはすでにディーナが居た。無理に早起きして待っていたのか、眠そうに眼めを擦こすっている。
「ディーナ？」
「やはり、最初に起きてきたのはお前か」
　ディーナは薄く笑うと、すっと立ち上がって近づいて来た。
「……昨晩わたしが言ったこと、覚えているな」
「……うん……」
　――お前はわたしのものだ――
「もう一度言うぞ、星一郎――」
　ディーナは星一郎の襟えり首くびを掴むと、ぐいっと引っ張って屈かがめさせた。
　そして無理やり自分と高さを合わせた星一郎へ顔を寄せ、唇くちびるを合わせた。

「……」
「……星一郎。お前は、わたしのものだ」
　傲ごう然ぜんと笑い、ディーナが告げた。
「わたしは存外、欲深だったらしい。わたしは『夜宴』を勝ち抜き、兄様を救い、そしてお前も手に入れる」
「……君って、そんなキャラだっけ？」
「誰のせいでこうなったと思ってる？」
　ディーナは不満気に鼻を鳴らした後、文句をつけるみたいに睨み付けた。
「お前のせいだ。ぜんぶお前のせいだ。お前はわたしをこんな風にした責任を取るべきだ」
　まるっきり……というか難なん癖くせそのものな論理を、ディーナはさも当然のように告げた。
「お前は責任をとって、わたしのものになれ。そうしたら――」
「……そうしたら？」

「――お前がわたしのものになるのなら、わたしがお前を幸せにしてやる」
「……まったく」
　星一郎は大いに苦く笑しようした。
　言うに事欠き、幸せにしてやる、ときた。
　それを言うのは、男性の役割じゃないのだろうか？
　けれど、妙にディーナらしい。
　そして……本当に度どし難がたいのだが、自分は嬉しがっている。
　甘やかしもしない、甘えさせてもくれない……そんな彼かの女じよのものになることを、自分はかなり本気で嬉しがっている。
（……もしかして、本当に変態野や郎ろうだったのかな？）
　厳しくしてくれる女性に惹かれるなんて、自分のことながらちょっと引く。
「……お試ためし期間はある？」
「お試し期間？」
「いまどきクーリングオフもないんじゃ、商取引違い反はんも甚だしいからね」
「……よく回る口だ」
「それも付加価値に加えてね」
「……いいだろう。お試し期間を認めてやろう」
　鼻を鳴らし、あくまで強気にディーナは笑った。
「どうせ、すぐに自分から頼たのんでくるに決まってるからな」
「そうなるといいね」
「では……誓ってもらおうか？」
「……僕ぼくはあなたのものだ、ディーナ・チャレンジャー」
「違ちがう」
　襟元を掴んだ手を揺ゆらし、ディーナがやり直しを要求する。
　ああ、まったく……とんでもないお姫ひめ様さまだ。
「……あなたのものにして下さい、ディーナ・チャレンジャー」
「よろしい」

　にっこりと笑ったディーナは目を閉じ、再び唇を寄せた。
（……僕って、女性の趣しゆ味みが悪いよなぁ……）
　柔やわらかな感かん触しよくを味わいながら、星一郎は自分の度し難さを自じ嘲ちようした。
　唇を離すと、ディーナはにやりと笑う。
「喜べ、星一郎。これからも、たっぷりと振り回してやる」
「……涙が出そうだ」
「褒め言こと葉ばと受け取っておこう」
　襟を掴んでいた手を離すと、ディーナは後ろ向きに離はなれてゆく。
　肩かたを竦めた星一郎が屈んでいた背を伸のばして背後を向くと、リビングの出入り口に、ぽかんと口を開けた刀羽華が立っていた。
「……せ、せ、せ、せせせっ、せ、星くんっ？」
「うん？」
「何よいまの――――っ！」
　慌ただしく駆け寄ると、刀羽華は袖口で星一郎の唇をごしごしと拭った。
「せ、せ、星くん……ま、まさか、ディーナと……」
「その事なんだけど……刀羽華」
「な、何……？」
「僕は、君が好きだ」
「……ほえええええっ!?」
　刀羽華が、星一郎の聞いたこともない間抜けな声を上げた。
「で、でも星くん……さ、さっき、ディーナと……」
「うん。ディーナも好きだよ」
「はいぃぃいいいいいっ？」
　刀羽華は混乱のあまりに目を白黒させた。
「いま、ディーナとお試し期間中なんだ。だから刀羽華とも、お試し期間ってことで」
「……お試しで恋人？」

「お試しのない恋をするには、ちょっと付き合いが長すぎるからね」
「……いいわ。じゃあ、お試し期間、ということで」
「うん。よろしく」
　刀羽華にかるくキスをすると、彼女はぽかんとした後、ぎゃあぎゃあと騒ぎ始めた。
「い、い、いきなり!?」
「お試し期間だから、軽いやつをと思ったんだけど？」
「……星くん、遠えん慮りよがなくなるとヤバイわ……」
　額を押さえると、刀羽華はディーナへ向かって舌を突つき出した。
「星くんを悪の道に引き込まないで！」
「分かっていないな、刀羽華。そいつはお前みたいに甘やかす奴やつじゃ満足できなくなるに決まってる。その男は鞭むち鞭むち鞭むち鞭むち飴あめ、くらいでちょうどいいんだ。お前にそれが出来るか？」
「で、出来るわ！　鞭くらい、いくらでも！」
「どうかな？」
　必死に言い繕つくろう刀羽華に、ディーナが疑わしい目を向ける。
　いかに厳しくしつけられるかをアピールし合う二人を見て、星一郎は「お試し期間を決めて正解だった」と思い始めた。
「……あ、あの……」
　もはやお馴な染じみになったディーナと刀羽華の言い合いを眺ながめていると、おずおずとした声が聞こえてきた。振り返かえると、ベルナデットが扉とびらの陰かげから恐恐と顔を覗かせていた。
「あ、あの……喧けん嘩か中で、すか？」
「気にしないでいいよ、ベル。あれがあの二人の朝の挨あい拶さつだから」
「……変わった挨拶、です」
「そのうち慣れるよ。……それで、どうかした？」
「は、はい……実は……」

「――で、こちらのお嬢じようちゃんを預かって欲しい、と？」
「はい。お願いできますか、白はく明めい様？」
「オレはお嬢ちゃんじゃねぇ！」
　場所は移って、時剋洞。
　はじめて訪れる春蕾とベルナデットは時計だらけの室内を興味深そうに見回している。そして、もう一人……黒い癖毛の女の子が、自分を見下ろす白明に噛かみ付いていた。
「……女の子だったとは……」
「あんなに口が悪かったら、誰だって男子だと……」
　星一郎、ディーナ、刀羽華は、未だに眼を覚ましたマリオンが女の子だったという驚きから抜け出だせずにいた。
　現在のマリオンは、ベルナデットの替えの服を着て、女の子らしいスカート姿だ。肌の露出が少ないシャツとズボンだと分からなかったが、こうして見ると確かに女の子だ。
　言動に誤ご魔ま化かされていたが、ちゃんと格好を整えると、マリオンはベルナデットに負けないくらいにお人形然とした可愛かわいらしい女の子であった。
「オレは、ベルを守らなきゃならないんだ！　こんな辛しん気き臭くさい場所に居られるか！」
「しかし、お前さんはすでに〈聖楔者〉の力を失っているのだろう？」
　頑がん是ぜない子供を言い聞かすべく、白明が穏おだやかな口調でマリオンに語り掛かけた。
「何の力もないお前さんがうろうろしていたら、その方が危険だ。側にいるだけが、守るということじゃないんだよ？」
「……けど……」
「また、あっちのお嬢ちゃんに危険を冒して助けてもらう気かい？」
　白明の指摘に、マリオンは口惜しげに黙り込んだ。
　此処ここに来るまでに散々苦労した星一郎たちは、白明の慣れた様子に素す直なおに感心していた。

「守るというのは、庇かばうことじゃあないよ。それに……あのお嬢ちゃんは、一方的に助けて欲しいと思っているのかねぇ？」
　はっとしたマリオンが振り向むけば、ベルナデットは彼女を安心させるように頷うなずきかけた。
「……マリオン。わたし、あなたにずっと守ってもらって、きた……けど、わたしもあなたを守り、たい……マリオンは、わたしの親友だ、から……」
「……ベル……」
「あんたがその子を大切に思っているように、その子もあんたを大切に思っているんだ。その思いを踏ふみ躙にじってまで側にいるのが、あんたの言う『守る』ってことなのかい？」
「……分かったよ。ベル……オレ、待ってるから……」
「うん……ありがとう、マリオン」
　手を繋ぎ合い、ベルナデットとマリオンは涙混じりに頷き合った。
「でも……本当に大だい丈じよう夫ぶなんだな……？」
「うん。〈リオン〉もいるし……セイ兄様もいる、から」
「任せてほしい」
　兄様と呼ばれ、星一郎が胸を叩たたいて頷いた。
「君の分まで、僕がベルを守るよ」
「……本当だな？」
「もちろんだ。こんなに可愛いベルに、傷一つ負わせるもんか」
　真ま面じ目めくさった星一郎の言葉に、ベルナデットは顔を赤くして俯うつむいた。
　兄バカを誘発した星一郎は、とにかくベルナデットを褒ほめちぎっていた。その様子を見て、ディーナと刀羽華がこそこそと小声で話し合う。
「……まさか、年下好きなのか……？」
「……星くん、ずっと妹が欲しいって言ってたから……」
「あたしもずっと弟が欲しかったし、あんな可愛い子に『兄様』って呼ばれたらイチコロだよなー」

ある意味一番星一郎と気の合う春蕾が冷静に指摘した。上がつかえている末っ子の真理が、彼女には手に取るように分かった。
「だよな！　ベルは可愛いよな!?」
「ベルは可愛い。悪い虫がつかないように注意しておくよ」
ベルナデットを褒めちぎる姿勢に共感したのか、これまでの憎にくまれ口ぐちは何処どこへやら。マリオンは星一郎と固い握手を交わした。
その横で、ベルナデットは恥じ入るように小さな身体をさらに縮こまらせる。
「……どうやら、身元の引き受けは解決しそうだな」
ディーナが安堵の溜息を吐つくと、彼女の〈第二書版〉がメッセージを受信したことを告げた。〈第二書版〉を取り出すと、カルディア委員会からであった。
「どうしたの？」
運命共同体となった〈聖楔者〉たちの視線を受け、ディーナは受け取ったメッセージを読み上げた。
「……わたしたちと会談を持ちたいというグループがあるそうだ。会談の届け出は、クローディア・クロシェット……『天使』の集団を率いる〈焔ほのおの天使メタトロン〉の〈聖楔者〉だということだ……」

「メタトロンとは……焔と法を司る太陽神の系けい譜ふか……」
〈聖楔者〉たちが去った時剋洞で、古こ堂どう白明は独りごちた。彼女の正面には臨時の助手として預かることになったマリオンが座っていた。
「厄やつ介かいなのか、婆ばあさん？」
「もちろん。天使の眷けん属ぞくはどれもこれも厄介だよ。それよりマリオン――」
白明は眼にも止まらぬ動きで、マリオンの頭に拳げん骨こつを落と

した。
「いったぁあっ!?」
「家主になんて言い草だい。白明さんか、さもなくば師匠とお呼び」
「うるせぇ！　若作りのクソババア！」
「ほほう……これはしばらく退屈しないで済みそうだねぇ」
「いひゃいいいひゃいいいひゃい！」
　マリオンの頬ほおをつまみ上げ、白明は実に楽しげに笑った。
「くくく……実に良いものを預かったねぇ」
　生意気な子供をどうやって躾しつけるかに思いを馳せてわくわくしていると、ほとんど来客がない時剋洞に、珍しく一日で二回目の来客があった。
　姿を見せた人物を見て、白明はぴくりと片かた眉まゆを上げた。
「……危なかったねぇ。もう少しで鉢合わせをするところだった」
「鉢合わせ……？」
「あんたの弟さ。まったく、いきなり姿を消したと思ったらいきなり姿を現して……本当に人騒がせな女だよ、あんたは……」
　右目に眼帯をしたその若い女を見やり、白明は深々と嘆たん息そくした。
「……久し振りだね、宿儺摩ま子こ……それとも『書版狩がり』と呼んだ方がいいのかね？」

THE GILGAMESH KNIGHT：3rd Chapter〈Beast Attack〉closed.

あとがきっぽいの

身体を壊しかけました。

胃いです。

消化器からでした。

こんな商売をしている以上、腱けん鞘しよう炎えんとか肩こりとかヘルニアは覚悟してましたが、それよりも先に消化器からやられるとは少し予想外でした。

まあ、壊れる二歩手前、胃い潰かい瘍ようになる前に病院へ行ったので腹に穴が空くのは回避されたので一安心です。

あー、胃薬うめぇ。

そんな状態だったせいか、やたらに白しら髪がが増えたので、久しぶりに合う人がみんなそろって「ハネタさん、そんなに髪白かったでした？」と言われる羽目に……

……僕、まだ三十になったばっかなんですけど……

しかしながらこの業界、もの書きの健康不調というのはかなりヤバゲな響ひびきです。気がついたら急速に悪化して……というニュースをよく聞きます。

思うのですが、徹てつ夜やとか何とかで乱れまくった生活サイクルを送っていると、いざというときにスタミナが追いつきません。

作家は命を削けずって書いているとよく言いますが、アレってば心理的な覚悟とか気負いとかじゃなくて真実なのだと、ようやく実感しました。

朝起きて夜寝る、それをしないだけで人間は生命力を削ってるんですねぇ。

石仮面を使ってると噂うわさされる某大御所マンガ家は、波紋の呼吸がなくても規則正しい生活を続けれるのが健康と若さの秘ひ訣けつらしいですが、出来る限り僕も規則正しい生活をしないとですね。

……と言いつつ、このあとがきも時間が押してるので深夜の三時に書いてるワケですが。

ああ、僕の生命力がまた流れでてゆく……

二〇一六年　盛夏　　翅はね田た大だい介すけ